
聖なるかな～魂の救済～

神名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖なるかな〜魂の救済〜

【Nコード】

N3182M

【作者名】

神名

【あらすじ】

俺はつまらない日々を生きてきた

なんの夢も希望なくただ惰性で生きていた

そんなとき俺が異世界に召喚された

「おもしれえ、乗ってやるよその話、契約だ」

その日から俺の日常は変わったはずだった・・・

その日常は遠い過去の物だった

過去の空白を思い出し、目的の為に俺はもう迷いはしない

誓いを果たすために……

プロローグ（前書き）

初めまして初めての投稿です

駄文ですが暖かい目で見守ってください

それではこの作品があなたにとって良き作品でありますように・・・

プロローグ

彼は日々、情性で生きてきた。

今まで彼はだたなんとなく生きてきた。

周りの奴らが高校に行くからなんとなく行つて、大学も就職に有利だと言うから行つて、そんな日々だった…

彼 - 神夜 かみや ひろき 裕樹見た目は185くらいで顔は中の上といった普通の人間だ - はそんな19年を送ってきた。

大した夢もなく、ただ漠然と生きてきた。

ただ、生きていてもなんの面白味もない日々で生き続け、そして死ぬとそう思っていた…

そう…

あの声を聞くまでは…

「変えてやろうか？そのつまらない日々を…」

キンツ、ギツ、キン、ガギン

今、彼の目の前には不思議な格好をして、剣を振り回している少女が二人。

彼を庇うように戦っている少女は凜々しい顔している。

対して、彼を攻撃してきた少女は何処か虚ろな目をしている。

何回か打ち合ったすえ、裕樹を庇っていた少女が相手の胸に剣を突き立てた。

その瞬間、相手は何故か金色の霧になり霧散して消えた。

「あなた、大丈夫？」

少女はそう言いながら振り向いた。

「あ・・・ああ、なんなんだ・・・ここは？」

彼は目の前の光景を信じられないような目で見ていた。

「ここは物部学園よ？あなたは誰？」

少女は不思議そうな顔で聞いてきた。

「俺は神夜裕樹だ。
お前は？」

彼は自分の名を答え、少女にそう聞いた。

「私？」

私は斑鳩 沙月。

物部学園の生徒会長よ」

少女は笑顔でそう答えた。

プロローグ（後書き）

書いて見て解ったんですが結構、戦闘描写が難しいです
それにしても状況描写下手すぎて自分でも呆れてしまった・・・
頑張ろう

4 / 19 修正

オリキャラ設定（前書き）

友人に聞かれたのでオリキャラの設定を公開します

オリキャラ設定

オリジナルキャラクター設定

神夜 かみや
裕樹 ひろき

左利き

銀髪緋眼

見た目年齢20程度

実年齢は不詳

ある目的があるが不明

キャラクターイメージは某アカイアクマのサーヴァント

所持している神剣

槍型永遠神剣第四位『断罪』

唯の鉄の棒の先に刃が付いたようなもの

所々に切れ込みのようなものがある

現在は使用していない

銃型永遠神剣第?位『???』

スピードモード（SM）のモデルはCZ85

鍼に近い形の弾丸に圧縮して放たれる

範囲が点にはなるがその分射程と速さがある

パワーモード（PM）のモデルはデザートイーグル50AE
SMでの鍼を球形に固め放つ

このモードでの爆発は圧縮しているマナを外に向けて空間攻撃に変えるために起こる副産物である

実質的な攻撃範囲は爆発の範囲となる

射程距離は約1km（ある場合のみ 通常時は200m程度）

特殊技

銃『エレメンタルバレット』

弾の属性を変えて放つ

ただし周りの属性にしか変えれない

無属性はマナの属性に囚われない

その他の技

鎌、鎖や十字の梁はマナをその形に固定しているだけで弾に変えているのと差異はない

しかし、弾に変えるのは神剣でオートで行われている為意識的に変えている方が威力などは高い

ちなみに銃というものは本来動いているものにはかなり当てにくい走っている相手などにはまず当たらないと言ってもいいくらい

これは本人の技能どうこうという話ではない

無論練習さえすればある程度はどうにかなるが狙ったところにはまず当たらないといってもいい

速度に違いはあれど、投げられているボールにボールを投げて当ててみるって言うているようなものである（戦闘中）

相手も動くし、自分も動かためまず当たらないだろう銃では反動も強いため狙うのはさらに困難になる

故に大概は敵を拘束するために使う

テロメア短縮という病気を持っていて生来天才である。

仮面の男（神威^{かむい}）

漆黒の髪、藍色の眼

目的、所持している神剣など全てにおいて不明

ある目的の為にこの時間樹に来た

カオス側からの依頼で裕樹と共にそれを達成しようとしているがそれとは別の目的を持っている。

槍、剣、弾、魔法など神剣による攻撃を全て無手で受け流す

今までの攻撃は全て無手である

姿は髪の色以外は裕樹そっくり

喋り方は関西弁？

テロメア短縮の治療のために作られた裕樹のクローン（体は裕樹）

マリオネット 操り人形

裕樹と神威からはマリーと呼ばれている

本名は不明

裕樹から頭一つ分低い程度の身長で腰まである銀色の髪をしている

現在は神威の所持しているカプセルに入っている

この時間樹に入る直前に裕樹に殺されている

第一話（前書き）

大分文字数は少ないですが少しずつ投稿するので長い間隔は空けないようにします

第一話

それは裕樹が学校から帰っている最中に起きた。

学校の帰り途中、孤児院を出ていつてから一人暮らしをしている彼は自炊のための材料を持って歩いていた。

「…じよ……きこ……るか？」

突如、どこからか声が聞こえた気がした。

しかし、裕樹が周りを見渡しても誰もいない。

「気のせいかな？」

疑問を持ちながらも、再び歩きだす。

「汝よ、我の声が聞こえるか？」

今度ははっきりとそう聞こえた。

再び裕樹は辺りを見回した。

「誰かいるのか？」

…俺を呼んでいるのか？」

「汝は他人とは違う…異質の存在だ。

このような日常に満足などしていないのだろうか？」

「お前は一体なんなんだ？」

なんでそう思う？」

いきなり、異質などと言われ、すこしいらつきながら周りを見回しながらそう問うた。

「汝は出来るはずなのにあえて出来ないように振舞っているだろう？
それなのにつまらないと言う方がおかしいだろう？」

「それが？」

必死に生きる意味なんてないからな。

お前は一体なんなんだ？

姿を現しやがれ！」

裕樹はそういう話が大嫌いだった。

だから、苛立ちながらそう言うと言の前にいきなり一本の槍が現れた。

「我は永遠神剣第四位断罪だ。

咎を罰し、魂を救済せしものを主とするものだ」

「いきなり現れて何ほざいてやがる？」

剣とか言いながら槍じゃねえか」

「神剣とは総称だ。

詳しくはあちらで説明しよう」

そう言うと、槍は輝きだした。

裕樹の視界は光で何も見えなくなった。

そして目を開けるといきなり虚ろな目をした少女がいきなり剣を持つて襲いかかって来た。

「危ない！」

そこに同じように剣を持った少女が裕樹を庇った。

頭に羽が生え、鎧を纏った背中が裕樹の目に写った。

とりあえず、後で説明すると言われた裕樹は斑鳩が学園内に走っていく後を追いかけた。

そこで学園内の廊下で三人の生徒が言い合っているのを見た。

「なんでだよ！」

「なんでお前が俺を殺そうとするんだ！？」

同じく鎧を纏い、手には双剣を持っていた。

「俺の目的のためだ、望」

刀を持って向かい合うように立っていた少年が言った。

「だから、目的ってなんだよ！？」

「絶！！」

望と呼ばれた少年が痙攣を起こしたように荒らげた声で問う。

「やらせない、望ちゃんはやらせない！」

そう言つて、二人と一緒にいた少女がいきなりどこからともなく槍を構えて絶という少年をなぎ払う。

「おっと」

絶は槍を簡単に弾いた。

「暁君、望君を攻撃するなら私も黙ってないわよ?」

二人を庇うように斑鳩は二人の前に立った。

「さすがに三人を相手にするのはきついな…」

絶はそう言いながら一歩後ろに下がって構えた。

「マスター、ここは引いた方が良いと思います」

絶の肩に乗っていた人形のような少女が

「そうだな…」

また会おう望、良い旅を」

絶はそう言って消えた。

「ボエエエエ〜」

いきなりどこからともなく何かの鳴き声が聞こえた。
その声が聞こえた瞬間、外の景色が変わった。

「で、あなたは一体誰なのか教えてもらえるかしら?」

数日後、生徒会室に呼び出された俺はそう問われた。

目の前には斑鳩　沙月が、その左右には世刻　望と永峰　希美が立っていた。

なんで数日経ってからそう聞かれるのか疑問になり、裕樹は問うた。

「だって、先に望君に説明しておかないといけなかったから」

そう言われたのはあの後、いきなり世刻が倒れてしまったからだ。その間に別の世界に移動してしまい、周りは森でどこを見渡しても木ばかりだ。

なんで、別の世界に来たのか裕樹が問うた。

数日前にあの時間こえた鳴き声は次元鯨と呼ばれる鯨のものだ。

その次元鯨は永遠神剣と呼ばれるものの神獣だ。

永遠神剣よって神獣は違い、斑鳩のはケンタウロスのように望のは絶のと同じような小人だった。

それぞれ、ものべー、ケイロン、レーメという名前という。

「俺は神夜　裕樹。

あの時そう名乗っただろう」

裕樹は同じことを言うのが面倒なのでため息をつきながら言った。

「だから、なんであそこにいたのか聞いてるのよ。

あなた、この生徒じゃないでしょう？」

「知らん、俺は気づいたらあそこにいて、いきなり変な少女に襲われた」

裕樹が移動する前の世界で襲われた虚ろな目をした少女はミニオンという生き物で、マナによって作られた存在だ。

「それじゃあ、なんであそこにいたの分らないのね？」
「だから、そういつているだろう」

裕樹はそうそっけなく返した。

一応なんとなくあそこにいた理由は分かるのだが、神剣のせいだとは思うがいきなり敵になる可能性があるので言いはしなかった。

いきなり別の世界に連れてこられて味方がいないのはとても危険だからだ。

「はあ、まあとりあえずあなたも巻き込まれたみたいね」

斑鳩はそう言いながらため息をついた。

「みたいだな、でこれからどうするんだ？」

「そうね、とりあえず生徒には説明は終わってるからあなたも一緒にいてくれていいわ」

次元移動する時に学校ごとしてしまい、そのとき学校に残っていた生徒も一緒に連れてこられた。

「わかった」

裕樹としてはこれまでの人生がつまらなく、無意味な物だったから反対する気もなかった。

これまでもこれからも無意味で価値のないと思っていたからだ。だから、裕樹にとって平凡な日常を送るのもこのような状況になるうとも同じ。

とりあえず、斑鳩たちは森に食料を取りに行くらしく三人とも少数の生徒を連れて行ってしまった。

裕樹は暇なので与えられた部屋で寝ることにした。

与えられた部屋で寝ていると裕樹を呼ぶ声が響いた。

「汝よ・・・目覚るがいい」

いきなり虚空からそう響いた。

裕樹が目を開けると目の前に一本の槍が浮かんでいた。

「槍？

断罪か・・・」

「そうだ。

どうやら無事にこの世界に着いたようだな」

「どこが無事にだ。

危つくミニオンとかいう奴に殺されるとこだったぞ」

「今、汝が生きていることには違いがあるまい？

汝よ、我と契約をせぬか？

そのために我は汝をこの世界に呼びおせた」

「お前な、そういうことは飛ばす前に説明するもんだろが・・・」

裕樹は呆れながらため息をついた。

「そうだ。

いきなりしたのは悪いが汝はつまらなそうにしていたからな」

「つまらない...か。

...で？

契約をするとうなるんだ？」

「そうだな…汝は身体的強化を得る。」

それにつまらない日常とはかけ離れた戦いの日々になるだろう」

「いきなり飛ばしておいて選択権はないだろうが…」

いいだろう、退屈だったからな契約してやるよ！」

裕樹はそういういながらにやりと笑うと断罪はに満足したのか消えていった。

その時、いきなり頭の中に声が響いた。

「主よ。」

どうやらミニオンが一匹こちらに向かっておるぞ」

「うわっ、気持ち悪！」

声が響いてきやがる」

「契約した主とは念波で会話ができるのでな。」

それよりどうするのだ？」

他の神剣士は出かけておるのだろうか？」

「まだ、戻って来てないのかよ。」

あいつらは」

「このままでは残っている生徒が皆死んでしまうぞ？」

裕樹自身は生徒達はどうでもいいが、あいつらはそうではないだろう。

そう考えて彼は行動を開始した。

「ち、仕方ない迎撃するぞ」

そう言いながら裕樹は校庭へ飛び出した。
ちょうどそこへミニオンがやって来た。

「行くぞ、断罪！」

裕樹は槍を取り出しながら跳びかかった。

…斑鳩 side in…

「沙月先輩！もののべーがミニオンが学校に入ってたって言ってます！」

そう希美ちゃんがいきなり言った。

慌てている様子から嘘ではないことが分かる。

「ええ！？

だとしたら早く戻らないと、みんなが危ないわ！」

そっぴいなから学校に戻ろうとした。

しかし、すでに入っているとやっていることから間に合わない。

けれど、このままここに居るわけにもいかない。

「それがあの神夜さん？

が、どうやら戦っているらしくて・・・」

「どういうこと？

とにかく戻らないと、私は先に行くから希美ちゃんと望君はみんなを連れてきて！」

「わかりました！」

そう言って私は駆け出した。

「どういうこと？彼は神剣士なの？」

…斑鳩 side out…

裕樹は槍を持って攻撃していた。
相手が剣ということもあって、有利に攻撃できている。

「せい、はっ、くっ」

しかし、裕樹は人に対して攻撃なんてしたことがなく、やや戸惑っていた。

それでも相手は変わらず攻撃してくるので迷うわけにはいかなかった。

殺さなければこっちが殺されるのだから。

「ちっ、やりづらいな・・・」

「しかし主よ、やらなければ主がやられるぞ」

「んなこと言われんでもわかってらあ！

おら、止めだ！」

そして相手の胸に槍を突き刺した。

それでミニオンは金色の霧となって消えた。

「くっ、やっぱり後味わりい」

人を殺したことの無い裕樹は相手が消えることに安堵していた。死体を見ると後悔して嘔吐するだろうと思うから。

ちょうどその時、校門に斑鳩が走ってきた。

「あなた、神剣士だったの？」

そっぴいながら剣を構えた。

「おいおい。剣を下ろせ、こっちにやる気はねえよ」

そう言って、裕樹が武装を解くと斑鳩も剣を下ろした。

「どっぴいことか、ちゃんと説明してもらっぴからね？」

そっぴいって斑鳩は笑っぴていた。

「笑顔のわりに結構怖いぞ」

裕樹は溜め息をつきながらそっぴ呟いた。

第一話（後書き）

4 / 2 2 修正

第二話（前書き）

週一で投稿しようかと考えてます。
ネタはあっても書けない。
文才が欲しいです。

第二話

「で？どうして神剣を持っていたことを黙っていたの？」

また、生徒会室に連れてこられた俺は斑鳩にそう問われた。

「別に黙っていたわけではないさ。あの時は持っていなかったからな」

俺は正直に答えることにした。

「お前らが食料を取りに行ってる間に一眠りしようと思って部屋で寝ていたら、いきなりこいつが目の前に現れてな」

そう言つて、俺は断罪を取り出した。

「で、俺はこいつに契約するためにあの世界に・・・君達の世界に呼び寄せられたというわけだ」

「それで、あんなところにいたんですか？」

と永峰が聞いてきた。

「みたいだな。まあ、俺としては別に文句はないからいいんだがな」
「いきなり召喚までされたのに、軽いですね神夜さん」

そう世刻が苦笑しながら言った。

「まあ、つまらない日々だったからな。後、裕樹でいいぞ」
「じゃあ、裕樹さん。私たちに力を貸してくれませんか？」

斑鳩が真面目な顔をして聞いてきた。

「別に構わんぞ」

そう言うと、三人が笑顔に顔を見渡してた。

「だが、俺に対して不利益になるようなら俺はしないからな」
「もちろんよ」

と言つて斑鳩は笑顔で頷いた。

「じゃあ、明日からは人がいるところを探してみましょう」

現状とこれからの方針を話し合った後、俺は断罪に慣れるために断罪を振るっていた。

突き、なぎ払い、突き上げと色々な槍の基本動作を一通り繰り返していた。

二、三時間はしていただろうか・・・日が落ちてきたので終わることにした。

汗を拭いながら部屋に戻ろうとしていたときに不意に断罪が話しかけてきた。

「主はこれから先、辛い目に遭うことになるだろう。今まで主が目を背けてきたことに受け入れなければ、さらなる苦痛を味わうことになるだろう」

「ん？どついう意味だ？俺が目を背けてきたことがあるということか？」

聞き返してみたが断罪は何も答えなかった。自分で分かなければ意味が無いようだ。

俺は肩をすくめながら部屋に戻った。飯を食うために食堂に行ってみると、そこはもうすでに多くの生徒が世刻達が狩ってきたというイノシシを食べていた。

「つか、これだけの奴らが食えるサイズってどんだけでかいんだよ」
呆れながらもとりあえず食べることにした。思いのほか味はよく満足はできた。

どこか真っ暗な空間、周りを見回しても何も見えない。不意に目の前に人影が見えた。

一面を覆い尽くすような大量の人、人、それが一点を見つめている。

そちらを見ると一人が立っていた。

「俺！？」

それは背格好も見た目も俺に似ている。そして持っている武器さえも断罪のように思えた。

そして、俺に似た人物は槍を構えて大量の人に向かって行った。人々の中に突っ込んで行ったかと思えば、突如人が飛んだ。

一人や二人どころではない。一度に数十という人が飛んだのだ、否、飛ばされた。

一人の人間によつて何百もの人がまるで風に舞う草の様に。

ところどころから悲鳴が聞こえる。「助けて」や「止めて」などの声までも。

それでも止まらない、たった一人の人間によつて何百もの人が蹂躪されている。

もはや人としての形は保たれていず、腕は千切れ、体は分断され、顔は潰されていた。

俺はその光景を受け入れられないのか、ただ呆然と見ていただけだった。

「助けて・・・」

誰かに服の裾を引っ張られた感触がしたのから下を見ると、子供がはいつくばりながらも、必死に俺に助けを求めている。

俺が抱き起こそうと屈んだ瞬間、その子は俺の目の前で真っ赤にはじけ飛んだ。

「あ・・・ああ・・・うわああああ」

俺の手は血だらけになり目の前には俺に似た人物が立っていた。

「なんで！？まだ子供だぞ、なんで殺したんだ！？」

「俺の目的のためだ」

そう言つて、そいつは消えていった。

俺はそこで目が覚めた。俺は急いで洗面台に行き嘔吐した。

「なんなんだよ・・・いまの夢は・・・目的のためだと？まるであいつのようじゃないか・・・」

目的のためになんでもする。その行為は俺の古い記憶に眠る、あいつの考え方と同じだった・・・

「あいつが俺の目を背けてきたことなのか・・・」

その間に誰も答えてくれはしなかった。

第三話

翌朝、この世界・・・剣の世界と呼ぶことになった・・・には次元移動しようにもプロテクトがかかっているらしく、元の世界に戻るができないそうだ。

その為、外に情報を探す必要がある。ということで、どう行動するか話すために生徒会室に行くと三人が、なにやら鏡のようなものを覗き込んでいた。

「おはよう」

「おはようございます。あれ、顔色悪いですよ？」

「いや、なに。夢見が悪かっただけだ。ん？なんだ、その鏡みたいなのは？」

永峰に心配されて何でもないように答えながら鏡のようなものを聞いてみる。

「これはものべーの力で遠くの景色が見えるんですよ」

「ほう、それは便利だな。神剣は本当になんでも出来るな」

「そういえば、裕樹さんの神獣はなんなんですか？」

「いや、知らんな・・・断罪に聞いてみよう」

「ふむ・・・本来ならば我も神獣がいるのだが、今はいない」

「ん？どういうことだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

断罪はそれっきり答えてくれなかった。

「はあ。まあとりあえず、いないようだ」

俺もそう言いながら画面を覗き込んでみるとまるでテレビのように
はつきりと見える。

「ほう、予想以上に鮮明に映るな」

すると同じく一緒に覗き込んでいた世刻が一点を見つめながら言い
出した

「何でしょうか・・・あれは？」

そう言われ、俺も注意して見ると煙が立ち上っているようだった。

「あれは・・・どうやら煙のようだな」

「煙が上がっているところに視点を切り替えますね」

永峰が言っていると画面が切り替わった。

「・・・・・・っ！」

全員が息を飲んだ。

そこは俺が見た夢のような光景だった。

多くの人々がミニオンによって惨殺されている状態だった。

指揮する男によってミニオンが動き人々が殺されていく光景だった。

大人が立ち向かってでも為す術もなく殺され、逃げ惑う人も後ろから
斬り殺される。

夢で見た時よりも生々しく、そして酷かった。

世刻や永峰が助けに行こうと言ったが、俺と斑鳩は反対した。

今から行っても遅すぎるし、仮に間に合ったとしても今度はこっち
まで狙われることになる。

俺たちだけならまだしも百人以上の一般生徒もいるのだ。

彼らが狙われる可能性もあるからだ。

不意に指揮していた男がこちらを見て、にやりと笑った。

「む！？い、いかん！あやつ、こちらの目に気が付いてるぞ」

世刻の神獣レーメが叫んだ。

皆が画面を見るとミニオンになにか言っているようだ。

二、三指揮されたくしくミニオンが一斉に動き出した。

「ち！こっちに来るつもりだろうな。斑鳩、迎え撃つぞ！」

「そうね、校庭で迎え撃つと生徒も危ないからこっちも出るわよ！」

「はい！」

三人でできるだけ学園から離れて迎え撃つことにした。

敵の数も分らないのだ。

下手に分散するのは自殺行為だろうからだ。

斑鳩だけは一般生徒を避難させているから少しここに来るのが遅くなるだろう。

「永峰は俺たちを防御でサポート、世刻は全力で攻撃しろ！俺が補助をする、いいな？」

「はい！」

二人を指示していると周りに殺気が満ちた。どうやらミニオンはかなり来ているようだ。

「さすがに数が多いかもな・・・気をつけろよ」

その言葉が合図になったか、ミニオンが一斉に襲ってきた。世刻が敵を攻撃し、俺が攪乱、永峰が攻撃を防いでくれる。だが、俺たちはだんだんと疲弊してきた。

「く、さすがに数が多いときついな」

途中から斑鳩も参戦してくれているが如何せん、敵の数が多すぎる。

「あと一人いてくれたらいいのにね・・・」

そう言う斑鳩の顔にも、疲労が色濃く見えている。

「ち、無いものねだりしたって意味はない。もう一度突っ込んでくる」

「ええ！？危険ですよ！」

「仕方ないだろう。現状を打破するには、賭けにでるしかないだろう」

「むっ？・・・待て！何か来る！？」

レームがそう叫んだとき、敵の後方が崩れそこから金色の髪をし、漆黒の鎧を身に纏、大剣を持った少女が飛び出してきた。

「大丈夫ですか！？加勢します！我が名はカティマ、カティマIIアイギアス」

「助かる、話は後でしょう。今は現状を打破するぞ！」

俺の掛け声で全員が敵に向かって行った。

「神剣の主として命ずる、我が敵を拘束し、断罪せよ！」

俺がそういうとミニオンの背後に魔法陣が現れ、巨大な十字架が出てきた。

ミニオンが鎖で十字架に拘束された。まるでキリストが殺された時のように・・・

「汝の罪を悔いるがいい。デッドリーシン！」

俺は言いながら、マナで出来た一本の杭をミニオンの心臓に投げつけた。刺さった瞬間、ミニオンは霧となって消えた。

「ふう・・・これで終わったか」

「ええ、そうみたいね」

斑鳩が答えると皆が集まってきた。

「アイギアスと言ったか・・・助かったよ」

「いえ、それよりも天使様。力を貸して下さい」

アイギアスは片膝をつきながらそう言った。

「・・・はあ？」「」「」

俺たち四人は顔を見合わせた。

第四話（前書き）

テスト期間に入ります
全然勉強できないのに・・・
書いてる暇無いかもしれません
てか、祭日に授業とありえねえ

第四話

どうやらアイギアス・・・カティマ（カティマと呼んでくださいと言われた）はどうやら、俺たちがものべーでこの世界に来たのを見ていたそうだ。

それで俺たちの場所がわかったらしい。天使というのは・・・天空を裂きて現れしは、天よりの使い・・・らしくそのような伝承があつて俺たちを天使だと思つたらしい。

その後、カティマの計らいで彼女の村に行くことになった。安全になったということと一緒に生徒に伝えると何人かの生徒まで行きたいと言ひ出した。

とりあえず、村に行きたい生徒を連れて行くことにした。とはいえ、学園に残る生徒もいるので永峰が学園にくつついている本体のものべーから一部の魂を切り離し、小さくしてつれていくこととなった。

「ものべー・・・便利すぎるだろ・・・」

俺は呆れながら、そう呟いた。

一緒に行きたがつた生徒も連れて総勢数十人という大人数で村に向うこととなった。

カティマは村人に説明するために、先に村に向かっている。村に着くと俺たちの姿を確認するやいなや、家に入つたかと思えば一斉に武器を持つて村人が俺たちの周りを囲んだ。

「おいおい、いきなり物騒じゃないか」

俺は断罪を構えながら警戒しつつ言った。

斑鳩たちも神剣を構えると村人たちは一歩後退りながらも、さらに警戒を強めた。

「俺たちはカティマに言われて来たんだ」

世刻がそう言つと村人たちが顔を見合わせてところどころから「カ

ティマ様が・・・」というような声が聞こえた。

「皆さん、大丈夫ですか!？」

そのとき、村人たちの奥からカティマの声が聞こえた。

「皆さん、この人達は敵ではありません。だから武器をおろして下さい」

「カティマ様が仰られていた人達はこちらの方々ですか。もしやダラバの手の者かと思いましたので・・・お客入方、失礼しました」

「皆さん、場所を変えましょう」

カティマがそう言い、俺たち神剣士がついて行き生徒は村にさせることにした。

「どういうことか説明してもらえるかしら？」

一つの家に入ると斑鳩がカティマに質問した。

どうやらこの国はアイギアといい、王族が国を仕切っていたがダラバという者（画面で見た男らしい）がクーデターを起こし、それが成功したらしい。しかしおそらく唯一の神剣士であるカティマが頭とし王国軍が抵抗ミイクンして、行動しているとのこと。

しかしダラバは鉾ミイクンを使用しており、それに対して対抗できるのが神剣士だけなのだが、現状ではカティマしかないそうだ。

そこで神剣士である俺たち四人に、協力を頼みたいそうだ。

俺たちの答えはこの世界にプロテクトを張っているのはダラバである可能性が高いので生徒たちに危険がない限り、協力することに決めた。

ダラバも神剣士で、ミニオンも使えることから俺たちだけしか戦えないこともあり、できるだけ戦力を増やしたいのは俺たちも同じだからだ。

生徒たちも元の世界に戻りたいこともあって、皆に認めてもらうこともできた。

協力する代わりにカティマについてきた兵士たちに生徒の安全を守

ってもらったことにした。

「もちろんです。あなた達にとって大切な仲間であるのですから」とカティマも快く申し出を受けてくれた。カティマの側近である、クロムウェイさんにも了承してもらえた。

先ずはアズライールを奪還することを目標にそこまでの道のりにある二つの街・ラダとシーズーの街・をどちらを通っていくかを決めることになった。

「アズライールに到達するには二つの道があり、それぞれラダとシーズーの街があります。どちらの街にも鉾と兵士が配備されており、

クロムウェイが斥候からの報告をし、ラダには兵士がシーズーには鉾が多く配置されているそうだ。

ラダに二人を、シーズーには三人で行くことになった。それで誰がどっちに行くかを話しあっているはずなのだが、斑鳩と永峰が世刻と二人でラダに行くと言い出してどちら也讓らないのだ。

「はあ・・・愛されているな。世刻」

「あはははは・・・」

俺と世刻は呆れていた。

「ああもう、お前ら落ち着け。俺と世刻が行けばいいだろう」

二人が世刻のことを好きなのは分かりやすいのでカティマと行かせても反論するのは火を見るよりも明らかなので、俺と行くように提案した。

「それならまだ・・・」

と二人は一応妥協はしてくれたようだ。

「戦争するのにお前らはずいぶん呑気だな・・・」

俺たち二人は両方とも攻撃タイプなのだが少ないのならなんとかなるだろう。俺は呆れながら一抹の不安を感じていた。

第四話（後書き）

ちよつと、伏線張りすぎたような気もしないような・・・
誤字や意見に関してさまざまな発言お待ちしております

第五話

実際、報告の通りミニオンの数は少ないようだ。少ないとはいえ、俺たちはまだ神剣を持って日が浅い。

素人である俺たちがが戦闘人形と戦えているのはひとえに神剣の位のおかげだ。

神剣とは数字が小さくなるほど強くなるのだ。位だけでいえば俺の断罪が一番強いことになる。

といえ、鍛錬しているカティマと一対一で戦えば負けるだろう。だからミニオン相手でも数が多ければ気を抜くことはできない。

これは殺し合いなのだ、油断すればこっちが殺される。

故に俺は断罪を振るう。殺されないために。殺すために。

「ふう・・・なんとか勝てそうだな」

「世刻、危ない！」

世刻が気を抜いた瞬間、死角からミニオンが攻撃してきた。世刻を庇うためミニオンの前に立ちはだかろうとしたが攻撃すれば世刻まで傷つけてしまう可能性がある。

体で庇おうと間に入り、ミニオンに対処しようと振り向いた時にはもう目前に迫っていた。

「しまっ・・・」

ぐさっ！！

ミニオンの剣がわき腹に深く刺さり血は噴出し、すぐさま霧となって霧散する。

俺は立っていられなく膝をつき、血反吐を吐いた。

・・・あ？俺はこんなところで死ぬのか？まだ約束を果たしていないのに！約束？誰と？いつ？どこで？どんな内容で？何のために？・・・

・
脳裏に浮かぶ一人、女なのか男なのかそれすら分からない。でもそいつと約束したことは思い出した。否、覚えている。

・・・ならば、ここで終われない！どんなことがあるうとも、約束を果たすまでは終われない！！・・・

不意に脳裏に夢の光景が蘇ってきた。今度は第三者の視点ではなく。殺す側の視点で。

体が勝手に動き、双剣を振るう。逃げ惑う人々に対して振るう。

悲鳴が聞こえようが命乞いをされようが構わずに振るう。

「うわああああ！やめろ、やめろ、やめろ！」

止めようとも体は止まらない。

∴裕樹side out∴

∴世刻side in∴

裕樹さんとともに戦い始めてどれくらい経っただろうか・・・互いに消耗はしてきたが、ミニオン相手では負けはしないだろう。

所詮、下位の神剣なのだと侮っていたのだろう。そんな慢心のせいだろうか、死角から迫るミニオンに気づかなかった。

「世刻、危ない！」

裕樹さんの声で気づき振り向いたが遅かった。目前にはミニオンが迫っていた。対処は間に合わない。

せめて致命傷を避けようとした瞬間、何かが目の前に立ちふさがった。いきなり裕樹さんが体ごと俺を庇ったのだ。

そして次の瞬間、目の前が血で真っ赤に染まった。

「裕樹さん！？このっ！！」

攻撃してきたミニオンを袈裟切りに払い落とし、止めを刺した。

裕樹さんの状態を見ようと駆け寄ると、いきなり顔を上げ、すくみ

上がるような殺気でこう言った

「よこせ・・・貴様の力をよこせ！」

「何を!？」

そこでいきなり虚脱感を感じた。体の力・・・いや、生命力が抜けたような感じがした。

いきなり裕樹さんは立ち上がると敵に突撃していった。

そこからの光景はまるで最初に見た村の光景のようだった。

ミニオンがまるで子供のように裕樹さんに殺されている。目にはどうでもいいと思っているのかなんか感情も見えない。

武器も断罪である槍ではなく、俺の持っている黎明のような双剣だった。

「裕樹さん・・・あなたは一体・・・」

その光景は知っている者が見るところ言っただろう。

「まるで破壊神ジルオルのようだ」

裕樹さんはミニオンを全て倒すと、その場に倒れてしまった。

裕樹さんが倒れたとき抜けていた力が戻ってきたような気がし、先程までの虚脱感がなくなっていた。

俺は急いで駆け寄った。

∴世刻side out∴

∴裕樹side in∴

「∴ろ∴さ∴、ひ∴さん！裕樹さん！」

「はっ！」

世刻に名を呼ばれ、それで現実に戻れたようだ。

（なぜ夢の光景が・・・それに俺がしていたのは・・・）

「裕樹さん、いきなりどうしたんですか？俺を庇った傷も消えてますし・・・それにすごい速さで敵を倒していったんですよ？」

俺が考えていると世刻は少し顔色が悪くなっていたが心配そうに俺のことを訪ねてきた。

「いや、俺にも何があったのか・・・気がついたらお前に声をかけられていた」

（庇ったときに負った傷は致命傷だった・・・それなのに今は跡すらない？ミニオンどもを倒したのも俺のようだし・・・

なににせよ、問題が山積みの今さらに増やすわけにはいかないな・・・）

「世刻、今この場であつたことは黙っておけ」

「え！？なんですか？死にかけていたんですよ！？ちゃんと見てもらわないと・・・」

「なんででもだ、今さらに問題を増やすわけにはいかないだろう。それに傷については跡すらないから大丈夫だ」

世刻は納得は出来てなさそうだが皆に黙っててはいてくれるだろう。

「よし、ミニオンもいなくなったようだし合流するか」

「そうですね。黙っててはいますが無茶はしないで下さいね？」

「ああ、分かったよ」

世刻の最大の譲歩だろうと理解し、頷いておいた。

第六話

∴???side in∴

裕樹が暴走し、ミニオンが殲滅される場面を一人が見ていた。

「ふっ・・・どうやら奪ったときに少しだけ残滓があつたようだな。しかし、不完全だったか。流石に今のままでは破壊神を取り込むのはやばいからな。」

それだけは僥倖だったか・・・記憶に関してはどうだろうなあ？全てを思い出したとき、お前を支えてくれる仲間が得られるといいなお前のしたことを・・・彼女のことを・・・全てを思い出せよ、その為にも強くなれ・・・俺の目的のために・・・」

一人がある人物をどこか悲しげに見つめながら去っていった。

∴???side out∴

∴裕樹side in∴

ラダの街を制圧（開放？）したことを一応、伝令でシーズーの本隊に知らせることにした。

あのこと・・・俺の豹変のこと・・・は兵士がラダで敵兵を相手してくれていたのが幸いで誰も見ていなかったようだ。

見られていたら兵士達にも動揺があつたかもしれないのだ。それだけ神剣士は強力でそれが暴走したなどは知られたくない。

そのためにも世刻に黙っているように言ったのだ。とはいえ、世刻はお人好しだ。

・ 確実に俺のことを気遣うだろう。それではなければならないのだが・・・

ラダで兵士と後始末のために小休憩することになった。

ミニオンならば消えるのだが、人間の兵士はそうはいかない。

ダラバについている兵士も結構多く、味方にもそれなりの損害が出ている。

「ふう・・・やはり強い方にも人は集まるのだな」

「なんでひどいことをしているのに集まるのでしょうか？」

世刻には理解できないようだ。悔しそうに歯噛みしている。

「それは色々な見方によって善悪は簡単に変わってしまうからだ。

それに人は死にたくないだろう？ならば正統とはいえ、一人しかない神剣士につくか、ミニオンだが人にとっては抵抗すらできないのが多くいる方が・・・弱き者は強い方につくしかないんだよ」

「それでも・・・それでも！多く集まればなんとかなるでしょう！？」

世刻が声を大きく上げ、反論する。

「ならば、お前は弱い町民達を犠牲にしても勝つつもりか？それをすれば王にはなれんことをカティマは理解している。

だから逃げる者を殺すことを兵士たちに禁じているだろう。誰もダラバに味方したいわけではないんだ。勿論、例外は存在するが・・・街の人たちも笑顔になっっているだろう？今はそれでいいじゃないか」

「そう・・・ですね・・・」

世刻はそれっきり、黙ってしまった。レームと会話しているのか考えているのか、それとも両方が・・・どちらにしろ人は悩み、行動することで成長できるのだ。

（俺も自分の何かを思い出さないと・・・あいつも関係あるみたいだしな・・・）

俺たちは空を見上げた。そこには鳥が空高く飛んでいた。伝令を送ってしばらくしたら伝令が帰ってきた。

どうやらシーズーの方も開放できたようで、アズライルの南で合流する予定らしい。

俺たちはラダに少数の兵士に後を任せ、本隊に合流するために駆け出した。

アズライル近郊に近づくと前方に剣戟や魔法による爆発音が聞こえてきた。

おそらく哨戒していた鉾と戦闘しているのだろう。見える範囲まで行くとサポートしている斑鳩の後ろからミニオンが襲いかかろうとしていた。

「ちっ・・・させるかよ!」

走っていつては遅い、俺は断罪を掲げ詠唱を開始する。

「今までの己を振り返り、犯してきた罪の縛鎖を受け、魂による永劫破滅を受け入れる・・・ソウルイーター!」

ミニオンに鎖が絡みつき、動きを封じ、首をマナで出来た鎌が通過する。

通過したにも関わらず、首は繋がったままミニオンはそのまま霧となり、霧散した。

「ありがとう、助かったわ」

「礼は全てが終わってからにしましょう。斑鳩先輩」

世刻が残っているミニオンに突撃しながら斑鳩に言う。斑鳩はそうねと言いながら皆のサポートに戻っていった。

敵を殲滅した後、事情を聞くとどうやら哨戒に出会ったのは確かだが、一人取り逃がし、仲間を呼ばれたようだ。

だがおそらくアズライルにいたミニオンはほとんど倒したと見たといいだろうということで、俺たちは休憩もそこにアズライルに向うことにした。

街に着く直前、警備していたミニオンと戦闘になった。

とはいえミニオンといえども少数では相手にもならなかった。

早々に戦闘が終わり、アズライールに入るとそこは既に戦争の跡のような光景だった。

戦争などという生易しいものではなかった、これはもう虐殺だ。抵抗できない者を殺すという行為だった。

動く者はいず、家などの建物は全て燃えてしまい残り火がある程度だった。

生臭い煙の匂いに俺たちは鼻を覆う。

「ひどい・・・」

斑鳩がそう呟いただけだが気持ちは皆一緒だったろう。人の焼ける匂いは今まで嗅いだことのない気持ち悪さだった。

街の広場に着いたとき近くで物が動く音がした。全員でそちらを見ると一人の男がかるうじて歩いていった。男は力尽きたのか、倒れてしまった。

カティマが倒れる男性をに駆け寄り、俺たちが後に続いた。

俺たちが駆け寄ったときには男はもう死んでいた。

「あ・・・ああ・・・あああああああ！！」

カティマの叫びが街に響いた。己の無力さを呪うかのように、後悔の念が聴いているだけで伝わってくる。

彼女の平和に賭ける想いが、決意が、覚悟が、救えなかった者に対する謝罪までもが・・・

その後、カティマは想いつきり叫ぶと気力が尽きたのかその場に倒れてしまった。

おそらく、過労だろう。精神的に限界だったのだろう。

「虚しいな・・・」

俺たちはアズライールの街で死者を弔っていた。来世では人生をま

つつとできるように、幸せな人生を送れるように祈りながら。

俺たちは身を持って戦争の恐ろしさ、儚さを知った。

俺たちは目を覚ましたカティマから王の生き残りであること、王位継承には証が必要であることを教えられた。

俺に関しては王の生き残りであることに對して予想していたから驚かなかったが、他の三人は驚いていた。いくら神劍士でもたかが少女に側近がいたり作戦會議に出れるわけがないからな。第一名前で気づけよ。

（世刻に関してはラダでそれっぽい事を言っただつたのだが・
・ここまで鈍いか、頑張れ二人とも・・・）

世刻を思ふ二人が不憫に思いながら、話を進める。

「で、その証とやらは何処に、手に入れるにはどうするんだ？」

「それが・・・」

どうやら、継承に必要なことしか教えてもらってないようだ。

王都を奪還しただけでは終わらないということか。

それも並行して探さないとな・・・先は長そうだ・・・

第七話

漆黒、目の前に広がるのは暗闇のみ。俺の手の中には一人の少女。血にまみれ、銀色の腰まで届く髪は血で色褪せている。

俺の後ろにはうつ伏せに少年が倒れていた。髪は俺とは逆に白で針金のように逆立っている。

二人に共通しているのは血まみれであることと、体中に杭が刺さっていることだった。

「良かった・・・戻って・・・」

そう少女は言いながら、満足そうに俺の頬を撫でている。

「ごめん・・・ごめん・・・」

俺は泣きながら謝ることしかできなかった。

不意に俺の後ろの少年が起き上がり、悲しい目をしながら後ろから俺の胸元を素手で貫いた。

「俺はお前に救われた。その借りを返すな・・・心を強く・・・」

俺はそこで意識が途切れた。

翌朝、俺は夢見が悪かったのか昼前まで寝ていた。

当面の目標であったアズラールを奪還したから、次の作戦について話しあうために生徒会室に向かった。

「悪い、寝過ぎした・・・どうした？」

生徒会室に行くと斑鳩、世刻、永峰が大慌てしていた。

「カティマさんが・・・カティマさんがいなくなっただんです！」

「何!？」

永峰の言葉に驚いた。

話を聞くとどうやらカティマは証を探しに次の町であるアズラーセに向かったとのこと。

「そこまで、責任を感じていたか。一人で行くとは馬鹿かあいつは・
・・」

俺は怒りを通り越して呆れ果てた。

「早くカティマを追いかけましょう!」

「ダメよ、ここから先は敵の領地なのよ? 一般生徒たちを危険に晒すわけにはいかないわ」

世刻の言葉に渋る斑鳩、しかし部屋の外にある気配に気づいた俺は
「斑鳩、どうやらその一般生徒が来ているようだぞ?」

部屋のドアを全開に開いた。

「うわあああ」

「きゃあああ」

世刻達のクラスメイトの森と阿川といったか、いきなり開いたドア
にくっついていたのか、二人は倒れ込んだ。

「カティマさんを追いかけましょう」

森が斑鳩の目を見て、はつきりと言った。

一般生徒たちにもカティマが先走ったことは伝わっていて、この二
人をはじめ何人かが他の生徒たちを説得して回ってきたそう。

斑鳩も一般生徒たちにカティマのことを仲間と言われ、生徒たちの
覚悟を認めたようだ。

「なら、仲間を連れ戻しに行きますか」

世刻がそういうと皆が頷いた。

∴ カティマ side in ∴

私が継承の証を探しに出たせいで街が危機にさらされている。

街に大量の鉾ミイオンが迫っているのだ。

ダラバの圧政を止めることの出来るのは正統な後継者である私だけ・

・
・

しかし、そのために証を探すことを理由にこの街を見捨てていいの

でしょうか？

・・・答えは否！

人を見捨てる者に王になる資格は無いと私は思う。

それだけでなくとも、私は見捨てることなどではしない。

だから私は名乗り出る、もうあんな想いをしないために、後悔しないために全力を尽くします。

「我が名はカティマ！カティマ！！アイギアス！！」

たとえこの身が朽ち果てようととも街の人を守って見せる！

私は名乗りながら鉾を止めるべく、北門に向かう。

街の人が逃げる時間をかせぐために、仲間が追いかけてきて、保護してくれるまでの時間のために。

私は鉾に斬りかかった。

所詮は鉾、カティマの相手ではない。だがしかし、多数に襲われては対処が追いつかない。

徐々に傷が増えてくる。襲いかかってきた一人を鉾を切り捨てた瞬間に、後ろからさらに鉾に襲われた。

「しまっ・・・っ!？」

私に襲いかかろうとしていた鉾が何かに貫かれ、霧散した。

消えた鉾の後ろには一人の男が立っていた。

「お前にここでいなくなれるのは困る。アイツのためにも・・・」

男は見たこともないような武器を持っていた。

手のひらに乗るような小さいサイズの筒のような物を両手に持っていた。

顔は仮面をしていて分からないが武器は神剣なのだろう。

そこからは男が一人で鉾を圧倒していた。

武器からマナの塊を放ち、鉾を貫く。

攻撃をかわす様はまるで舞のように見える。武の極地に至った者の戦闘だった。

一体どれほどの鍛錬を積みばそこに至れるのか・・・私は男に見とれていた。

しかし、その戦い方はどこかで見たことがある気がする。

「ふむ、アイツが来たようだな」

「え・・・？」

男は鉾を殲滅し、南の方角を見た。私もそれにつられて見てみるとそこにはものべーが浮かんでいた。

「ここまでだな・・・まだ、アイツに会うのはまずい。じゃあな、もつと仲間を頼りなよ。あと、これを受け取れ」

男はそういうと左手をこちらに向け、次の瞬間で姿が見えなくなつた。

「魂の救済者に宜しくな・・・」

私の意識はそこで途切れた。

∴ カティマside out ∴

∴ 裕樹side in ∴

アズライーセに着くとカティマが北門で倒れていた。

周りは明らかにミニオンと戦闘した後があつた。

カティマを起こし何が遭つたのか聞くと、最初は一人でミニオンと戦っていたが危ないときに見知らぬ仮面を付けた男に助けられたと言う。

男の武器について説明されるとおそらく二丁拳銃であると思われる。拳銃は一对一であれば、まず最強の武器になり得るだろう。

カティマが見惚れるほどの武であるならば尚更だ。

名前も言わずに去っていったようだが、言っていた言葉から俺たちの誰かを知っているようだから、また会うことになるだろう。その時に敵でないことを祈っておこう。

男が受け取れと言った瞬間にカティマに何かが入ってきたらしく、どうやらそれが継承の証である、プロジア文書らしい。

形ではなく、記憶で伝わるもののようなのだ。

本来、証があるという情報があつた街であるミストルテに念のため

向かうとそこは既にミニオンから開放されていた。

おそらく例の男がしたのだろう。なんのためにしたのか気にはなつたが考えても詮なき事なのでやめた。

数日後、カティマが正式に王位継承者であることを発表し、ダラバに和平を出した。

俺には理解不能だった。ダラバは明らかにカティマと戦うことを望んでいたことが予想出来たからだ。

もし、国を支配したいだけならば、民にカティアを出せば圧政にしないと言っただけでカティマを差し出すことが分かるからだ。

嘘か真かは関係ない、民はそれにすぎるだろう。

それにカティマの性格上、拒みはしないだろうしな。

だから、やるだけ無駄だと言ったがカティマは少しでも可能性があるならばと言っただけで聞かなかった。

さらに数日後、予想通りダラバは拒否し使者は首だけが帰ってきた。そのことによって、カティマは正式に宣戦布告、戦争が始まった。

コレもまた一つの日常 其乃一（前書き）

まあ定番の話的に作ってみました

コレもまた一つの日常 其乃一

カティマの平和の使者を出す前日。

「大分裕樹さんの服、ぼろぼろになってきましたね」

神剣士全員が生徒会室に集まっているときだった。

永峰が俺の服の裾や袖を見ながら言ってきた。

「そうだな・・・大分戦闘も激しくなってきたし、お前らみたく服装が変わるわけでもないからな」

確かにこの世界に来てからそれほど日が経っているわけではないが、ほぼ毎日ミニオンと戦闘をしているからだろう。

ところどころ、肩やわき腹に切り裂かれた痕や綻びている。

「俺も戦闘装束に着替えられたらいいのにな・・・」

「そうだ！カティマさんのように制服を着てはどうですか？」

「は？」

カティマは何故か物部学園にいたときは鎧ではなく、旧式の物部学園の制服を着ていた。

どうやら、世刻たちのように友人と楽しく過ごしてみたいと言ったことで森や阿川たちが着せたようだ。

まあ、本人が喜んでいるならよしとしよう。

「制服って・・・俺は着るような歳ではないぞ？」

俺の歳はこいつら以上だしいまさら学生服などどこか気恥ずかしい。「そんなことはないですよ。それに身長も高いですし、絶対見栄えがいいですよ！」

「し、しかしだな・・・」

永峰の気迫に押されて、俺は少し後退った。

「しかし・・・なんですか？」

永峰は笑顔で俺に迫ってくる。

「俺は学校なんて・・・そ、卒業したしな」

「カティマさんだって学校に通ってないですよ？」

「ぐっ……」

誰かに助けを求めようと周りを見渡すが。

「俺はどっちでもいいしなあ」

「……はあ」

どうでもよさそうなソルラスカと呆れているタリア。

「私もよく似合うと思うわよ？」

「私はこれを着ると、皆が気軽に話しかけてきて嬉しいです」

永峰に同意する斑鳩に嬉しそうに微笑むカティマ。

俺に味方する者がなく、唯一の可能性に賭けて世刻に助けを求めて見ると、

「………」

目を逸らしやがった。

（世刻……後でみてろよ……）

「さあ、これに着替えてみて下さい」

がしつと永峰に腕を捕まれて俺の退路は無くなった。

なぜか左手にはどこから出したのか、物部学園の制服があった。

「……わかった」

俺は抵抗することを諦めた。

仕方なく俺は自室で着替え、生徒会室に向かうことにした。

「はあ……ミニオンに囲まれるよりも嫌な感じだ……」

俺の足取りは今まで無いほど重かった。

「へえ、良く似合うじゃない」

「本当ですね」

「そ、そうか？俺はなんだか落ち着かないんだが……」

女の子から褒められるのに慣れてない俺は、どこかむず痒い。

そこはいいのだが何故か生徒会室には一人の少女が増えていた。その少女は笑顔でカメラを構えていた。

「で？なんでお前がここにいる？」

俺は殺気が籠った目でそいつを睨み付けた。

「えゝ。だってせっかく裕樹さんが制服を着るんですから、しっかりとこのカメラに収めておかない！」

と言つて、握りこぶしを作る阿川。

「誰だ！？こいつを呼んだのは！？」

「私よ」

とてつもなくいい笑顔で斑鳩が答えた。

「だって、女の子たちに人気あるんですよ？」

「はあ？」

俺は一度もモテたことなどなかったから意味が理解できなかった。

「そうですよ！目を隠すほどまで長い髪。全てを見透かすような鋭い眼。そして、その高身長に、皆が近づきたい雰囲気！」

阿川がさらにこぶしをきつく握り熱く語る。

「ということであ、撮りますよゝ」

カメラを構え、写真を取りまくる阿川。

「はあ・・・そんなに俺は近づきたいのか？」

そんな阿川を気にしないようにしながら、斑鳩と永峰に聞いてみた。
「ええまあ、目が鋭いですからね。はたから見ていると怒っているようにも見えますからね」

「それにあまり知らない人だと話しかけ難いですから・・・年上ですし」

「そういうものか・・・まあ気をつけよう」

二人の意見に納得し、態度に関しては改めるようにしようと思っ
ていると・・・

「ダメですよ！裕樹さんはそのままだからいいんです！！」

写真を撮り終えたのか、阿川がさらに熱く語りだした。

「ところでですね・・・演劇部にある衣装なども着てみませんか？」

「そうね色々な物が似合いそうだしね」

永峰と斑鳩が手に沢山の服を持ち、俺ににじり寄って来た。

「お、おいお前ら・・・落ち着け」

「落ち着いてますよ？さあ」

俺は後退るが背中に壁がぶつかり、これ以上さがることが出来ない。

「お、おま・・・やめ、やめろっ！」

永峰や斑鳩だけでなく阿川や一般の名も知らない生徒の少女達にまでせがまれて学園にいるときは制服を着ることになった。

この日以来、俺のことを見る女子が増えていたのは言うまでもない。男子にも睨まれていることが多くなったが・・・

コレもまた一つの日常 其乃一（後書き）

ギャグは難しい

第八話（前書き）

展開が少し速いです

少しずつ、日常の話を入れられたらなあ

シリアスなのはネタがあるんですがねえ・・・

駄文ですけどね・・・

第八話

グルン・ドレアス城砦都市、元アイギア王国の首都にして、現グルン＝ドラスの首都。

そこを目指すからには道中に大量のミニオンが配置されているだろう。

最初の拠点であるラハーシアに向かっている最中にも多数のミニオンに遭遇した。

こちらに損害はなく順調に進んでいる。

しかし、ミニオンの力はだんだんと強くなってきたようで、こちらも大分消耗してきていた。

そのため、少しの間休憩を取ることにしたのだが、そこに斥候に出ていた兵が伝令を報告しに来た。

その内容は次の目的地であるレジアシスの街からミニオンの増援が現れたということだった。

その報告を聞いたカティマは自分が突破口を開くと言って、突撃して行き、世刻もそれに続いてついでに行った。

少しは考えて動けと二人に言いたい所だが、今は二人を追いかけることにした。

先走って行った二人に追いついた時にはもう、戦闘は終わりそうだった。

気になることは、二人ほど神剣士が増えていたことだ。

一人は鉤爪状の手甲を持つ民族衣装のような格好をしている青年と、もう一人は薙刀を持つ戦巫女のような格好の少女だった。

その二人の姿を見た斑鳩が二人に駆け寄っていった。

「ソルとタリアよね！？やっぱりこの世界に来てたのね」

どうやら、二人と知り合いのようで俺たちに強力してもらえるようだ。

青年の方は名をソルラスカ、少女の方を名をタリアというらしい。不意に、視線を感じそちらを向くとタリアと呼ばれた少女と目が合った。

こちらを睨んでいるような、俺という人物を見定めているような目だった。

その目に気づいたのか斑鳩が俺のことを説明した。

神剣によって元の世界に召喚されたこと、斑鳩たちとカティマを手助けしていること。

そして、この世界にプロテクトを張っているのはダラバであるということ。

「まあ、せいぜい足手まといにならないようにね」

そう言つて、タリアは背を向けて歩いていった。

「相変わらず、あいつはきついなあ」

「裕樹さん、タリアはああ言ってますけど本当は優しい子ですからソルラスカがいつものことだと言わんばかりに肩を竦め、斑鳩がフオローをする。」

「ああ、気にしてないさ」

（ああ言つて、他人を傷つけないようにするのはアイツで慣れているからな・・・アイツ？

アイツって誰だ？）

俺は何かを思い出しそうになっていると、世刻から声をかけられた。

「裕樹さん、どうしたんですか？置いてかれますよ」

「ん？ああ、悪い悪い。ん？永峰、どうしたんだ？」

斑鳩、ソルラスカとタリアの三人はものべーに向かって行ったようだ。

何故か永峰が不機嫌だったが、聞いてみるとタリアにきついことを言われたそうだ。

「たまにな、傷つけたくなって突き放す奴がいるんだよ。それがそ

「いつの優しさなんだ、気にするな」

俺がどこか懐かしそうに言うのと永峰も納得したのか多少ましになったようだ。

俺たち三人も、ものべーに向かって歩き出した。

レジアシスの街での戦いは、俺たち神剣士に覚醒したばかりでもこれまでの経験からか、ミニオン相手では冷静に対処すれば問題なく撃破できてきているためか、きつい戦いではなかった。

俺が戦っているとなまに誰かの視線を感じることがあった。

戦いが終わり、視線が誰ものか判断するために辺りを見渡しているとカティマが寄ってきた。

「どうしたんだ？」

「いえ、どこかで武術を習っていませんでしたか？」

「いや、俺は何も習ってはいなかったぞ。いきなり、どうした？」

「この間の男性なんですが、とても貴方の戦い方に似ていたのだから感じた視線はカティマのものだったようだ。」

俺は今まで、誰かに武術を習ったことなどない。つまり、我流だ。我流なのに誰かに戦い方が似ているなどあり得るだろうか？

「それに、戦い始めてからまだそんなに日が経っていないというのに、どこか洗練された戦い方をされていますし……」

「そうなのか？特に何もしてなかったんだが……」

かつて、どこかで習っていたんだろうか、俺が忘れていただけで……

突如、フラッシュバックし、俺の前には二人。

片方は無手で拳を構えている奴がいた。

顔は逆光なのか見えず、声も男なのか女なのかさえ解らなかった。

対して、もう一人は俺に良く似ていた。声も背格好も……

構える相手に対して俺に似ている奴も構えたのだが、武器は二丁拳銃だった。

「こん……勝つ……」

「無理……ってんだ……」

声は聞こえたが内容ははつきりとせず、彼らは笑い、同時に攻め込んだ。

二人が接触するか否かのところで俺の意識が戻った。

「……いまのは……一体？」

「？どうかされましたか？」

「いや、何でもない」

そこで話を止め、皆のところに歩き出した。

（いまの記憶は……どこか懐かしい感じがした……なんだったんだ？）

これで残すはグレン・ドレアスだけとなった。今日はここで休むこととなった。

興奮しているのか、俺は夜遅くになっても寝ることができず、外を散歩していた。

明日でこの世界での戦いが終わる、そう考えていると背後に誰かがいる気配がした。

振り返ると、仮面の男が立っていた。

「お前か？カティマが言っていた、男は」

俺は断罪を取り出し構え、警戒しながら聞いた。

「カティマという少女がアイギアの王女のことならば、その通りだ」

「そうか、あんたの目的は何だ？」

「……」

「何故黙っている。なんで……なんでそんな目で俺を見る！」

仮面から唯一見えることができる目がなぜか、悲しい色を帯びていた。

その目から感じるのは、悲しみ、後悔、哀れみといったものだった。「俺は俺の目的のために行動している。王女を助けたのは目的のた

めだ。また、会うことになるだろう、じゃあな」

「待て！目的のためだと！？お前は神威なのか！？」

俺は今、なんて言った？コイツのことを知らないのに？第一、神威^{かむい}とは誰だ？

「今はまだ、俺のことは思い出さなくていい。それよりも彼女のことを・・・」

そういつて、男は消えた。俺はその場に立ち尽くしたままだった。

（俺は・・・彼女？・・・一体・・・）

俺は男の言葉を考えながら、部屋に戻っていった。

第九話

翌朝、今日のうちにダラバとの決着をつけるために朝早くから進軍を開始した。

ここに来るまでもそれなりの強さのミニオンと戦闘したが、首都だけあつてさらに精強のミニオンが配備されていた。

とはいえ、こちらの神剣士は七人、そのうち戦闘経験が豊富な二人が増えているので危なげ無く、ミニオンを順調に倒してきている。

「はっ、どいつもこいつも手応えのない奴らばっかだな！」

「ソル！油断しないでよね！」

タリアがソルラスカの傲慢ともいえる発言を嗜める。

しかし、ソルラスカの最大の武器である速さにミニオンではついて行けず、力もあるので一撃で仕留められなくともかなりの損傷を与えている。

タリアや斑鳩がソルラスカの撃ち漏らしに止めを刺している。

街中のミニオンはあらかた殲滅出来たようで俺達は城門前まで着ていた。

「あとはダラバを倒すだけですな」

「そのようだな、しかしあつけないな。畏か・・・？」

ここまで来るのに順調すぎる。ミニオンの数もあり多くはなかった。

「畏だったとしても、構いやしねえよ。畏ごとぶっ壊すだけだ」

「ソル、少しは警戒しなさい！」

俺の言葉をソルラスカが一蹴するとすかさずタリアが突っ込む。

「脳筋なのか馬鹿なのか・・・」

「「あははは・・・」」

俺の呆れた発言に斑鳩と永峰が頬を引きつらせて苦笑した。

「しかし、たとえ畏があろうともダラバを倒すためにもここで立ち止まっているわけにはまいりません！」

カティマが城門を開けると、背後に数十ものミニオンがいきなり現れた。

「ちっ、やっぱり罠だったか・・・」

「ほら、ソル！見なさい！」

「俺のせいじゃないだろ！」

俺達は一斉に神剣を構え、振り向いた。

「カティマ！ドラバと決着をつけてこい！」

「はい！」

俺がカティマにそう言うのとカティマは城の中に駆けて行った。

「カティマさん一人では危なくないですか？」

永峰が当然の疑問を聞いてきた。

「前に言っただろう。ドラバはカティマと戦いたいのだと」

「はい・・・カティマさんが和平の使者を出す前でしたっけ」

「そうだ。最初からドラバの狙いはカティマと戦うことだ。ならば、俺たちがいようといまいと一騎打ちだろう。なら、一人で行かせても問題ない」

ソルラスカと俺が速さで固まって現れたミニオンに突っ込み、世刻とタリアが俺達で消耗しているミニオンに止めを刺し、斑鳩と永峰が皆のサポートにまわる。

これが俺たちの大まかな戦術でチームワークになっていた。

「やるじゃないか、裕樹。俺の速さについて来れるなんてな」

ソルラスカがニヤリと笑いながら、どこか楽しそうに言った。

「ああ、だが無駄口叩く前に敵を倒すぞ」

「そうだ・・・なっ！」

俺たちは背中を合わせて二、三会話して敵にまた突っ込む。

「遅い」

俺がミニオンに攻撃しようすると、すかさず神剣で防御しようとするがそれよりも速く断罪でかち上げ、首を飛ばす。

ソルラスカは片方の鉤詰めで神剣を抑え、もう片方で攻撃する。

俺たちは速さでミニオンの行動を抑え、一固まりにした。

そこへ最強の攻撃を叩き込む世刻。

負傷していたとはいえ複数のミニオンを一撃で葬った。

「よっしゃあ、楽勝だぜ！」

「安心するのはまだよ」

「そうね、まだドラバが残ってるわ」

俺たち全員は城内に駆けていった。

謁見の間に入ると聞こえてくるのは剣戟。

ここに来るまでに結構な時間がかかったにもかかわらず、未だに勝負をしている二人。

「決まるのは・・・一瞬だな」

「ああ、そうだな」

俺の言葉にソルラスカが答え、斑鳩とタリアが頷く。

「どうして、そんなことが解るんですか？」

「実力の極めて等しい二人の一騎打ちだ。ならば、普通に攻撃してはあまり意味がない。だからお互いの最大の技で同時に放つ。少しでも強いものが勝つ。そういうことだ」

こうして会話している間も剣を交えている二人。

しかし、お互いにかすり傷程度しか与えられない。

そして一際激しい攻防の後、カティマが弾き飛ばされ、壁に激突する。

「カティマ！くそっ！」

「待てよ。カティマのやつ、まだやる気だぜ？」

その様子に世刻が駆け出そうとした所で、ソルラスカに止められていた。

その言葉どおり、見ればカティマは剣を支えに立ち上がり、ドラバに向かって構えている。

そして、お互いに気を高め、剣を構える。

「これで・・・終わりです！」

カティマが床を蹴りダラバに突っ込む。

ザシュツ！！

カティマの剣がダラバの身体を貫いた。

「ふ・・・ふふふ・・・やはり・・・定められた運命からは逃れられなかったか」

その身を剣に貫かれながら、笑うダラバ。

「私の苦しみはここで終わるが・・・私が背負った苦しみは、貴殿に受け継がれる。

これから先・・・永遠に、自らの血に宿った呪いに・・・苦しめられるがいい・・・」

そう言いながら、自ら神剣を引き抜くと、

「さらばだ・・・」

ダラバは、その場に静かに崩れ落ちた。

放心するカティマに駆け寄る皆。

「みんな、油断するのは早いわ。神剣はまだ消えていない。息がある証拠よ」

そんな中、タリアの声が響く。確かに未だ、『夜燭』は倒れたダラバの手に握られたままだ。

「おい、ちゃんとダラバに止めをさしておいた方がいいんじゃないか？」

ソルラスカがそうカティマに促した時だった。

「そうはいかないわ。その体は今から私が使うんだから」

聞き慣れない声が響く。

次いで突如俺達の前に現れたのは、異国風の衣服を纏った少女。

「・・・っ！ダラバの部下か！？」

「まだ敵が残ってたの？」

「・・・そいつはこの世界の人間じゃねえ。・・・エヴォリア、捜してたぜえ・・・！」

驚愕の声を上げる世刻と永峰に対し、ソルラスカが否定し、武器を

構えた。

「旅団がこの世界に干渉してくるとはね。お陰で予定が狂っちゃったわ」

「ダラバに鉾を提供していたのはテメエだな？光をもたらす者はこの世界も滅ぼそうってのか！？」

「そうよ。そしてその計画はまだ進行中」

そう言いながら、倒れたダラバに近づいていくエヴォリア。

そして、ダラバに対して呪詛を唱えるといきなりダラバが苦しみ始めた。

「てめえ、何しやがった！」

ソルラスカがエヴォリアに斬りかかるが背後に跳躍してかわす。

「少し魂を弄っただけよ。じゃね、置き土産で楽しんでね」

エヴォリアは楽しそうに言い、俺たちの目の前から消えた。

ダラバに注目すると致命傷に近い傷を負ったにもかかわらず、立ち上がり目は何も感情を宿してはいなかった。

まるで、ミニオンのような人形だった。

「魂を・・・弄ぶ・・・だと？」

「え？どうしたの？」

俺の様子がおかしいことに気づき、斑鳩が怪訝そうに聞いてきた。

「ふざけるな・・・ふざけるな・・・！何様のつもりだ・・・！」

その瞬間、俺の中の何かが弾け飛んだ。

「汝の魂に救済を・・・」

俺は断罪をかかけ

「罪を赦し・・・」

まっすぐに突き立て

「魂の開放を・・・」

片方の手を刃に当てて

「ここに汝の魂に安らぎを・・・」

そのまま扇を描くように動かす

「真に魂は廻る・・・」

すると手の軌跡に刃が伸びる

「故に輪廻転生」

その形はまるで死神の鎌のようになった。

ダンッ！

俺はダラバに向かって駆け出し、断罪を振るう。

断罪がダラバの首を通過する。

だが、ダラバの首が飛ばず、倒れただけだった。

「……………」

誰も今の光景に何も発することが出来なかった。

ただ、呆然と目の前の光景に目を奪われた。

「ここに汝の魂は開放された。もう運命に振り回されることはない。

血に刻まれし呪いもな……………これで汝の魂は自由だ……………」

「そうか……………もう……………ふはははは」

俺の言葉にダラバは笑い、金色の霧となつて霧散した。

「来世で汝の魂に安らぎがあらんことを……………」

俺はマナの霧を追うように顔を上げ、呟いた。

……………裕樹side out……………

……………???side in……………

その現場を一人の人間が見ていた。

俺の目の前には目的の人物。

その人物の集団に対して敵対心のある女性、名をエヴオリア。

「少し魂を弄つただけよ。じゃね、置き土産で楽しんでね」

（魂だと！？まさか、弄れる奴がいたとは……………）

これでは計画にかなりの時間が削られてしまう。

（しかし、まだ前に出るわけには……………）

悩んでいる間にも事態は進行する。

「汝の魂に救済を……………」

アイツは断罪をかかけ

「罪を赦し・・・」

まっすぐに突き立て

「魂の開放を・・・」

片方の手を刃に当てて

「ここに汝の魂に安らぎを・・・」

そのまま扇を描くように動かす

「真に魂は廻る・・・」

すると手の軌跡に刃が伸びる

「故に輪廻転生」

その形はまるで死神の鎌のようになった。

アイツはダラバに向かって駆け出し、断罪を振るう。

断罪がダラバの首を通過する。

「ここに汝の魂は開放された。もう運命に振り回されることはない。
血に刻まれし呪いもな・・・これで汝の魂は自由だ・・・」

「そうか・・・もう・・・ふはははは」

（その代わりにお前が背負うことになるのに・・・あのときのよう
に・・・）

アイツの言葉にダラバは笑い、金色の霧となって霧散した。

「来世で汝の魂に安らぎがあらんことを・・・」

アイツはマナの霧を追うように顔を上げ、呟いた。

（計画にはないがこの行動でアイツが一人になるのは避けたい・・・
ならば・・・）

見ていた人間は彼らの中に降りていった。

・・・??? side out・・・

・・・裕樹 side in・・・

「やれやれ・・・あんなものを持っている奴がいるとはなあ・・・」

「誰だ!？」

いきなりダラバのいた位置、俺と仲間の間に仮面の男が現れた。ソルラスカの言葉に全員が神剣を構える。

「誰かは答えられんが今は敵じゃないと言っておこうか・・・」

「貴方は・・・この間は有り難う御座いました」

カティマが礼を言つて頭を下げようとしたが、男が手で制す。

「礼には及ばん。俺の目的のためだったからな・・・」

「それでも、私は助けられたのです。だから礼をします」

「ふっ、そうか・・・」

男は何処かカティマを慈しむような感じが言葉に宿っていた。

「それで、貴方が現れたのは何故ですか？」

「現状のコイツの行動の説明だな」

タリアの疑問に男は指で背後にいる俺を指した。

「とはいっても全てを答えるわけではない。簡単に言えば神剣の能力だ。魂の開放、今言えるのはそれだけだ。安心しろ、お前たちに害はない。魂に関することがなければな」

そう言つて、男は一瞬で消え去った。

「・・・魂の・・・開放・・・」

全員が男の言葉を呟いた。

俺はただ自分の行動に驚いたまま、仮面の男が何を言っているのかさえ、頭に入つてはこなかった。

俺の中では『何か』がずっと思ひ出せ・・・思ひ出せと囁いていた。こうして、俺達の剣の世界での戦争はアイギア正統軍の勝利で終わった。

第十話（前書き）

原作とは大分、大筋が変わってきます。

渡る世界は沿っているのですが内容というか設定が変わります
ご容赦下さい

第十話

ダラバを倒したその日の夜。

この世界の人間も物部学園の生徒達も神剣士たちも戦争が終わったことを喜び、宴を開いている。

物部学園屋上。

俺は一人で屋上の金網を越えて、端に座りながら宙に足を放り出していた。

眼下に見えるグランドで生徒達がキャンプファイアーをして、皆笑っている。

カティマ以外の神剣士たちはここにいる。

彼女は王女であるが故に、城の宴に参加しているだろう。

「・・・・・・・・・・」

俺は一人で昼間の・・・・ダラバのときの異変を考えていた。

（魂・・・・何故、俺は反応した？）

俺は呆然としていたから仮面の男の話は耳に入らなかったが、後から皆に聞くと一様に神剣の能力だと言った。

確かに神剣のせいもあるだろう。

だが、あの時には神剣の強制力など働いてなどいなかった。それどころか、神獣の話から一切断罪とは会話していない。

話しかけても何も反応が返ってこない。

「本当になんだったんだろうな・・・・」

しかし、あの行為で俺の中で『何か』が嵌った気がした。

（依然と見ている夢、違うな記憶か・・・・あれに関係している気がする）

ただ漠然にそう思った。

「あ、ここにいたのですね。探しましたよ」

キィッと耳障りなドアの開く音がして、屋上にカティマがやって来た。

「いいのか？王女が城の宴から抜け出して」

俺は前を向いたまま、カティマに対してそう言った。

「確かに私は王女ですが、この戦いは私だけの功績ではありませんから。」

それに共に戦った仲間に礼を言いたかったので」

「礼などいらん。俺はお前と利害が一致したから参加しただけだ。」

それに・・・礼なら、あいつらに言え」

俺はなんだかんだで、お人好しなあいつらのことを考え苦笑した。

「ええ、もう言いました。貴方で最後です。」

それと貴方だけには別に礼をしなければなりません」

カティマはそう言つて、頭を下げた。

「貴方には先祖代々の戒めを開放してくれましたから。」

今なら私も、ダラバがあそこまで私と戦うことに執着していた理由がわかります。

彼は抗いたかったのです。魂に刻まれた呪いに・・・」

カティマは頭を上げ、遠い目をしながら言った。

「あれは勝手に体が動いただけだ。それにそう簡単に王女が頭を下げるな」

「いえ、これは王女としてではなく、カティマ＝アイギアス個人の礼です。」

彼を・・・私を・・・救ってくれて有り難う御座います」

俺は立ち上がり、金網を飛び越えて、カティマを目を真剣に見た。

彼女の目にはつきりとした意志を読み取り、頷いた。

「わかった、受け取ろう。お前の意志は良く解った。どのような決断をしようがお前の自由だ」

俺はすれ違いざまにカティマの肩を軽く叩き、屋上を後にした。

「私は・・・貴方たちに・・・」

残されたカティマの呟きは誰にも聞こえはしなかった。

この光景は何度目だろうか？

それすらも解らないほど見ているのだろうか？

またもや目の前は漆黒。

上も下も無く、右や左も無い。

落ちているような気もするし、昇っている気もする。

不意に一枚の絵のようなものが見えた。

それは次第に無数に増え、俺の周りを回る。

絵に意味は無く、ただそこにあるだけだ。

しかし、絵からあふれ出る怨念、憤怒、嫉妬、後悔など、色々な色黒い感情が俺の中に流れ込んでくる。

「やめろ・・・やめろ・・・俺に見せるな・・・俺のせいじゃない・・・」

頭を抱え、苦痛に耐える。

脳裏にこの世界に存在していたダラバの・・・カティマの・・・魂に刻まれた呪いが流れてくる。

この世界の歴史の闇の部分。

暗殺、戦争、裏切り、黒い感情の源が一度に俺の頭に流れ込む。

頭が・・・心が壊れそうになる。

どれだけでもこうが、抵抗しようが、意味が無く、心に刻まれる。

また壊れるかもしれない。

また？

一度目はいつ？どこで？

俺はこれが初めてではない？

だったら一度目はどうなったんだ？

壊れたのか？

でも、何故覚えていないんだ？

溢れ出る感情に耐え切れず、俺は考えることも出来なくなった。

翌朝、カティマの本格的な王位継承式があり、俺たち神剣士は全員がそこに参列した。

森や阿川が自分達も参列すると言い張りだし、それを止めるのに世刻や永峰、斑鳩が必死になっていた。

森はおそらく好奇心から、阿川は写真が撮りたいが故にだろう。

俺はそんなことよりも、これからカティマがするであろう行動に対して心配していた。

俺の思っている行動ならばここまで派手に継承式をするとは思っていないかったのだ。

（王としての才能はあるだろうが・・・今の状態で収めることができるのか？）

カティマは城のテラスに立ち、今回の戦争について話した。

俺たち神剣士の協力者のこと。

ダラバの宿命のこと。

カティマの想いの数々を。

そしてこれからのことを・・・

「私は今ここに宣言します！王政を廃止します！！」

「・・・ええええええ！！？」

俺を含め神剣士全員に、城にいる貴族達、民までもが誰もが驚愕した。

カティマの言い分は国とは民のためのもの。

その考えに至った理由。

今回の戦争を巻き起こした理由。

それは王族に縛られたことであること。

貴族達の私欲のためであること。

故に国が民のためにあることから外れたこと。

だからそれを外れさせないために民に国を治めさせることにしたと。ようするに民政にするそうだ。

王政国家から民主国家へ。

依然、世刻たちから聞いた元の世界についての話を参考にしたようだ。

そして自分は見聞を広めるために俺たちについてくると国民達に宣言した。

カティマのしつかりとした主張に誰も異論どころか、一言も発することが出来なかった。

「あつはつはつは・・・」

生徒会室にソルラスカの笑い声が響いていた。

「・・・・・・・・・・」

「これから宜しくね、カティマさん」

斑鳩とタリアは頭を抱え、世刻と永峰はカティマを歓迎している。

「まあ、諦めるんだな・・・」

俺はなんとかカティマをこの世界に残らそうと考えている二人に同情した。

「そうね・・・あそこまで意志を固められてわね。それにクロムウエイさんも了承しているみたいだしね」

斑鳩が肩を落としながらため息をついた。

「それよりも、俺としてはあのエヴオリアという女のことを話して欲しいんだが・・・」

光をもたらすものこと、それに敵対している斑鳩を含む、お前達三人のことをな」

「私も知りたいわね。貴方のあの時の行動について」

俺とタリアの目が合い、互いに睨みあう。

「俺の行動については俺も解らん。あの男は何か知っているみたいだが・・・」

解っていたら、あいつは出てこなかっただろうしな」

あの男が思い出せと言った・・・つまり、俺は何かを忘れていることは言うつもりはない。

「どうやら、嘘は言っていないようね・・・なら、こっちも話すわ」
タリアは俺の目をじっと見詰め、そう判断して自分達の組織のこと、光をもたらすものの目的のことを説明した。

時間樹という木があり、この世界はその木の枝の一枚の葉にすぎないということ。

世界は無数にあり、光をもたらすものの目的は世界を破壊すること。それを防ぐために斑鳩、タリア、ソルラスカの三人は旅団という組織に属しているということ。

旅団の目的は光をもたらすものを倒すこと。

そして、この時間樹において神剣士は皆、神の転生体であること。肝心のことは話さないようだが・・・

気になるのは絶という少年のこと。

それに世刻のことに永峰のこと。

一つはタイミングが良すぎることだ。

ミニオンが迫ってきたときに、世刻がちょうど覚醒したということ。身に危険を感じたというならば、永峰も同時に覚醒しているはず。だが、実際は絶と世刻が戦っている最中だった。

そして永峰が覚醒したときにものべーによる次元跳躍。

神獣が主の命令無く、勝手に行動したということだ。

あまりにもタイミングが良い。

もう一つは絶の言う目的のこと。

最後に旅団は光をもたらすものと敵対しているはず。

ならば何故、斑鳩がミニオンが現れるよりも早く元の世界にいたのか。

元の世界に重要な何かがあったということだろう。

これらの三つのことから何かしらの計画があると見てもいいだろう。最も、それ以前にかなり怪しいことがある、俺自身のことだ。

俺の記憶に、俺のことを知っている仮面の男。
しかし、何をするにしても情報が少なすぎる。
もう少し、成り行きに身を任せてみるか・・・

第十一話

カティマが王政廃止を宣言した数日後。

物部学園には様々な物資が運びこまれていた。

食料や日用品、衣類に寝具といったものが次々に運び込まれていく。

「これでやっと快適になりますね」

「そうね。これまで床で寝ている人も多かったからね」

ものべーによる唐突な次元跳躍により、色々なものが足りてなかったのである。

一番足りていなかったのが、毛布や布団といった寝具である。保健室や宿直室にあったものだけだった。

だからこれまで、布団の変わりに上着など使用していた。

「なんで俺たちがこんなことまでしなきゃならないんだ？」

「うっさいわね。文句言う前にさっさと運びなさいよ！」

「でもよう。世刻や永峰がしているのはわかるけどよう。」

なんであいつがいねえんだよ！俺たちだって手伝ってるんだぜ？」

ソルラス力は神剣士で唯一、物資運びを手伝っていない裕樹のことに腹を立てていた。

「しかたないでしょ。彼があそこまで顔色悪そうにしていたんだから・・・」

あんたも宣言の日の彼の顔色をみたでしょ？」

「ああ。しかし、あそこまでなるとはよほどのことなんだろうな・・・」

・

「そりやそうよ。魂を開放するっていうのはそれにかかっている呪いか何かを解いたってことでしょ。」

私たちは言い換えてみれば、オリハルコンネーム神名を破壊したってことでしょ？

そう簡単に破壊できないわよ」

オリハルコンネームとは、神の転生体にあるもので神のときにあった特性や力を受け継いだ証みたいなものである。

神の力を破るということは並大抵のことではない。

それが神剣の力であったとしても・・・

それ故に裕樹の顔色の悪さはダラバのときの行動の影響だと思われるていた。

確かに裕樹にとってもいかに断罪の力で破壊したと言えども、何も影響が無いわけではない。

しかし、裕樹の顔色の悪さはそのためではない。

断罪によって魂を開放したことによってなのは間違いないのだが・

・
「・・・・・・よし！」

ソルラス力は何を思ったのか、こぶしを作り自分の手のひらを叩いた。

「よしってあんた・・・・どうしたのよ？」

「いや・・・・気持ちが悪く沈んでるときは何かで元気づけないとな」

「確かにそうだけど・・・」

あんたが思いついたってとこがかなり不安だわ・・・・」

「善は急げだ！とつとと終わらせるか！！」

ソルラス力はそう言い放ち、全力で全ての物資を運び出した。

神剣の力をフルに使い、かなりの速さで次々と運び込んでいく。

一緒に運んでいた一般生徒たちは啞然とし、世刻と永峰も一体どうしたのかわからず、斑鳩は信じられないような目で、タリアは呆れ果てていた。

「よっしゃ、これで最後だな？」

「ええ、その通りです・・・・」

いつも面倒なことはやらないソルラス力にカティマもどう反応していいのか解らないようだ。

「じゃ、俺はあいつのところ行ってくる！」

ソルラス力は全力で校舎の中に走っていった。

「ソルは一体どうしたの？」

「知らないわよ・・・・」

普段ではありえないソルラスカの姿を見て、斑鳩は困惑しながらタリアに尋ねたが答えは得られず、その場に残された全員がソルラスカの走っていった方を見ていた。

一階にある普段は倉庫として使われていた部屋を裕樹は自室として与えられていた。

状況が状況だけに、一般生徒たちと同じ教室では互いに気を使うだろうとここにあつた物をどけ、部屋として使っていた。

(・・・記憶・・・彼女・・・魂・・・それにあの夢・・・)

ダラバの魂を開放した日から彼はある夢を見るようになった。

それはこの世界の記憶・・・歴史といつてもいい。

それは書物にあるようなことを学ぶ程度ではない。

その場の重要な人物であろうという者の視点で見せられる。

さらにはその場の全ての怨念ともいえるものを感じるのだ。

人の欲、妬み、猜疑心、そして殺意。

時にはその殺意によって殺されてその痛みまで。

時にはその殺意で殺す側で殺して命乞いをされても命を奪うことまでも。

それがダラバとカティマの一族が今まで背負っていたものである。

本人達のしたことではないがそれが魂に刻まれた宿命だったのだ。

二人の神剣・・・夜燭と心神・・・それが神剣の名だった。

ダラバの魂を開放したときにカティマの魂も開放したのである。

ダラバとカティマ・・・二人の魂はある意味、繋がっていたのである。

それは神であつたときからの戒めだった。

夜燭と心神は互いに戦う運命だった。

だからこそダラバはカティマと戦うように行動されていた。

本人が感じなくとも神剣の強制力が働いていた。

それはカティマも同じだった。

しかし、ダラバは夜燭に目覚めたときからカティマに敗れることを知っていた。

だからこそ、ダラバは執拗にカティマと戦うことを求め、宿命に勝とうとした。

しかし、現実には敗れ、さらにエヴォリアに魂を拘束された。

しかも裕樹の目の前で・・・だから裕樹は反応した。

故にダラバの魂を開放したときに対であったカティマの方も開放されたのである。

だからこそ、カティマは彼に礼を言ったのである。

知ってはいなくとも魂で感じていたのだ。

自分は救われたのだと・・・自由であるのだと・・・

しかし、それによって裕樹は今までなかった他人の痛みを一身に受けることになった。

それも唐突に、全ての痛みを・・・二人の呪いを・・・

人によっては自分の痛みにすら耐え切れず、心が発狂する者までいるのだ。

それを自分一人のだけではなく、いきなり二人も増えたのだ。

普通の者ならば、とつくに心が壊れているだろう。

それに耐えられているのは彼の精神力の強さだ。

彼が仮面の男に言われたことを床に座って壁にもたれながら考えていた時だった。

突如、部屋のバンツとドアが勢い良く開いた。

「裕樹！俺と勝負しようぜ！！」

「・・・断る」

入って来たと同時にここまで来るのに走ってきたのか息を切らしながらソルラス力は大きな声でそう行った。

裕樹はそんなソルラス力を一瞥して面倒そうに答えた。

「戦いたいなら世刻としてこい。あいつなら相手してくれるだろ」

「俺はお前と戦いたいんだよ！」

断つても食い下がってくるソルラスカにうんざりしながら、裕樹はため息をつきながら理由を聞いてみた。

「何でそんなに俺と戦いたいんだ？理由でもあるのか？」

「理由か？あゝ、その・・・だな・・・」

ソルラスカにしては妙に歯切れが悪く、頭を掻きながらどう言うか考えていた。

「ああ、そう。お前が強いからだ。俺は強い奴と戦いたいんだ」

「強い奴ならカティマだろ・・・この間まで一般人だった奴に何を言っている」

ソルラスカのこれだ！って言う理由をそれっぽいことで裕樹は返した。

さつきからソルラスカが俺と戦いたいのには良く解っていた。

しかし、裕樹は理由もなく戦うのは嫌だったのではない。

理由が欲しいのでも戦うことが怖いのもない、ただ面倒だからだ。
「そりゃ、そうだけど。お前は俺の速さについてこれるじゃないか！」

確かに裕樹の速さはソルラスカに匹敵する。

やや遅いくらいだろう。

他のメンバーではソルラスカの全力についていくことなどできない。

「ああ、もう解ったよ。相手してやるよ。たくっ、面倒くさい」

裕樹はため息をつきながら立ち上がり、断罪を掴んだ。

「本当かつ！？やった」

とてつもなく喜んでいるソルラスカは最初の目的などすっかり忘れてしまっている。

何のためにここに来たのかはもう、裕樹と戦えることに頭が一杯で覚えてはいない。

「ふう、単純で羨ましいな・・・」

そんなソルラスカを見て、裕樹は誰にも聞こえない大きさでそう言った。

「さあて、やろうぜえ」

「俺に戦いを挑んだこと、後悔させてやるよ」

ソルラス力は神剣をはめて構え、裕樹は断罪を軽く振り回している。

「あの馬鹿・・・やっぱりこうなるのね・・・」

「やっぱりって・・・タリア。なんでこんなことになってるのよ？」

目の前の現状に落ち着いているタリアに斑鳩は聞いてきた。

「あの馬鹿が神夜を元気づけるとか言い出したのよ。」

で、おそらく何の考えもなく挑んだんでしょうね」

「ああ・・・なるほど」

それだけで斑鳩は現状を納得してしまった。

神剣士同士の戦いということで、多くの生徒達も見たいと言ってきたが、危険すぎるということとで全員が校舎の中から見ていた。

全教室の窓だけではなく良く見ると屋上にまで生徒達がいた。

一応他の神剣士たちが校舎の入り口で余波を防ぐようにしているが・

・

グランドの中央に神剣を構える二人。

そして、両者が突っ込み、ぶつかる寸前でいきなり二人の真ん中が光った。

二人は軽く弾き飛ばされたかのように後逸していた。

光が収まるとそこには仮面の男が立っていた。

「お前じゃ相手にもならんぞ・・・」

男はソルラス力を見て、そう言った。

第十二話

「お前じゃ相手にもならんぞ…」

いきなり現れた仮面の男はソルラスカを見て、吐き捨てるように言った。

「てめえ…いきなり何しやがる!？」

強いものと戦える。

そのことで興奮し、喜んでいたところに邪魔が入った。ソルラスカはそれでいつも以上に気が立っていた。

「相手の実力も見抜けないお前を止めてやったんだ。むしろ感謝して欲しいものだな」

男は弾き飛ばされたソルラスカを睨んだ。

その瞬間、周りを一気に耐え難い殺気が包み込んだ。

その殺気を一身に受けたソルラスカは手足が振るえ上げ、膝を突いた。

殺気向けられたソルラスカだけでなく、校舎の入り口で待機していた他の五人も膝についてはいなかったが、体を縮こまらせ振るえていた。

幾度も戦ってきた歴戦の神剣士たちを震え上がらせた。

「そんな…殺気だけで…動けなくなるなんて…」

世刻と永峰は動けず、タリア、斑鳩にカティマの三人は神剣を構えようとするが神剣を出すことが精一杯だった。

その中で一人だけ男の殺気に耐えて立っている者がいた。
その者は男に一気に駆け寄り、武器を振るった。

「気が早いな…」

まだ何もしていないだろ」

「お前には聞きたいことがある…」

男は神剣を素手で片手で掴むように受け止めていた。

男はそのまま断罪を裕樹の手から掠め取り、後ろに放り投げた。

「お前は今、ちょっとしたことで暴走する可能性がある。
それを発散させに来ただけだ」

男は断罪の方向に跳び、断罪を地面に突き立てた。

「ソルと呼ばれていたお前。

あっちで固まっておけ。

巻き込まれるぞ」

「ちつ、てめえにや借りがあるからな。
聞いといてやるよ」

ソルラスカの言う借りはカティマを助けたことだろう。

「あんたが他人の言うことを聞くなんて珍しいわね」

こちらに近寄ってきたソルラスカにタリアは肩をすくめながら言った。

「言っただろ、借りがあると…
それに刃向かったって何も出来ずに殺されそうだしな」

「そうね…私たちが動くことすら出来ないなんて…」

全員が気になっていることが二つ。

仮面の男の目的と裕樹のこと。

彼が何故、あれほどの殺気の中で動けたのか…

通常、いくら神剣を持っているからとはいえ、耐え切れるものではなかった。

なのに裕樹は立っているだけどころか男に切りかかったのだ。

（ありえない…彼は一体何者なの…）

全員がそんな疑問を抱えていた。

「お前の相手は俺がしてやろう…」

仮面の男は裕樹に対して正面を向いた。

「人の武器を奪っておいて何言ってやがる」

裕樹は丸腰のまま、男を睨む。

「お前がそこまで怒っているということは、少しは後ろの子達の事を認めたということかな？」

「認めるも何もこいつらは仲間だ」

男の小馬鹿にしたような言い方に睨みながら言い返す。

「仲間か…そうでなくては困るからな。」

それならいい」

「上から目線でモノを言いやがって…てめえの目的は何だよ」

「おいおい、俺はお前のためにしているんだぜ？」

まあいい…目的はここでお前のある物を発散させておくことだ」

「ある物を発散？」

男はグランドの真ん中に向かって歩きながら言い続ける。

「そうだ。」

「この間の行動は覚えているだろう？」

「魂の開放のことか？」

「そうそれだ。」

魂の開放…そんな奇跡のようなことをして反動がないとでも？

答えはNOだ。

いかに神剣の力といえども奇跡は無料では起^{ただ}こらない」

男はグランドの中央に立ち、手を広げ空を仰いだ。

「そう、奇跡には対価が必要なのだよ。ではその対価とは？」

それはお前が開放した魂の咎を背負うことだ」

その言葉を聞いた裕樹の背後にいたメンバー全員が息を呑んだ。

特にカティマには一番ショックが大きかった。

相手の魂の咎を背負う。

それはダラバとカティマの一族が耐えてきた苦痛を裕樹が背負うことと他ならない。

「そんな…それでは…」

カティマが自分の背負うべき罪を他人に背負わせたことに絶望し、膝をついた。

「気にすることはない。アイギアの女王よ。

俺はそれをなんとかするためにここに來たのだから」

いつの間にかカティマの前に移動していた仮面の男は膝をつき、絶望しているカティマの頭をなでた。

「……………なっ……!!」「……………」

誰も仮面の男が移動したことに気がつかなかった。あまりにも速すぎるため追いつくことができなかった。また男は瞬時に中央に戻り、話を続ける。

「ではどうすればいいか…答えは発散させることだ。

咎は魂の怨念である。

なら、それらを全て何かにぶつければいい」

「でもぶつけるって何に？」

下手すればかなりの被害がでるはずよ!？」

タリアの疑問はもつともである。

オリハルコンネームを破壊する力…

それを簡単に言えば暴走させると言っているようなものだ。そこら辺にある物にぶつければいいという話ではない。

「だからこそ俺が來たのだ。

お前の体調が悪いのもそのせいだ。

早く魂が暴れたいと叫んでいるのだ。」

「でもどうすればいい?」

「簡単さ。」

お前のまたは魂のトラウマに触れればいい。
もしくはお前が死にかけるかだ」

死にかける…その言葉を聞いて世刻があの時のことを思い出す。

「それで…あのときに…」

「ちよっと、それってどういうことなの？」

「なにがあつたの？」

斑鳩と永峰が世刻の呟きに反応し、聞いてくる。

「俺を庇って裕樹さんが大怪我して、そのときに裕樹さんの様子がおかしかったんだ」

そのときのことを全員が聞き、何も言えなかった。

永峰とカティマは心配そうに裕樹を見、斑鳩たちは武器まで変わったこととミニオンを瞬殺したと言うことで破壊神ジルオルクラスの危険度があるということを理解し、直ちに警戒していた。
その姿を見て、男は言う。

「止めておけ、お前達が何とかできるレベルのものじゃない。」

だから俺が出張ったんだ。

ただし、被害を抑えるのために全力で結界を張れ」

男はそう言い放ち裕樹に相對する。

「さて、それでは始めようか」

男は素手で構える。

前回力ティマを助けたときのような拳銃ではなかった。

「お前のトラウマは……」

思い出したか？

「のこ事を？」

「~~~~つ!!!!!!」

その言葉は後ろにいたメンバーには良く聞こえなかった。

男が誰かの名前を言った瞬間、裕樹の様子がおかしくなった。いきなり手で胸を掴み、膝をつく。

「あ……が……がああああゝ」

「...うん」

裕樹が悶え苦しみ、男も苦しそうに顔をしかめる。

裕樹の周りで衝撃が走り、土煙で姿が見えなくなった。

煙が晴れ、全員が裕樹の姿に注目する。

その姿はさつきまでのラフな格好とは変わり、洋風な軽鎧に変わりローブまで羽織っていた。

武器は断罪ではなく、以前男が使っていた二丁拳銃だった。

第十三話（前書き）

諸事情により、一月近く入院しておりました
未だに全治してはいないのでしばらく更新速度が遅くなると思います
ご容赦下さい

第十三話

・・・裕樹side in・・・

仮面の男の言葉を聞いた瞬間、俺は何かを見た気がする。
それは三人の人間だった。

男が二人に少女が一人。

少女は一人の男の腕にしがみつき、男は面倒くさそうにため息をつく。

その様を見て、残りの男は笑っている。

それを見たのは一瞬だった。

次の瞬間には目の前のような漆黑だった。

俺は一体この光景を何度見てきただろうか？

十？

百？

千？

数え切れない程見てきた気がする。

数え切れない程の魂を開放してきた・・・

奴の言葉を聞いたときにそれは思い出すことが出来た。

だが、奴が言った少女はわからない・・・

大切であつたはずなのに・・・

何故か俺の中からすっぽりと抜け落ちてしまった気がする・・・

思い出したいのに思い出そうと考える暇がない・・・

俺は堕ちていく感覚がする。

それと共に何かを感じる。

それは魂だった。

俺が開放したはずの魂。

この世に生きていた魂。

志半ばで倒れていった者の魂。

親や世界に捨てられた者の魂。

悪人に殺された善良な者の魂。

数え切れない程の魂・
・
・

それらの無念、後悔、憎しみ、恨みが全て俺の中に……

俺の魂の中に進入してくる。

[illegible]

その想いは俺の魂を壊そうとする。

否、入り込んできただけだ。

それに俺が耐え切れないだけ。

全身が悲鳴を上げる。

頭が割れそうな気がする。

「ぎゅっ……があっ……」

それは休みなく俺の中に入ってくる。

いつ終わるかも解らず。

いつまで耐えていられるかも解らず。

「ころすころすころすころすころすころすころすころす
ころすころすころすころすころすころすころすころす
ころすころすころすころすころすころすころすころす」

突如、俺の体の一部に今までにないほどの激痛が走った。

苦痛に耐えながら痛みがあつた足を見る。

そこにはナイフが刺さっていた。

不意に目の前に誰かにいることに気づいた。

それは
・
・
・

何処にでもいそうな子供だった。

子供の手には子供が持つには不似合いな劔を握っていた。劔を持った子供がすごい形相で走ってくる。

まるで親の仇にでもあったときのような……

ズシュツ

剣は俺の腕に突き刺された。

またとてつもない痛みが走る。

また誰かが立っている。

今度は槍を持った男性。

それで今度はまたもや足に・・・

次は女性。

鎌で腹部を裂いた。

老人。

子供。

大人と。

めまぐるしく誰もが俺を殺そうと襲い掛かってくる。

すでに俺の体は刃物が刺さりまくり、隙間がないほど埋め尽くしていた。

[illegible]

それらはそう言いながら、俺の体に刃物を突き立て続ける。

それらはただ願っていた。

自分達を拘束する何かから……

開放された今でも恨みはそう簡単には消えてはくれない。

いつまでも訴え続ける……

「助けてくれ……開放してくれ……」と……

—
体
・
・
・

いつまで・・・

これが続くのだろうか……

すでに一月経っているような気がするし……

まだ十分も経ってない気がする・・・

「大丈夫」

そう言って、目の前に少女が現れた。

俺が思い出していない少女。

銀髪に俺よりも頭一つ低い身長の少女。

周りの人間から忌み嫌われていた少女。

彼女が俺の体を抱きしめる。

その瞬間全ての苦痛が和らいだ。

「私は君を恨んだりしないから・・・」

そう言つて、俺に微笑んだ。

俺は彼女の安らぎの中で意識が薄れていった。

・・・裕樹side out・・・

誰もが目の前の現状に目を見開いていた。

服装はおろか、見た目まで変わってしまった裕樹。

黒の髪は白銀になり、目は蒼から深紅へ。

仮面の男の近くに刺さっていた断罪は消え、裕樹は銃を持っていた。

着ているものは肩当や肘当てだけという軽装な鎧。

その上から着ているのは丈の長さはローブだが、どちらかといえば

コートに近い。

その光景はまるで神剣に覚醒した時のようだった。

「タイムリミットは五分・・・それまで耐えていられたら目的は達成だ」

男はこぶしを構え、目の前に集中する。

二人は対峙する。

男は裕樹に集中しているというのに、裕樹は見ているだけ。

さも、目の前の男に興味が無いというかのように。

先に動いたのは仮面の男。

一気に距離を詰め、手刀を振るう。

裕樹は最小限の動きでかわす。

男はそれに構わず何度も振るう。

しかし、裕樹は全てかわした。

男は距離を取る。

「・・・パワーモード・・・」

裕樹が抑揚のない声で言うと武器が光り、一つとなる。

その形を変え、片手で持つには大きいほどのハンドガンとなった。
一瞬で狙いを定め、引き金を引く。

その瞬間、男の目の前で光りが発し、爆発する。

「ふう・・・危ない危ない」

男は裕樹の横から跳びかかり手刀を首めがけて振るった。

裕樹は見向きもせず、それを銃で受け止める。

裕樹はそのまま左から跳びかかってきた男に右足で頭部を狙う。

男はそれを左腕で受け止めるが数メートルも弾き飛ばされる。

「・・・スピードモード・・・」

続けて裕樹は最初の形に戻し、男の反対方向に跳んだ。

裕樹は跳びながら男に向かって連射する。

男はそれを全て受け流す。

「・・・パワーモード・・・」

受け流していて動けないところを狙ってさらに男の足元を狙った。

煙の中からマナを圧縮したモノが多数打ち込まれてきた。

「ふっ・・・」

男はそれら全てを素手で受け流す。

「・・・」

「この程度ではやられんよ」

再び裕樹の手の銃は二つに別れた。

「詠唱開始・・・」

「!？」

裕樹が魔法を唱えることに気づいた男は全力で止めようと走り出した。

しかし、詠唱とともに裕樹の周りに浮かびだした無数の杭に阻まれる。

「魂は天壤の頂へといつかはたどり着く」

周りの杭が螺旋階段のようになり、裕樹はそれを駆け上る。

「魂は昇華され、永劫の自由を得る」

階段の頂から男に銃を向ける。

マナが込められ、光り輝きだす。

「全ての咎が赦され、真の自由を得る」

裕樹の詠唱と共に男は唱える。

かつて自分を救った者の理想を胸に抱いて。

かつて・・・自分がそう願ったように・・・

「ソウルエクスキューション」

裕樹はそれを放つ。

二つの筒から放たれたマナの固まりは一つとなった。

それは無数に弾き分かれ、地上に降り注ぐ。

弾丸は的確に男に多角から降り注ぐ。

その数、十や百では足りない千以上の数が男を的確に迫った。

弾幕で上がった煙で男の姿は視認できない。

裕樹は力を使い果たしたのか、受身を取ることにも出来ずに落ちてきた。

全員が裕樹の落下地点に走る。

「ものべー、お願い！」

永峰の言葉により、人が乗れる程度の大きさのものべーが現れ、裕樹を受け止めた。

「なんとか耐えられたか・・・」

煙の中から声が聞こえ、全員が神剣を構えた。

第十四話

見たまま語ればそれは遥かな次元の戦いだった。

一体どれほどの研鑽を積み重ねれば辿りつけるのか・・・

速さでは目で追うのがやつとだった・・・

自分では一瞬足りとも耐えることができないだろうと言うことが全員が思った。

仮面の男が言った時間が五分・・・

実質的にはそれほど長い時間ではないが彼らの戦いはものの五分でさえもたなかった。

裕樹の最後の攻撃はそれほどまでに自身にもかなりの負担が掛かったのだろう。

見ていた者は思う。

ある者は感嘆を・・・

ある者は齒がゆさを・・・

ある者は目の前の光景に心奪われ・・・

様々な感情を抱いていた。

時間にして一分・・・

あまりの短さで彼らの戦いは幕を閉じた。

「なんとか耐えられたか・・・」

土煙の中から仮面の男の声が聞こえてきた。

仮面には亀裂が入り、服はボロボロになった男が片膝を付いていた。気を失っている裕樹以外の神剣士が警戒をし、各々の神剣を構える。

「まさか、半分である現状でアレができるとはな・・・」

些か気怠そうにしながらやれやれといった感じでため息を零す。

「ま、今では持たないのも事実か」

「貴方は一体、何者なんですか!？」

世刻がやや苛立ながら男に問いただす。

「今は答えられんと言っただろう?」

「今の一体何だったのですか？」

「・・・・・・」

カティマの質問に男は暫し考えた。

「それと暴走の時に武器が変わった理由を答えてもらえますか？」

裕樹が世刻といたときに暴走した時の武器の変形の理由を斑鳩が問う。

「簡単に言えば、他人の魂を借りたんだよ」

「他人の・・・魂・・・」

「まあ、今の姿はソイツ本来の姿だな」

「どういう意味よ？」

「他人の魂を借りるということは簡単に言うなれば、自身の器に入れるということだ

器に入れられる一定量は決まっている。

魂にはそれ本来の形がある、それに準じただけだ。

しかし、本来持つている自身の魂で一杯だ。

ならば、さらにそこに他人の魂の一部を入れる方法は何か？

簡単だ、自身の魂の一部を別の器に入れればいい。」

「そんなことができるかよ！？」

有り得ない事実にもルラス力が問う。

「昔、文字通り山のような大剣が大地に刺さっていた世界があった・
・

その世界には呪いが掛かっていた。

それは輪廻の魂を喰らい、魂によって世界を滅ぼすという呪いがある。

呪いをかけた奴に聞いたんだよ、魂の固体化にな」

その世界の名は『煌玉』

独自のマナの形成していて外部の存在では行動が制限される世界。

自らの運命を知る少年に言われて向かった世界で・・・

かつてそこを救ったときに呪いを掛けた人物に教えてもらったのだ。
自分を楽しませてもらった礼にと・・・

呪いを掛けた奴が作ったわけではないが、理屈は理解できた。ならば自分たちに来るように工夫するだけ。

「まあ、無駄話はこちらまでだ。

これで同じようなことがないかぎり暴走の危険性はない」

「ちよつと・・・待て、お前は俺の・・・何を知っている？」

いつの間にか、目を覚ましていた裕樹が息も絶え絶えに聞く。

「ある程度のことは・・・

さらに言うなれば、俺とお前は裏と表だよ・・・」

その言葉を最後に男は消えた。

仮面の男の移動した先は世界と世界の狭間。

世界というよりも部屋を作ったという程度だが。

部屋にはかなりの高度な機械。

床にはその機械から伸びたコードが埋め尽くしている。

コードの先にはいくつもの人が入れるようなカプセルが並んでいた。部屋の真ん中にあるカプセルを慈しみが籠った目で眺めて男は言う。
「早く、アイツに思い出してもらえるといいな」

男の言葉に呼応するかのようにカプセル内の溶液に気泡が泡立つ。

「ふふ、貴方ともあるう者が随分と手の込んだことをしますね？」

男の背後に少女が現れた。

東洋風の着物を見に纏い、髪に付けた髪飾りの鈴がチリンと鳴る。

「お前か・・・お前には関係ないだろう。

それに俺達はお前と敵対しているはずだろ」

そう言つて、男は少女にいきなり殴りかかった。

「ええ、確かに敵対はしましたが彼はどうでしょうね？」

少女は動いた素振りも見せずにまたもや男の背後に現れた。

「どういう意味だ!？」

男は振り向きながら言い放つ。

「そのままの意味ですよ。」

私と彼は同じような価値観を持っているということですよ。

人間が困難に立ち向かうことに美しさを感じているというね?」

着物の袖で口元を抑えながらコロコロと少女は笑う。

「ふざけるな!？」

俺達を・・・アイツをお前なんかと一緒にするな!」

男はその場で少女に向けて手刀を振る。

それは斬撃となり少女を襲う。

「まあ、私はこれで失礼しますね。」

これからもあなた達を見させてもらいますからね。

ふふふふふふふふ

斬撃によつて少女の体は二つに裂けたが苦しむ様子も無く言葉を続ける。

少女はその言葉を最後に幻影のように透き通つて消えてしまった。

「貴様が出張するというなら・・・」

アイツの根幹を揺る可能性が高いな・・・

ち、急がないとな・・・」

再びカプセルに視線を向けると男の仮面に亀裂がさらに全体に走る。

割れた仮面の下にあった顔は姿が変わる前・・・

銀髪でない黒髪だった時の裕樹と全く瓜二つだった。

数日後、剣の世界での補給を終え、ついに移動することが決まった。大半の生徒がこれで元の世界に戻れるとそんな期待を抱いていた。それは甘い幻想だと知ることになるのだが・・・

「ええええええええ!？」

生徒会室に世刻と永峰の声が盛大に響いた。

「移動できないってどういうことですか？」

「それが・・・」

タリアが言うには時間樹には次元振動というものがあり、それで多少の座標が変わってしまうのだ。

世界はそれぞれある程度の位置にあることは解るのだが、座標が解らなければ世界を渡ることはできないのだ。

「とりあえず、座標がわかっていいる世界に渡ることにするわね。」

希美ちゃん、ちょっと来て」

「わかりました」

斑鳩は永峰を連れて部屋を出て行った。

「アレをするつもりか？」

「でしょうね」

「ん？どうしたんですか？」

ソルラスカとタリアが会話が気になったのか、世刻が聞いてきた。

「いや、まあ、知らない方がいいこともあるさ」

「そうねえ」

珍しくソルラスカにしては齒切れが悪かった。

タリアもはつきりと答える気はないようだ。

「「???」」

意味が分からない裕樹と世刻は首を傾げるだけだった。

「レーム、こっそり見てきてくれ」

「わかったのだ」

世刻の言葉に頷き、レームは姿を消して誰に気づかれることもなく見に行った

しばらくして二人が戻ってくると二人の様子は対象的だった。

斑鳩はどこか清々しく、永峰は虚ろな目というか絶望しているような感じだった。

「レーム、なにがあつた？」

「知らない方がいいと思うぞ」

見に行ったレームまでもが永峰に対してどこか可哀想な目で見てい

た。

「望ちゃん、私・・・汚れちゃったよ・・・」

永峰はなにやら呟きながら俯いていた。

次元鯨によって次の世界を目指して次元跳躍している。

窓の外の風景は何かが捻れ曲がり、たまに何かが光ったりしている。そのような空間を移動している。

「なんとも不思議な感じですね」

「そうだな、敵もないし安全だしな。ほらよ」

裕樹は窓の外を眺めている世刻に生徒会の備品であるコーヒーを飲みながら世刻の分を差し出した。

「ありがとうございます・・・っ」

礼を言い、コーヒーを口に含んだ瞬間、世刻の顔がしかめた。

「にがつ!？」

「そうか？」

そう言つて裕樹はコーヒーを啜る。

「これブラックですか？砂糖とか入れてないんですか？」

「ブラックかどうかは知らんが砂糖とかは入れてないな」

裕樹の答えを聞いて、世刻は砂糖を取りにポットのあるところに向かった。

「しかし、やっぱりちょっと暗いわよねえ」

「そうね」

椅子に座りながらこれからの予定等のことを話しあっていた斑鳩とタリアもコーヒーを飲んでいた。

彼女らも裕樹から渡されていた。

最も、砂糖やらミルクやらが近くに置いてあるが・・・

数日も暗闇の中で移動していると時間の概念がなくなってくる。

そのため、生徒達もおかしな時間で行動することになり、それによって体調を崩している者まで出てきている。

生徒の安全を守らねばならない神剣士達はできるだけ不測の事態にも対応できるように体調は万全でいたいのだ。

それは生徒達も同じである。

逃げるときに体調不良で病人が増えるとそれだけ危険が増えるのだ。「なら、ものべーに何とかしてもらうか？」

ソルラスカが笑いながら無茶なことを言う。

「あのねえ、いくら電気や水が出せるものべーでもやれないことがあるわよ」

タリアが呆れながら言う。

ここまで、生徒たちが生活するのに必要な水や明かりのための電気。そういったものは全て物部学園と一緒にになっているものべーが出していた。

永峰に原理を聞くと

「それが何故かできるんですよね」

と言っていた。

タリアがソルラスカに呆れ、肩を竦めていると外がいきなり明るくなった。

「何！？敵襲！？」

斑鳩が椅子から立ち上がり戦闘体勢に移ろうとしていると永峰が近寄っていた。

「あのう、ものべーが太陽を作ったみたいです」

「……はああああ……」

永峰としても万が一のためにも不安要素は排除しておきたかった。それでダメ元でものべーに頼んだところ、作れてしまったようだ。斑鳩やタリア辺りが原理がどうこうと言っていたが、ものべーだから無理やり納得しようだ。

「もう、本当に何でもありだな……」

「そうですね」

裕樹と世刻は呆れていた。

そしてそれから数時間後。

物部学園の一団は新たな世界の門を通り抜けた。

それまで移動していた暗い空間が嘘のように光で包まれた。

第十五話

「ぼえーーーーー」

ものべーの鳴き声と共に校舎全体に響く衝撃。

さほど大きい衝撃ではなかったが、一同が驚くには十分あった。

衝撃が収まると目が眩むような光も収まっていた。

「つつ〜」。

今のは一体・・・？」

体の何処かをぶつけたのか、痛みに堪えながら世刻が呟いた。

「今の衝撃は何処かの分枝世界に入った証拠よ。」

窓の外を見てみなさい？」

旅団として何度も経験しているからか斑鳩、タリア、ソルラスカの三人は今の衝撃にもかかわらず、堂々と立っていた。

斑鳩の声に世刻と永峰は窓に目を向けた。

窓の外には剣の世界と同じように大きな森が広がっていた。

ただし、木の大きさが明らかに違う。

一本一本の木が大きさが100メートルは下らないほどの木が大地一面を覆い尽くしていた。

校舎の至る所から

「うわあああ」

「すっげえええ」

と言った声が聞こえる。

剣の世界も自然が多かったがこの世界とは比べ物にもならない。

「ん？」

おかしい気配を感じるな。

何だ、この綺麗なマナを持った生き物は？」

同じく外に目を向けていた銀髪の青年・・・裕樹が訝しんでいた。

「それは恐らく精霊だろうな。」

これほどの自然があるんだ。

いたとしてもおかしくないだろうな」

答えたのは腕を組んで壁にもたれていたソルラスカだった。

「精霊って本当にいたんですか？」

疑問を持つ世刻と永峰。

これまで空想上の生き物のだった精霊という言葉が出たことに話に加わる。

「精霊は元来、争いを好まない生き物でマナを得て生きているのよ。精霊は肉体ではなく霊体・・・マナでできているのよ。」

そして精霊がいる世界には必ず大きな精霊回廊が存在しているの「霊体ってお化けってことですか？」

「いいえ、精霊は肉眼で見えることができるし、むしろ神剣士の存在に近いわ」

「じゃあ、その精霊回廊ってなんですか？」

「精霊回廊によって、精霊はマナを得ることができる。」

そして精霊回廊は他の世界に繋がっている。

それに大きさを問わなければ、全ての世界にあるのよ」

「所謂、世界にマナを供給する道みたいなものと覚えていればいいのよ」

斑鳩の説明をタリアが簡潔にまとめる。

「じゃあ、私たちの世界に精霊がいなかったのは・・・」

「マナが少ない・・・精霊回廊が小さいからですか？」

「その通りよ。」

精霊が生きれるほどのマナを供給できないからでしょうね」

「というか裕樹は良く気づいたな。」

俺でさえ近くに行かなければ解らないのに」

常人では感じることでさえできない存在を感じ取ったことに感心するソルラスカ。

「恐らく神剣が感知に特化しているのでしょうね。」

銃という神剣の形で懐に入られると対応がしにくいでしょうから「かもしれない・・・」

目を瞑り、何かに集中している。

神剣の力を使い、何かを探している。

「近くに人の気配がないな。」

この辺りには集落は無いようだ」

「そう・・・」

じゃ、先ずは人のいる場所を探しましょう」

人がいる場所を探し始めて数十分。

一際大きい木を見つけた。

周りにある木よりも数倍は大きい。

その木の枝の上に集落があった。

その一つの枝の先にもものべーを待機させ、情報収集のために数人が集落に行くことになった。

「さて、誰が向うことにしましょうか？」

「そうね、まだ危険がないことが分かっているから神剣士だけがいいでしょうね」

斑鳩が皆に意見をまとめるためにホワイトボードに書き込んでいく。
「危険がある場合、ここも襲われるでしょうから何人かは残ったほうがいいと思います」

タリアとカティマの意見は最もで両方の可能性を踏まえて行動することになった。

斑鳩が求める情報を書き込んでいく。

この世界はどういった世界なのか。

危険な生き物や植物。

他にもいろいろ書き込んでいく。

「じゃあ、生徒たちは外には出れないんですか？」

皆も出たいと思うんですけど・・・」

「少なくとも危険がないことが分かるまでは外には出せないわね」
斑鳩の返答に永峰が肩を落とす。

「わかりました。」

「じゃあ、皆にも伝えないといけませんね」

「ええ。それは私が言っておくわ。」

さて、それじゃあ誰が行くか決めましょうか。

それじゃ・・・望君。

望君とあと二人程選んでくれる？」

「はい・・・って!？」

俺が行くのは決定なんですか？」

「お前が一番能力的に平均的だからだろ」

斑鳩からメンバーの決定を一任された世刻に裕樹が補足する。

「戦闘能力もあり、人当たりも悪くはない、言葉遣いもな。」

万が一の時に戦え、他の人間に不要な争いを起こすこともないだろう」

「そうかもしれませんが・・・」

つらつらと自分が任された理由を言われ、言い返せない世刻にさらに追い打ちがかかる。

「一番の理由はお前がとてつもないお人好しだからだ」

「お人好しって・・・」

そんなにお人好しですか？」

「はっ、愚問を・・・」

前の世界でカティマを助けようと言い出したのは何処の誰だよ？」
周りに助けを求め、見回すと全員から言われる。

「お人好しだな」

「そうね」

「お人好しですね」

「私もそう思うわ」

永峰以外に言われ、世刻が落ち込んでいると永峰が言った。

「望ちゃんは何って人を放っておけないだけです!」

「一緒だろ、希美・・・」

永峰が止めを刺した。

結局、世刻が選んだ二人は裕樹とカティマだった。

最後まで斑鳩と永峰が一緒に行くと言い張ったが、斑鳩は何かの時に生徒会長として生徒をまとめる為に、永峰は神獣であるものべーが学園とくつついているからそれを理由にしぶしながら納得した。

裕樹たちが情報収集のために街に向かうと同じ時。

少し離れた森で尋常じゃない速さで駆ける少女がいた。

髪は腰に届く程長く触覚のような髪が出ている。

布をあしらった服を着ている。

「なんで・・・？」

少女は焦った風に独り言を呟く。

「変な感じがする・・・」

ジルオル以上にやばい感じが・・・

長老が言っただけのことよりもやばい者がいるってこと？

ジルオルがいるだけでも大変なのに・・・」

ジルオル・・・破壊神ジルオル。

かつて神世の時代・・・

この時間樹で神々を殺し尽くしたとされる。

その力は災厄とも言われる。

誰も立ち向かうことはできないと・・・

ただ一人の少女を・・・

ただ一つのオリハルコンネームを除いて・・・

「ジルオルじゃない何かがいる！

それ以上に変な感じがする！

でも・・・何処かで感じたような・・・」

かつて、感じたことがある気配を訝しんでいた。
少女はその正体を確かめるために走り続けていた。
既知感のある気配を持った存在がいる街へと・・・

第十六話（前書き）

昨日、外伝のファンディスクが終わりました
彼が生きているのは正史でいいんでしょうか？
予想以上に衝撃が大きかった海水浴・・・
なにがどうしてこうなった・・・

第十六話

裕樹、世刻にカティマは人の集まる場所を目指して行動していた。「情報収集のために酒場に向うなんて本当にファンタジーみたいですね」

今までゲーム内での経験でしかなかった行為を自分が体験するなんてと、苦笑していた。

「まあ、それだけ何処の世界も似たような物だということだ。それに・・・

みたいではなく、現実にはファンタジーだからな・・・
良くも悪くも・・・な」

誰しもが子供のころに憧れたであろう大冒険・・・
今までにない刺激が自分を襲う。

興奮だけでなく恐怖までもが・・・
前の世界で感じた自分の手で何かを殺すということ。
殺される前に殺す・・・

生きるためにする当然の行為は、平和な世界にいたときには忘れていたことだった。

人は生きるために命を奪い続ける生き物ということを・・・
「そういえば・・・

裕樹さんはなんでその格好で？」

裕樹の格好は学園内で着ていた制服ではなく、戦闘の時の服・・・
軽鎧に膝まであるコートを羽織っていた。

「目立つからだ。

ある程度は世界の文化に合わせなければいけない。
俺達にとって当たり前でも世界の住民は違う。

何に巻き込まれるかわからんからな」

世刻は裕樹の言い分になるほどと頷いた。

「ここがどうやら酒場のようですね」

カティマが酒場であろう建物を見上げながら言った。

入り口の上には「パステイル亭」と書いてある看板があった。

「そうみたいだな・・・」

「それじゃ、入ろうか」

世刻がそう言って入り口をくぐり、カティマと裕樹がそれに続いていった。

酒場はそれなりに賑わっていた。

三人が店内を見渡していると一人のウエイトレスが気づき、近寄ってきた。

「いらっしやいませ、三名様ですか？」

「あれ？」

「皆さん、もしかして別の世界の人ですか？」

いきなり別の世界の人間と見破られ、三人は驚いた。

「何故、俺達がそうだと分かった？」

裕樹が少女を睨みながら聞いた。

「だって、見たこともない服を着ていますからね」

少女は世刻の方を見ながら言った。

「たまにいらっしやいますからね。」

「ここではそれほど珍しくないですから」

「へー。」

「この世界は別の世界からも人が来るのか」

「はい。」

「それでは皆さんのお料理持ってきますねー」

世刻の発言に笑顔で頷きカウンターに行こうと少女が振り返った。

「待ってください！」

「私たちはこの世界のお金を持っていないのです」

歩き出そうとした少女をカティマが止めた。

「大丈夫ですよ。」

この店のサービスですから。

その代わり、この店をご贖員に。

皆さんは空いてる席に座っていてくださいね」

そう言って彼女はカウンターに向かつて行った。

三人は彼女がカウンターに向かうのを目で追っていた。

「じゃあ、座って待つてみましょうか。」

あそこの席が空いてますね」

世刻の言葉に二人は続き、三人は席に座った。

「とりあえず確認することはこの世界に危険がないか、もしくは起こってはいないか。」

それにさっき言われたことも気になる」

裕樹は情報を集める過程で大事なモノを上げていく。

「さつき・・・」

他の世界から人がよく来るということですね」

「そうだ。」

何らかの方法で他の世界に行く技術。

または精霊回廊のような人でも移動ができる何かがあるはずだ。

もしくは他の世界が次元的に近接している・・・

いわゆる群世界になっている可能性がある」

「群世界ってなんですか？」

世刻が裕樹に聞き返す。

「群世界は次元的に世界が近く、他の世界に行きやすいことが特徴だ。」

もちろん簡単ではないが、ある程度は行き来しやすくなっている。

世界を渡る装置が造られている世界もあるしな」

裕樹は質問に対してすらすらと語る。

「とても詳しいんですね」

「さあな、知識だけは頭の中にあるようだ。」

あの男との一戦から記憶に辻褄に合わない。

というよりも正しい記憶に戻ったという方が正しい気がする・・・

「

テーブルの上に乗せていた手を震えるほどに握り締めていた。

それにより、戻った記憶はそれほど良いものではないということ
を二人は察することが出来た。

「お待たせしました、サービスの料理です」

先程の少女が両手に多くの皿を持ってきた。

テーブルが埋まるほどの皿が乗せられた。

「こんなに・・・

いいんですか？」

「はい、それではごゆっくりどうぞ」

世刻の質問に少女は笑顔で頷き、おじぎをして去ろうとした。

「あ、ちよつと待ってください」

「はい？」

「この世界について教えては貰えないでしょうか？」

カティマが引き止める。

「いいですよ。」

では、何について話しましょうか？」

この世界について話せと言われて何に話したらいいのか分からない
のは最もだろう。

自分の中で常識になっていることに話せと言われてもすぐに言葉に
は出来ないだろう。

ましてや、世界などという曖昧なモノの説明など出来ないだろう。

「そうだな・・・

この世界で戦争などの大きい争いはないか？」

「それは・・・」

いきなり少女の齒切れが悪くなり、先程のまでの笑顔はなく俯いた。

「・・・その・・・精霊と・・・争っているんです・・・」

第十六話（後書き）

レチエレの名乗りが抜けてしまった・・・
タイミングがあわないと名乗れないですね
どこが一番問題ないのか分かりづらいです

第十七話

酒場の少女が言っていた、精霊と争っている・・・

三人はこれについてある程度の情報を集め、一旦物部学園に戻った。三人は残りのメンバーに聞いた情報を纏めて説明した。

この世界では人間と精霊が争っているということ。

理由は、地上の開拓しに行った人間の開拓団を精霊が殺した為ということ。

地上の森のほぼ全て精霊の支配地域で、精霊側には『精霊の娘』と呼ばれる少女がいるということ。

その少女の名はルプトナと言い、よく食料や燃料調達などを邪魔してくるということ。

最近では、それなりに深くまで入ろうとすると、必ず邪魔してくるということ。

酒場にいたウェイトレス・レチェレと名乗られたと話していたときにたまたまいたこの街の責任者であるロドヴィゴと言う男性が、まかに説明してくれた。

その会話の中でルプトナが襲ってくるというところでレチェレが

「ルプトナさんは悪い人じゃないです」

「ルプトナさんに殺された人がいない」

と言っていた。

レチェレは過去にルプトナに助けてもらったことがあるらしい。

ロドヴィゴの方は全てを信じているわけではないが、確かにルプトナに殺された人はいないと言う。

殺しているのはヒトモドキだと言っていた。

人の形はしているが話しかけても返事はなく、虚ろな目をしているという。

ヒトモドキは精霊が使って人間を殺しているとロドヴィゴは言っていた。

「奇妙ね」

ひと通り説明を聴き、タリアがそういった。

「そうね、私もそう思うわ」

斑鳩がそれに同意し、頷いた。

二人の意味が分からずに首を傾げている世刻、永峰、ソルラスカの三人だった。

「精霊は本来争いを好まない。

それゆえにいきなり人を殺すことは、まず有り得ないと言ってもいいわ」

「それに、レチエレ殿が精霊の娘に助けられたと言っていました。

仮に精霊がヒトモドキを使っているならば、助ける意味がありません」

斑鳩の説明にカティマが補足する。

「それに、ヒトモドキは恐らくミニオンだろう。

ということは背後にいるのは精霊ではなく・・・」

「・・・光をもたらす者」・・・

「間違いないでしょうけど、今ではまだ推測の域を出ない。

明日、ロドウィゴさんに詳しい話を聞きに行きましょう。

それと同時に下に行く時に雇ってもらえるようにお願いしましょう」

「そうね、先立つ物が必要になるでしょうからね」

斑鳩とタリアがさくさくと話を纏めていく。

必要なことをまとめている斑鳩に永峰が近づいていった。

「じゃあ、木の上だと危険はないんですよね？」

「そうね・・・ないと思うわ。

皆に明日は木の上なら自由に行動してもいいって伝えてもらえるかしら？」

永峰の話の先を察し、斑鳩は笑顔で答えた。

「それじゃ、詳しいことは明日全員で聴きに行きましょう。」

今日はこれで解散よ」

斑鳩の言葉を聴き、各々は好きな行動に移っていった。

斑鳩、タリアは明日のために少し話し合いに・・・

ソルラスカとカティマは鍛錬をしに校庭に・・・

永峰は生徒たちに伝えるために校舎を周りに・・・

世刻はレーメと会話しながら部屋に戻りに・・・

裕樹は屋上に登っていった・・・

・・・裕樹side in・・・

俺は目を閉じ、思い出している記憶について考えていた。

あの戦いのせいなのだろう。

今までにない記憶が色々と溢れてきている。

その中で一際、俺の頭の中に一番気になる記憶があった。

二人の仲間と共に行動し、目的のために様々な世界を巡っていた。

俺達はある思想の為に対立している二つの組織から情報を得ていた。

俺達は二つの組織のどちらにも属せず、中立を維持していた。

俺に関してはどちらの思想も間違っているとは思わないからだ。

今回もその貰った情報で向かった世界だった。

そこはある一人の人物に世界が喰われるという情報だった。

喰われるだけならば行くつもりはなかったが、喰われるだけではなかった。

魂までも全てにおいて自由はなく、完璧な拘束されるからだった。

その人物を見つけ、戦い、勝った直後にそれは起こった。

あの時・・・

俺が間違いを起こさなければ・・・

こんなことは起きなかったはずだったのに・・・

俺の背後には仲間であろふ二人がいる。

「やつ・・・ね、これ・・・した・・・」

「そやな、・・・で・・・たな。し・・・へん・・・やつ・・・」

俺は断罪を『何か』に刺して終わったはずだった。

なのに、『何か』に突き刺したまま動けなかった。

「ん？どないしたんや？」

背後から青年の声が聞こえる。

聞いたことのないはずなのに、妙に聞きなれた気がする。

俺が突き刺したままの『何か』から、あるものが溢れた。

それは俺の中に・・・心の中に吸い込まれていった。

それは『何か』に取り込まれた、魂だった。

その魂はしきりに訴えていた。

ある魂は『自由を・・・！自由を・・・！』と

ある魂は『怖い・・・怖い・・・』と

ある魂は『返してくれ・・・返してくれ・・・』と

魂からの渴望、怨念、後悔、様々な感情が一度に溢れた。

俺の心はそれに耐え切れなかった。

そこから俺の体は自由に動かすことが出来なかった。

あれは暴走だった。世刻のときのような、生ぬるいものではなかった。

た。

俺の周りに元は断罪だった杭が飛び回り、周りのモノといったモノ

全てを貫き、背後にいた仲間にまでそれはおよんだ。

二人は必死に俺を止めようとするが杭に阻まれて近寄ることさえ出

来ない。

二つの神剣を振るい、魔法を飛ばす。

ただ、この魂たちの想いが収まるのを待つしかない。

これは魂たちによる俺の体を使った、『何か』に対する八つ当たりだった。

その『何か』はもうここには無い。

故に、周りにあるものの全てに八つ当たりするしかなくなった。最後に魂の無念が膨れ上がり、全てのマナを使い世界すべてを飲み込んだ。

それは世界さえも壊してしまうほどの威力だった。

二人は見るも無残に全身が血まみれになってしまった。

青年が少女を庇っていたのか、青年の方が傷がひどかった。

彼らは倒れるが周りには何も無い。

完全なる無。

かつてこの空間に世界があったということだけ。

何も見えず、俺たちだけが存在しているだけ。

神剣を持っていたが故に形だけが残っている。

倒れているのか、立っているのか、浮いているのか。

何もかもがあやふやだった。

全てを壊し終えた俺は正氣に戻った。

俺は手が震えた。

自分がしたことに・・・

救うはずだった世界を・・・

背負うべき仲間の命を・・・

この世界に満ち溢れていた全ての魂を・・・

救うはずの俺が・・・

壊した・・・

「あ・・・あはは・・・あははははは。

俺の目的が・・・あつはつはははは」

俺の心は完全に壊れる寸前だった。

「うつ・・・くう・・・」

仲間の一人の少女がまだ生きていることに気づいた俺は、急いで駆け寄り膝を突いて抱え上げた。

「良かった・・・元に戻って・・・」

彼女はかろうじて動く手で、俺の頬を満足そうに撫でた。

彼女の体からは金色の霧が溢れ、体が透けてきていた。

不意に俺の後ろの青年が起き上がり、悲しい目をしながら後ろから俺の胸元を素手で貫いた。

「ワイはあんたに救われたんや・・・」

その借りを返すで・・・」

男に貫かれた瞬間多大な虚脱感に襲われた。

「心を強く・・・」

これでお前は全てを失う・・・

だから今度は今よりも強くな・・・

■ ■ ■ のことは俺に任せろ」

俺の記憶はそこで途切れていた。

・・・裕樹side out・・・

第十八話（前書き）

後書きにてアンケートがあります

第十八話

夜遅くの物部学園の屋上に一組の男女が佇んでいた。

「まだ足りない・・・」

圧倒的にまだまだ足りていない。

経験も強さもあいつらでは頼りなさ過ぎる・・・

アイツのことも■■のこともあるというのに」

「そうですね・・・」

まさか彼女の咎とはいえ、ほんの一部であそこまで暴走するとは思いませんでした。

彼の過ちはあそこで断罪を使ったこと・・・

まあより確実な方法を執っただけなんでしょうから、攻めるわけにも行きませんね」

「記憶に関しては俺が握っているから問題はないのだが・・・

マナは他の世界から少しずつ得ているから問題はないが・・・」

「あまり長引くと問題ですね・・・

その世界にまで影響がでないとも言いきれませんがね」

「解っている・・・

だが、数は的確に揃っているしこっちも開放は出来ることは解ったからな」

「ですが、あまり順調とは言えませんがね。

ああ、そうそう。

例の子が彼らの手助けに回ります。

貴方達は別行動で他の転生体をお願いできますか？」

「例のつてことは・・・

しかし彼女は・・・」

「ええ、恐らく縛られるでしょうね。

彼女は彼ほど高位の神剣ではないですからね」

「問題ないのか？」

強さも記憶もない彼女・・・は・・・

問題なさそうだな・・・」

彼女の性格を考えるとむしろ彼女の方が役にあっているだろう。そう考えた男は肩をすくめて答えた。

「でしよう？」

だから貴方達には他の・・・」

「断る。」

俺がするならいいが、アイツが決めることだ。

俺はアイツの意志を尊重する。

たとえどんなことがあろうともな・・・」

「あなたならそう言うと思いましたけどね。」

彼には伝えて下さいね」

「安心しろ、この世界で伝えることになるのは解っている。

そこでどうなるかはお前の能力でも見れないだろうしな。

最も、その能力で伝える機会があると解るのは便利だがな」

「ある程度のことしか解りませんからね。」

それが確実にそうなるわけでもありませんから・・・」

「ある程度は修正するさ・・・」

そのためにアイツだけでなく俺も出張ることになったんだからな。

俺は■■■の方に専念したかったんだがな・・・」

女は男の行動が彼に基づいていることに解っていたが何か違和感を感じていた。

「それも彼の為なのでしょう？」

「そうだ、もう少しで・・・もう少しで・・・！」

男の顔は歪んだ笑顔になっていた。

「・・・・・・・・・・」

それでは私はこれで・・・」

「俺も去るとしよう・・・」

先に男が瞬時に消えた。

恐らく彼女の方に行ったのだと女は思った。

「あなたも昔に戻れるといいのですが・・・」

女の方は気づいていた。

男の目に狂気が混じっていることに・・・

男自身も気づいてない想いに女は気づいていた。

「あなたが一番辛いでしょうに・・・

おや？

誰か来ますね、私も帰りましょうか。

会うときには話が出来るといいのですけどね？」

自分自身にも気づいていない想いを感じた女は男の消えた場所を哀しみに満ちた目で見つめていた。

女も消えた後に屋上に入って来た者がいた。

「懐かしい気配がしたような気がしたんだが・・・

気のせいか・・・？」

気配を感じ、屋上に来た男は空を見上げた。

「全ては思い出せないのか・・・

俺はどうすればいいんだろうな？

俺はお前たちに手を向けたのか？

許してくれるのか？

答えてくれ、教えてくれ・・・

なあ、神威、マリー・・・」

空を見上げたまま、裕樹は誰かに聞いているような呟きを零した・・・

第十八話（後書き）

前書きに書いたようにアンケートがあります

主人公である神夜 裕樹を

このまま原作のメンバーと一緒に行くか

離れて行動するようにするか

どちらか好きな方を選んでください

来週月曜ぎりぎりまで有効とします

感想にてお願いします

第十九話

翌朝、神剣士全員で街に向かった。

街に着いてから二手に分かれることにした。

世刻、斑鳩、タリア、永峰たちが町の代表であるロドウィゴに話を聞きに向かうことになった。

裕樹、カティマ、ソルラスカの三人が森に降り、どの程度の危険があるのか、地形がどうなっているのかを体感で調べることに向かった。

「思ったりも視界がいいな、おまけに明るいしな」

「そうだな・・・」

木がでか過ぎて木々の間かなりの間隔が開いてるみたいだからな」

木々の葉の間からさんさんと日が差し込み、根元でも十分な明るさがあった。

一本一本が数十メートルもある木ともなれば根もそれを支えるためにかなりの範囲に広がっていた。

「そうですね。」

仮にミニオンと戦闘になったとしても戦える空間は十分にありますね」

「俺はさすがにやりにくいんだがな・・・」

「お前ほどの力があれば近距離でも戦えるだろ。」

あれだけ、槍を振るっていたんだからな」

ソルラスカが笑顔で裕樹の背中を勢い良く叩いた。

「ある程度でミニオンが襲ってくる・・・」

とは言っていましたか、どの辺なんでしょうか？」

「そうだな・・・」

まあ、今はそこまで行く必要はないだろう」

「そうですね、そこまで危険を冒す必要はないですね」

「俺は別にミニオンがいくら襲ってこようが問題ないがな。いくらでも俺がけちらしてやるよ」

「良かったな、どうやらお客さんが来たようだぜ？」

「ええ、招かれざる客のようですね」

三人はここに向かつている何かに注意を向け、神剣を構えた。

三人が身構えた瞬間、人が立っていた。

「さーで、ミニオンか？それともそれ以外の何かか？

どっちにしろ、敵ならぶっ潰すだけだぜ！！」

その人物は布の服を着た少女だった。

少女は裕樹に勢い良く指さした。

「お前は一体・・・

一体、なんなんだ！！？」

「はあ？」

少女の発言にソルラスカが呆れ顔で問い返した。

「お前はいきなり何を言っているんだ？」

「僕の勘が言っているんだ！？」

お前はおかしい！

それに無性にむかつくんだ！！」

「いきなり現れて人をおかしいとか、むかつくとか失礼な奴だな」

「うるさい！

お前の存在がなんかむかつくんだよ！？」

少女は癪癪を起こしたように言いまくり、裕樹に襲いかかってきた。

「ちっ、いきなりか！？」

裕樹は後ろに下がって避け、神剣を片方だけ取り出した。

少女はそのまま追撃しようとしたが足元に連射され動きを止めた。

「！！！！？」

離れて攻撃するなんてずるいぞ！？」

「いきなり襲いかかってきておいて何言ってやがる。

カティマ、ソル、お前たちは他の奴らに連絡だ」

「はあ？」

そんなの一人でいいだろ。

俺も手を貸すぜ

ソルラス力は神剣を構えて反論した。

「いいんだよ、あいつは俺をご指名だ。

それに精霊側のようだしな。

殺されることはないさ」

つまらなさそうにソルラス力は頭を掻いた。

「じゃあねえな。

その代わり、負けんなよ！」

「御武運を」

カティマとソルラス力は街に向かって走りだした。

「さて、始めようか」

「ふんっ、後悔するなよ！」

少女は正面から突っ込んできた。

裕樹は少女に向けて標準を定めようとしたが、少女はそれから逃げるように横に跳んだ。

裕樹はそのままターゲットの動きに合わせて向きを変えた。

しかし、少女は跳んだ勢いで木を蹴って逆側の木に飛び移った。

「こっちだぞ！」

少女は勢い良く裕樹に回し蹴りを放った。

一見したところ、少女は神剣を持っているようには見えないが、速さはミニオン以上に速かった。

相手の武器がわからない以上、接近で戦うのは得策でないと判断して距離を取ろうとした。

しかし、少女は避けられてもさらに連続で蹴りを放ってきた。

裕樹は紙一重にそれを避け続けた。

少女は避けられることに焦ったのか大振りの蹴りを放ってきた。

それを難なく避け、裕樹は少女に標準を向けようした。

「甘いよ！」

少女は蹴りを放った勢いで一回転し、さらに回し蹴りを放った。

「ちっ」

裕樹はそれ躲して、後ろに下がった。

しかし、完全には避けられなかったのか頬から血が一筋流れていた。
「蹴りしかしてこないと思ったら、お前の神剣は靴型だったのか」

「そうだよ、僕はルプトナ！」

僕の神剣は永遠神剣第六位『揺籃』！！」

少女は名乗りながら胸を張った。

「そうか。」

じゃ、次はこっちの番だ」

裕樹はどうでもよさそうに聞き流した。

裕樹はもう片方の神剣も取り出して、数十発を連射した。

「ちよっつ、ちよっつと！！？」

名乗ってるときに攻撃は卑怯だぞ！？

こっちが言っただからお前も名乗れよ！？」

いきなり数多くのマナの塊が飛んできて慌てて避けながら少女は言った。

「敵の目の前でノンビリ名乗りを上げるほうがどうかしてんだよ。」

勝手に隙を見せといて五月蠅い奴だな」

「お前、やっぱりむかつく！！」

いいから名乗れよ！」

「・・・・・・五月蠅い」

答えない裕樹にルプトナはそれでもいい続ける。

「何でお前がその姿で神剣の位が六位の揺籃なのかは知らんが・・・
その姿で俺がむかつく奴は俺が知る限りは一人なんだが・・・

なんでその姿をしている？」

「何の話だ！？」

僕はお前がただむかつくだけだ！！」

最初から何故かルプトナは苛立っていた。

またもルプトナは正面から突撃した。

「って、おい！」

「なんで逃げる!？」

裕樹はルプトナが走ってくるのを見たら、そのまま後ろを向いて走り出した。

「なに、お前に興味が出たからさ」

「なら、なんで逃げるんだ。」

「こつち向いて戦えよ」

「いいんだよこれで・・・」

裕樹は木を蹴ったり、蔦を掴みながら木の上へ登りながら逃げた。

「さあ、追って来い・・・」

ルプトナも裕樹を追いかけるが二人の間は一定の間隔が保たれていた。

上へ逃げたかと思えば裕樹は下に降りて木々を掻い潜るように走った。

「さて、これでいい」

裕樹は逃げるのを止め地面に降り、立ち止まった。

「ふん、どうやら観念したようだね。」

「僕から逃げようなんて100年早いよ」

ルプトナは裕樹が逃げるのを止めるのを見て、背後に降りた。

「さて、何故俺がここに来たか解るか？」

「え？」

ルプトナは言われた意味が解らず答えられなかった。

「正解はここに水があるからだ」

「どういう意味だ？」

ここには川が流れていて、場が開けていた。

「俺の神剣はマナを放つ。」

それが弾となり敵を討つ。

「なら、マナの属性が変われば弾はどうなる？」

「そんなの弾も変わるにきま・・・って・・・」

「まさか・・・」

「その、まさかさ」

ニヤリと笑った裕樹が性質の変わった弾を連射した。

しかも、明らかに放った数よりも弾の数が増えていた。

「詠唱いらずで性質も変えられるのは良いが、周りにある性質しか使えないのはなあ」

普段は無属性として放っていたマナをその場のマナの性質のまま放つ。

無属性はただのマナの塊でしかないが、性質が変われば弾の形状も変わる。

赤なら炎、緑なら草や木、青なら水や氷に・・・

因みに、神剣の形状が変わるのも白か黒かの違いによるものだ。

基本が白か黒か、加えるのが赤、緑、青になる。

「水がどれだけ痛いかわかるか？」

それほど速くなくとも鉾石の硬さに匹敵する。

高速で打ち出された水が持つ威力は、木程度では簡単に破壊する」

打ち出された水が当たった木は中心部は大きな穴が空き、その周りに小さな穴が無数に空いていた。

その範囲は半径5メートルくらいだった。

「威力は落ちるが範囲は広くなる。

お前のように速さで攻める奴はまず機動力を削ぎにかかるのが定石だ」

「むう、水で強くなるのはお前だけじゃないんだよ、じっちゃん！」
ルプトナがそう叫ぶと裕樹の背後の川から水竜が現れた。

「これが僕の神獣だぞ」

「なに！？」

裕樹は振り向きざまに数発放ったが、神獣に当たっても何も起こらなかった。

「！？」

わだつみ
海神か！？」

「ふふーん、これで僕のほうが有利だね」

ルプトナは胸を張って自慢している。

「む？」

「どうやら争っている場合じゃないようだぞ」

「自分が不利になったからってそんな事言うなんて男らしくないぞ」

「あっち、お前が来た方角から大量のミニオン・・・」

「ここなら人形もどきか？の気配があるぞ」

裕樹ルプトナが来た方を指しながら言った。

「なんだって？」

「それじゃ、長老達が危ない!？」

ルプトナはその方向を振り向きながらそちらに駆け出そうとして止まった。

「ほら、手を貸してやるから行くぞ」

「嘘じゃないだろうな？」

「嘘だったらお前の気が済むまで俺を好きにしろ」

「いいだろう。」

「信じてやるよ」

「まだ移動している途中だ。」

その長老がいるとこまでに追いつけるかどうかが問題だな」

「そんなの追いつくに決まってるだろ！」

二人はミニオンを指して全力で移動し始めた。

第二十話

「向かう前にとりあえず・・・」

「どうしたんだ？」

走りだしてから背後から誰かが追いかけていることが解った裕樹は後ろを振り向き呼びかけた。

「誰かは解っている、さつさと出てこい」

木の影からある少女が現れた。

「なんで、ここにいる？」

俺は伝えろと言い、お前も了承しただろう？」

「その・・・やはり一人なのは心配ですから・・・」

それに彼が伝えに行ってくれましたから」

「そうか、俺達は今から精霊の助けに向かう。

大量のミニオンがそこに向かっている」

「なら私も助太刀に・・・」

「だめだ、お前はあいつらに場所を伝えてくれ。

方向が分かるなら連れてこれるだろう。」

あいつらは俺達が戦っていた所に向かってきている」

「わかりました、御武運を」

カティマは少し気落ちしながら、それだけ言うと先刻の場所に走りだした。

「さて、俺達も急ぐか」

「そうだね、長老たちを助けなきゃ・・・」

二人は精霊たちがいる所に走りだした。

裕樹とルプトナがミニオンに向かった同じ時。

詳しい話を聴くために酒場に一同は集まっていた。

世刻達はロドウィゴに護衛の話を了承してもらい、色々と話が終わった頃にソルラスカが息を切らしながら入ってきた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「ソル？そんなに焦ってどうしたのよ？」

「裕樹が戦っている！」

「え！？」

ソルラスカの言葉に全員が立ち上がった。

「ミニオンに襲われたの！？」

「急いで助けに行きましょう！」

各々が神剣を出し、急いで向かおうと入り口に向かいだした。

「いや・・・それがな・・・」

変なガキがあいつに喧嘩を売ってきてな・・・

何と言うか・・・」

戦闘が起こっているというにはソルラスカは言いにくそうにしている。

「戦闘バカのアンタにしてはあまり乗り気じゃないのね？」

普段なら自ら進んで戦いに向う彼にしては様子がおかしいことを指摘するタリア。

「そりゃ、あいつが負けることはないだろうし。」

それに相手がなぁ・・・」

「相手？ミニオンじゃないの？」

「裕樹が言うには精霊側らしい」

「精霊・・・精霊の娘ね」

「恐らくな、なにより意志がはっきりしていたからな」

「なら、殺されることはまず無いでしょうね」

「とりあえず、その場に向かいましょう」

殺されることはないとは解っても、世刻が少し落ち着きがなかった。

「そうね、ソル案内して頂戴」

「ああ、一応カティマが離れて戦いを見ているはずだ」

全員が戦闘になっているはずの場所に着くとそこにはカティマが立っていた。

「カティマ!？」

「二人はどうしたんだ?」

「ええ、離れて見ていましたが、何かを話すとどこかに向かい始めました。」

何があつたのか聞くと精霊たちにミニオンが向かっているそうです。

それで皆さんに話そうとここで待っていました」

「それで先に助けに向かったということね」

「はい、場所は聞いていたので案内します」

「それは助かるわね。」

はあ、ソルもこれくらい頭が回ったら良かったのに」

「なんだと!？」

俺が考えなしに動いてるとでも言うのか!」

呆れたタリアの発言にソルラスカが食って掛かる。

「事実そうでしょう!」

いつもいつも後先考えずに動いてるじゃない!」

「はいはい、喧嘩はそこまで。」

ミニオンが迫っているなら追いかけないといけないでしょう」

斑鳩がソルラスカとタリアが喧嘩が始まりかけているのを止め、今しなければならぬことを進める。

「カティマ、裕樹さんが向かった方に案内してくれ」
「分かりました」

カティマは世刻の言葉に頷いた。

全員は全力で裕樹達が向かった方に向かった。

彼らがその場に来たときにはもうすでにミニオンは二人にほぼ殲滅されていた。

彼らに見えているのはもう数人しかない。

裕樹とルプトナは互いに背を合わせ、即興で組んだとは思えないほど息が合っていた。

いや、息が合うというよりは裕樹のルプトナに対するフォローが巧すぎるのだ。

初めて組んだ相手に対して有り得ない程フォローが巧い。

それでいて且つ、裕樹は止めを刺すのを基本的にルプトナに任せている。

ルプトナが一体のミニオンに対して攻めている。

そのルプトナに対して離れた位置から魔法を詠唱しているミニオンがいた。

裕樹はそれに気づき、自分に襲いかかるミニオンの攻撃を横に跳んで避けながら、詠唱しているミニオンの太ももに弾丸を撃ち込み、詠唱を中断させた。

その間にルプトナは目の前のミニオンを倒し、足を撃ち抜かれ体制を崩されたミニオンに跳びかかり、回し蹴りでミニオンの首を撥ね飛ばした。

裕樹は跳んで躲したままさらに自分に攻撃してきたミニオンの真上

に跳び、ミニオンに大量の弾丸を連射した。

ミニオンは避けようとしたが間に合わず無数の弾丸に撃ち抜かれ、金色の霧となり霧散した。

そのミニオンで最後だったのか、周りにミニオンはいなくなった。ルプトナはそこで世刻達に気づき、世刻を勢い良く指さした。

「あーーーーー！」

お前はジルオル！？」

「！！！！？」

俺はジルオルじゃない！

世刻望だ！！」

ジルオルと呼ばれたことが気に触ったのか異常に反応し否定した。

第二十一話（前書き）

正月中に別の小説をあげてしまいました
何やってんでしょね・・・

でも後悔はしてない！反省はしてますが・・・
更新を早くできるように頑張ります

何故かルビがふれない・・・なんでだ？

第二十一話

・・・斑鳩side in・・・

カティマの案内で裕樹さんが向かった場所に向かったまでは良かった。

精霊の娘って娘とミニオンを戦っていたのもまだ分かる。問題はその後だった。

精霊の娘が言ったことが切っ掛けだった。

私は彼女と一緒に戦っていた彼に声をかけた。

「遅くなつたわね。」

まあ、大丈夫みたいね」

「ああ、アレはやかましいが、戦闘に関してはそこそこやるようだ」

彼は彼女の方を見ながら軽くだが笑っていた。

「あら、貴方が笑うなんて珍しいわね」

「別に、笑ってねえよ・・・」

彼は顔を背けながら頬を掻いていた。

（あらあら、可愛いところあるじゃない。

いつも不機嫌そうな顔じゃなくて笑っていたらいいのに）

私がそんなことを考えているといきなり裕樹さんに睨まれた。

「お前、今余計なこと考えたろ？」

「別にー、いいじゃない少しくらい」

「ちっ」

舌打ちしながら裕樹さんは顔をまた背けた。

（そういう態度が可愛いのにねえ）

ここまでは良かったのに・・・

「あーーーーー！」

お前はジルオル！？」

一際大きい声が聞こえ、そちらを見ると精霊の娘^こが望くんを指さしていた。

「！！？」

俺はジルオルじゃない！

世刻望だ！！」

望くんがジルオルと呼ばれたことが気に触ったのか異常に反応し否定した。

「ジルオルなんて名前じゃない！

前世なんて関係ない！

俺は破壊神なんかじゃない！」

そこで彼は態度がおかしくなった。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・え？」

彼は望くんに視線を向けると今まで見たことがないほどの目で睨んでいた。

その目にはどんな感情が宿っているのかははっきりとは読み取れなかった。

恨み、哀れみ、同情、嘆き、どれもが違うようでその全てが宿っているみたいだ。

今までもジルオルと呼ばれることに嫌がっていたが彼の前では初めてだったかもしれない。

確かに自分を誰かと間違われることは嫌だろうが、何故に彼は嫌がった望くんに睨んでいるのだろうか？

そう思えば、彼のことは何も知らない。

神剣である『断罪』に元の世界に召喚された。

そのことしか知らない。

何度も仮面の男に意味深な事を言われていたのに、それを聞いても彼は言葉をはぐらかすだけで何も答えなかった。

はぐらかすときに彼はとても悲しいそして寂しい目をしていて、考えている間に彼はもう普段の彼に戻っていた。

一瞬、見間違いだっただかと思えるほどその変わり様は一瞬しかなかった。

「すまん、他にミニオンがないか探るから静かな場所に行く」

彼は私に背を向けて、歩いて行った。

その背中からは何の感情も感じなかった。

（彼が目には宿していた感情は望くんに対してなのだろうか？

それとも・・・

何にしても彼に聞いてみないと分からないわね。

素直に答えてくれるとは思えないけど。

彼は望くんと同じで気になるんだけど、なんか違うのよね。

望くんは弟みたいで目が離せないんだけどね。
彼の場合はなんでなのかしら？)

斑鳩は自分の思考を疑問に思いながらも未だに言い争っている彼女の方に歩いて行った。

・・・斑鳩 side out・・・

「はいはい、言い争いはそこまでにして本題に入りましょう」

斑鳩は未だに言い争っているルプトナと世刻に呼びかけた。

「あなた、精霊の娘って言ったわね、名前は？」

「僕の名前はルプトナだよ」

「ルプトナね。」

それじゃルプトナ、精霊たちはどこ？

話があるのだけれど・・・」

「んー、さっきまでミニオンがいたから出てきたくないって」

ルプトナの答えに斑鳩はため息をついた。

「はあ、仕方ないわね。」

私たちはこの世界の精霊と人間たちの争いを止めたいの。

だから、そのために人間と一回話しあって欲しいって伝えておいて」

「わかった、それくらいならいいよ」

ルプトナの返事に斑鳩は頷き、皆を集め始めた。

「ま、仕方ないわね。

日を改めましょう」

「そうですね、いきなり和解のために話し合うのは難しいですからね」

タリアの言葉にカティマが頷く。

・・・裕樹side・・・

俺は皆から離れて一人森の中で木に背を預けていた。

（しかし、厄介なことになったものだ。

何のために彼女はアレを作ったんだ？

彼女の行動から考えるとジルオルを探すためだろうが、なんで記憶がない？

むしろアレはそれに対して険悪な感情を抱いている・・・

だが、アレの言葉と反応で確信できた。

あの反応からすると恐らく世刻はジルオルから何かしらの干渉があつたのだろう。

ということはあの中で世刻望とジルオルは別の存在になる。

現状ではあいつを切ることになるな。

より確実な方法があればいいのだが、不純物なら問題はないんだが・・・

一応元は同じだからオリハルコン・ネームを壊すことと同じではないしな。

今のところベースはアイツが作っているから問題ないはず・・・）

俺が現状に関する情報を整理していると目の前にアイツがやって来た。

「いきなり出てくるなっつての」

「しゃーないやん。

ワイは神出鬼没が売りなんやで？」

俺の前の前に突如、俺と同じ顔をした男が現れた。
違いは話し方と髪の色が黒というところだけだった。

「ほな、伝言やで。

例の女の子が旅団に加わるっちゅー話や。

あんさんは別行動でもう一方の方のワイと同じ存在ばかに対処してくれって言われたで」

「ああ、例の・・・

そっついや久しく会ってないな。

もう一方は拒否だ」

俺はある親子の姿を思い浮かべた。

「お前と同じ馬鹿のことは目的は予想できる。

それに俺らが手を出すまでもない、自滅すんだろ」

「そりゃ、そうかもしれないけどな」

俺の言葉に前の前の男は肩をすくめた。

「わかったわいな。

おばs・・・

オネイサンニハヨクイットクワ」

「どうした？」

「いや、なんや急に寒気がしてなあ」

「ふふふ、後で覚えておいて下さいね？」

「そうか・・・」

元気でな・・・」

「いやや、二度も死にたくない！！」

男は嫌なものを感じ取り子供のように喚いた。

「それじゃ、ワイはもう行くで。」

・・・それに彼女の痕跡を見つけたから楽しみにしてーな」

男は笑顔でそう言っただけ消えた。

俺には後半に何を言ったのか聞こえなかった。

会話が終わり、あちらに意識を向けると話は向こうも終わったよう
だ。

斑鳩には気づかれたか？

ある程度のことを話すのは仕方ないか・・・

（はあ、面倒くさ・・・

いろいろするのはアイツの役目だろ）

俺は質問されるのが目にみていることに諦めのため息を付いた。

・・・裕樹 side out・・・

第二十二話

ルプトナに精霊たちに話し合うことを伝えてもらえるように頼んだ後、一同は街に戻って来た。

街を出たときには高々にあつた太陽も着いた頃には沈み、夕日が辺りを綺麗な赤色に彩らせていた。

「ふうー、やっと戻ってきたね」

街に着いた時に疲れた様に永峰がため息を付いた。

「む」

「ソルラスカ殿、なにやら不満そうですね」

「だってよー。」

結局戦ったのは裕樹だけなんだぜ？」

カティマの言葉にソルラスカは不満を言う。

「全くあんたは戦闘馬鹿ね」

ソルラスカの言葉にタリアがため息を零す。

「じとー」

「…さつきからなんだ」

裕樹は帰ってくる間も、ずっと斑鳩の視線を感じていた。いい加減鬱陶しくなってきたのか斑鳩を睨む。

「別に」。

少し気になることがあるだけよ」

「はあ……」

「お、なんだ？」

沙月、裕樹が気になるのかよ？」

「べ、別にそんなんじゃないわよ……」

ソルラスカの言葉に斑鳩は少しどもりながら答える。

「じゃあ、ずっとそうしていて下さいね。」

望ちゃんの相手は私がしますから」

「ちょ、希美！？」

斑鳩の反応を見た永峰が世刻の腕に抱きつきながら言う。

「別に構わないわよ？」

それに反応する斑鳩。

明らかに斑鳩はからかっている。

それでも永峰は斑鳩に睨み返す。

しばらく斑鳩と永峰は笑顔で睨みあっていた。

それを一人の女性が眺めていた。

「あらあら、青春ねえ〜」

そう言うのにこやかに笑う、赤髪をショートボブにした女性。

肩から胸元まで露出し胸の谷間をやたらと強調し、腰から足が見える深いスリットが入っている服を着ている。

「「誰！？」」

いきなり現れた女性に驚いた世刻と永峰が同時に声を上げた。

「君が裕樹君で、こっちが望君ね」

「そうですけど…」

「…」

女性は裕樹と世刻を交互に見、なにやら頷いている。

世刻はいきなり現れた女性に驚き、目を動かして彼女の全体を見ている。

裕樹は少し警戒しながら睨んでいる。

しばらくして世刻の目が一点に集中した。

「望ちゃん、何処を見ているのかな？」

永峰が世刻をジト目で見ている。

「うん、私的にはやっぱり君のほうが好みかな」

「な!？」

ちよつと、ヤツイター!

いきなり何してるのよ!？」

彼女が裕樹の方に胸を強調しながら言い寄った。

その途端、斑鳩が慌てて声を上げた。

「あら、沙月が私にそんなこと言うなんて珍しいじゃない」

「う…」

そんなことないわよ…」

斑鳩の声は明らかに勢いがない。

「ヤツイータ、遅かったじゃない」

「本当は三日前にはこの世界に来てたんだけどね」

「だったらもつと早く合流しろよ」

「彼女は？」

「ヤツイータよ。」

一応、旅団のナンバー2よ」

「よろしくね」

彼女が現れたせいで場が一気に騒がしくなった。

その後も世刻にちよっかい出して永峰の反応をからかってと様々に場をかき回す。

かき回すといっても、誰も不快になっていないわけではない。

その様はまるで宴会をしているかの騒がしい。

裕樹はその様子を眺め、口元を少し緩めて微笑んだ。

「本当に…騒がしい奴らだ…」

不満げな言葉だが嬉しそうな声色だった。

彼はそのまま学園に歩いて入っていった。

その様子に気づいた斑鳩が後を追った。

彼らはその後、町長であるロドウィゴに精霊と争いについて会話してもらったという約束をもらった。

明日は彼ら・青年団を精霊の元にまで案内することになった。

その夜、裕樹の部屋で裕樹と斑鳩は机を挟んで向かい合って座っていた。

「コレしかなくて悪いな」

そう言いながら裕樹は斑鳩にコーヒーを差し出した。

「いいわよ別に。」

お茶をしに来たわけじゃないから…

仮面の男との関係を教えてもらえるかしら？」

裕樹はその問いに答えず、コーヒーを啜る。

それから五分は経っただろうか。

何も答えない彼に斑鳩はもう一つの問いを出した。

「なら、望くんに何であんな悲しそうな目をしたの？」

「…気づいていたのか」

それを言われた瞬間、裕樹はさらに飲もうとした手を止めて、斑鳩を見詰めた。

「目の前であんな目をされたら誰だって気になるわよ」

「まさか気づかれるとはな…」

裕樹はコップを置き、しばらく黙っていた。

「俺は自分で自分を否定する大嫌いなんだよ」

さらに五分位しただろうか…

ようやく彼は口を開いた。

彼が彼でなくなった時から抱えていた問題だ。

その先を望んでしまったが故に彼は『彼』になった。

何度も彼が悩んだことだ。

けれどもそれとは明らかに違う世刻の問題。

「世刻とジルオルは元をたどれば同じ魂。

本来ならば分かれるはずはなかった。

でも現実にはそれが争っている。

体の主権を争ってな」

「それで自分を自分で否定…ね」

裕樹はもう一度コーヒーを啜る。

斑鳩はその答えに考えることがあるのか、両手でコップを持ちながらも目を瞑っている。

「俺と仮面の男との関係か…

少し、長くなるぞ」

コップを置き、裕樹はさらに語る。

自分の今までの人生を…

第二十二話（後書き）

次回がやたら長くなると思われます
ネタバレがしてきた気がするよ
気をつけないと（；・・）

第二十三話（前書き）

連続投稿！

目が疲れたよ

やっぱり長くなりました

ゼロ魔の方では同じ位のはあるんですがこっちは初めての量です
そしてやっぱり少し展開が速いというかおかしい気がします

第二十三話

「俺とアイツの関係を話すには先ず、断罪との出会いからだな」

今までに幾度も聞かれたが裕樹は何も答えなかった。

それがようやく話され始めた。

斑鳩は一字一句聞き逃さないように集中した。

「出会い自体は前に話したとおりだ」

「前につて…」

「買い物帰りにいきなり召還されたって言う？」

「そうだ。」

「正しかったのはそこまでで、召還された世界が元の世界ではなかった」

「じゃあ、どんな世界に召還されたの？」

仮面の男は彼に思い出せと言っていた。

斑鳩はそれを思い出し、元の世界までの空白を尋ねた。

「俺が元来いた世界はあまり元の世界とさほど変わらなかった。」

「断罪に召還された世界は科学技術をやたらと発達させた世界だ」

「へえ、どんな風な世界だったの？」

「そうだな、技術と自然が程よく混ざり合い、正にいい意味で理想の世界だった…」

彼が断罪に召還された世界は確かに理想だったろう。

世界として…人々が長く生き残ることができる環境だけは…

「本当に理想ね。」

「自然も技術もあるなんて」

「だが、それだけだった」

「それだけ？」

「そう、それだけだ」

斑鳩は彼の言っていることが理解できなかった。

さつきまで正しく理想といていたのにそれだけとは何故なのか…

「技術も自然もあつたが、資源がなかった」

資源…如何に技術が発達していても燃料がなければ意味を成さない。
その世界ではそれを二つの大国が奪い合っていたのだ。

「これを聞けば、世刻あたりは分け合えば良いなどと言っただろうが…

それをできないから争っているのにな…」

裕樹は多少自嘲気味に苦笑した。

彼の目が嘆いているのか羨ましいのか蔑んでいるのか斑鳩は分からなかった。

「その世界には一つの言い伝えがあつた。

それは、一振りの槍を持ちし人間が勝利をもたらすという…な」

「その槍が…」

「ああ、断罪だ」

裕樹はその言い伝え通りに断罪に選ばれ、勝利をもたらした。

ただし、その勝利が彼の物ではなかったということだけは確かだった。

勿論、二つの大国のどちらかの物でもなかった。

「けれど、断罪があつた国が勝利したわけではない」

「どういうこと？」

「断罪がもたらす勝利は世界のための勝利だ。」

断罪は肅清が役目なんだよ…

これは世界に害するモノを肅清する神剣だ…」

「世界を…」

それを聞いた斑鳩は息を呑んだ。

彼が言っていることは断罪でただの人を切つたと言うことだった。

「それだけなら良かったんだが、断罪は切られた人の罪を持ち主が背負うことになる」

「それが前に言っていた暴走なの？」

「普段はならないが一度に多い人間を切るか、とてつもない罪を持つた奴を切るとそうなる」

この世界に来る前に切つた彼女くらいに抱えた物が、カティマのよ
うに長い時間で積み重なつた物になると裕樹はそう言った。

そのときに彼に記憶は渡したが全てではなかった。

その前の出来事によって、あの娘だけの記憶がほとんどなくなつて
いた。

名前は思い出せたが裕樹は彼女との関係を思い出すことが出来ない。
それが仮面の男が言っていた思い出せということに他ならないこと
は裕樹も分かっていた。

だからこそ裕樹は彼の言葉を自分だけで思い出そうとしていた。

「俺の無差別な人々の殺戮は神剣所持国は見過ごせなかった。」

そこで国は俺に交換条件を出した」

「条件？」

暴走は裕樹の意志ではない。

それを抑えるほどの条件とはなんだったのか？

斑鳩はそれほどの条件はなんなんのか分からなかった。

しかし、裕樹が言った条件は至ってシンプルな物だった。

「俺の命の延命だ……」

「え……？」

斑鳩はそれ？って思ってしまった。

あの暴走を抑えるほどの条件なのに至って簡単でシンプルだったからだ。

「俺は本来、長生きを出来る体じゃなかったんだよ」

「どういうこと？」

長生き出来ないとは一体なんだろうかと斑鳩は先を即す。

「俺は極めて特殊な生まれつきの病気を持っていたんだ」

「…それは？」

「テロメアって知ってるか？」

「ええ、細胞の中にあるものでしょ？」

「ああ、遺伝子染色体の先にあるものだ。」

その長さによってその細胞の分裂する回数は決まっている」

「それがどうしたの？」

「俺はそれが生まれつき短いんだよ。」

だから俺は長く生きれない。

生まれて20年が限界だと知っていたんだ」

「知っていた？」

裕樹は分かったんじゃないかって知っていたといった。

斑鳩はそこが気になった。

知っていたということは何故知りえたのか…

それが気になってしまった。

「ああ、テロメア短縮の奴に多いことなんだが大抵は天才と呼ばれることが多いんだ。

短い命を燃やして輝くんだよ…」

斑鳩の目には彼は俯いてしまつて表情は分からないが後悔しているように感じた。

けれど、それは長く生きてしまつていることに対してなのか、その条件で多くの無関係の人間を殺めたことに対することなのか分からなかった。

「それでそんな細胞の病気の延命方法って何なの？」

「細胞に問題があるんだから細胞を全て入れ替えるんだよ」

「そんなことどうやってよ？」

「元の世界でも出来なくはない技術だぞ？」

倫理的や人徳的にそんなことが出来るかどうかという問題はあるがな」

斑鳩は分からなかった。

そんな病気の治療法が…

問題が細胞にある時点で脳にも細胞がある。

故にそれを入れ替えることは無理だと思っていたからだ。

しかし、それが出来るという…

「一体どんな方法なの？」

「そうだな順序を立てて説明しよう」

「お願いするわ」

裕樹は一枚の紙を出し、そこに簡単に六つの人を書き、二つずつ枠で囲った。

「まず、第一に細胞を入れ替えるのは簡単だ」

「そうなの？」

「ああ。」

だが、問題なのが継続性だ」

「継続性？」

「説明するから安心してくれ。」

まず、俺という人間を元にクローンを作る。

仮に元をA、クローンをBと呼称しよう」

三つの枠組みの中のそれぞれの人にAとBを書き込んだ。

「クローンで生み出したBにAの知識や記憶を全て写した。

さて、元の人間はどっちだ？」

「そんなのAに決まってるでしょう」

「正解だ。」

そう、このままではAの知識や記憶を持ったBという人間が生まれるだけだ。

これでは何も解決していない」

一つの枠組みの二つの人にペけを書く。

裕樹は二つ目と三つ目の枠組みの人に頭の部分に小さい円を書いた。

「では、さっきと同じくAとBがいる。

このままではさっきと一緒だ。

だから今回は頭の中の脳をそれぞれ入れ替える」

裕樹は先ほど書き込んだ小さい円に体と逆にBとAを書き込んだ。

「さて、元の人間はどっちだ？」

「これはどちらにさっき言った継続性があるのかって話ね？」

「その通りだ」

「そうね… だつたら」

斑鳩は少し悩んでから答えた。

「脳に継続性があるのなら、さっきと逆ね」

「その通りだ。」

Aの体にBの意識が、Bの体にAの意識があることになる。

基本的に脳に継続性があると考えられている。

それは人の知識や記憶が脳に保存されるからだと言われている」

裕樹はさらに真偽は定かではないが… と付け加えた。

「でもこれじゃ何も解決してないわよ？」

「その通りだ。」

これでは体から問題のある細胞がなくなっただけで、脳にはまだ問題が残っている」

さらに裕樹は二つ目の枠組みにもペけを書いた。

「それでは脳からどうやって継続性を残しながらも細胞を入れ替えるかだ」

「でも本当にそんなことが出来るの？」

「一応出来る。」

ここでさっき言った倫理的や人徳的に出来るかという話だ。

体の細胞自体は日々入れ替わってる」

「そうなの？」

「簡単に言つとさらに新しい細胞が出来続けるからなるほどね」

斑鳩は納得し頷く。

「そこでだ、脳を少しずつ入れ替えたらどうなる？」

何回も…何回もして手術して脳のほんの一欠けらずに入れ替えたらどうなる？」

「え…？」

「そのありえない数の手術をして脳を全て少しずつ入れ替えたらどうなる？」

さつきと同じように結果的には同じだ。

Aの体にBの脳、Bの体にAの脳だ。

さて、どっちがどっちだ？」

「それは…」

斑鳩は答えられなかった。

確かに結果だけ見るならさつきの説明を同じだ。

だけど継続性はどちらになるかは分からなかった。

「正解はどちらでもないだ。

だが、今はどちらも意識も入れ替わったことにしよう。
要するに一応これで成功したことになる」

「確かにそうかもしれないけど…」

斑鳩は説明されても何か腑に落ちなかった。

確かに裕樹が言ったように倫理的や人徳的な話もあるだろう。
しかし、それを抜いてもどこか腑に落ちなかった。

「けれど、そこにも問題はあった」

「え？」

「脳を切るんだ。」

むしろ何も無いほうがおかしい。

切った後にちゃんとその欠片が繋がるのか、意識や記憶に問題はないのか。

様々な問題がある」

それはむしろ当たり前といったほうがいいだろう。

未だに脳の全てが解明されてないのだ。

そこを下手に弄って問題が出ないわけがない。

「それにそれが原因で俺が俺でいられなくなった」

「どういうこと？」

「言っただろう。」

如何にクローンだろうとも魂がないと思っていたのか？

クローンといえども一人の人間だ。

それと別の脳を少しずつとはいえ、一緒にしたんだ。

そこで意識が交わり、俺は俺でなくなり、相手も相手でなくなり、別になったと……」

「確かに言っただわね……」

正確にどちらでもないって……」

「もう俺は元の俺がどんな性格でどんな意志でその戦いに行っていたのかも分からないんだ……」

自分なのに自分じゃなくなっただんだよ……」

裕樹は本当に泣きそうになっていた。

声も震えて、語尾も弱くなっていた。

「全ての手術が終わるまで俺は眠らさせられていたし、起きたときにはこの人格だったんだ…」

記憶も曖昧になり、一緒に戦っていた仲間にどんな顔すればいいのかも分からなかったし…

何がしたかったのかも分からなくなった…」

裕樹の独白は止まらなかった。

先ほどから斑鳩が息を呑んだまま固まっている。

それにも気づかないまま彼はさらに続けた。

「俺がいたせいで…」

最初は俺の活躍で喜んでいた親も物心つくには怖がり、俺は捨てられた…！

その後の孤児院でも大人には怖がられ、子供にも蔑まれ…！

召還された後も戦争の道具に使われて、怖がれて…！

果てには俺の意志m…！」

「止めて…！」

何処までも懺悔のような嘆きを、後悔を呟き続ける裕樹を斑鳩は抱きしめた。

裕樹は彼女の行動に驚き、その呪詛の様な嘆きは止まった。

「もう…止めて…」

もう、大丈夫だから…」

斑鳩は泣いていた。

嘆き続けていた裕樹ではなく、彼女が涙を流していた。

「い…かる…が…？」

「大丈夫だから…」

貴方は独りじゃないから…
独りで抱え込まないで…」

斑鳩の突然の行動に驚いた裕樹は彼女の顔を見上げた。
そこには涙を流しながら微笑んでいる彼女の顔があった。

「なあ…」

俺はもう自由なんだよな…」

「そうよ…」

「もう、あんな戦争しなくていいんだよな…?」

「そうよ…」

「仲間に頼ってもいいんだよな?」

「そうよ」

「お前達は俺の力を怖がらないよな?」

「勿論よ」

「なら良かった…」

裕樹の目から大量の涙が溢れた。

裕樹は決して嗚咽を上げはしなかったが、斑鳩の胸で泣いた。

これまで抱えていた罪や嘆きを涙で流すかのごとく…

裕樹が泣き続けている間、斑鳩は裕樹を優しく抱いていた。

彼が一緒にいた相手は誰なのかも分かったし、それにその相手は彼
にとって罪の象徴みたいなものだから…

裕樹は涙が枯れるまで泣いた。

裕樹は泣き終わった後、少し恥ずかしそうに頬を染めて顔を背けて
いた。

「それで仮面の男のことだが…」

「貴方の本来の体を持つクローンでしょ」

「まあ、正確には違うが当たりだ」

「それで少し気になることがあるんだけどいいかしら？」
「な、なんだ？」

先ほどと斑鳩の様子が違うことに裕樹は戸惑いながらも聞き返した。

「彼が言ってた『彼女』って誰？」

斑鳩の顔は笑顔だが普段にはない迫力があつた。

「そ、それはその……」

「へえ、言えないんだ」

すぐに答えられない裕樹の態度に斑鳩の顔から笑顔が消え、無表情になる。

「お、覚えてないんだよ！

ホラッ！

アイツも思い出せって言ってたしな……！」

「そう言えばそうねえ……」

でもそれって貴方にとって大事なことってことよねえ？」

斑鳩はもう一度、笑顔になるが迫力は先ほどよりも増している。

「お、俺が覚えてるのはマリーって呼んでいたことと俺が殺したことってことだけだ！」

「殺したっ！？」

自分が思っていたこととは遙にかけ離れたことに斑鳩は驚いた。

「あ、ああ。」

それにマリーとは呼んでいたが本当の名前は違ったはずだ…」
「ふうん…」

斑鳩がジト目で裕樹を見ている。

「そ、それにさっき話したことも最初は覚えてなかったんだからな
！」

「それについては分かってるわよ」

斑鳩はため息をついて、肩を落とした。

「まあいいわ。

これから貴方の力を貸してね」

「あ、ああ」

斑鳩は先ほどと打って変わって満面の笑顔でウィンクしながら言った。

裕樹はさっきと態度が全く違っていることに驚いた。

「じゃあ、私はもう戻るわね」

「ああ」

斑鳩は立ち上がり、ドアに手をかけて振り向いた。

「そうそう、私のことはこれからは沙月って呼んでね。
それじゃあ、お休み」

そう言ってそのまま斑鳩は鼻歌を歌いながらドアを閉めた。

「あの変わり様は一体なんなんだ？」

裕樹は斑鳩の変わり様に呆然とするだけだった。

「それにしてもローガスめ…」

俺に救わずどころか俺らまで救うつもりで依頼してきやがったな…」

裕樹は頭をかきながら、そう呟いた。

「俺らもあの時の戦いにけじめをつけないとな…
何時まで黙ってるつもりだ、お前は？」

裕樹は手の上にある神剣である銃に語りかける。
その声に反応するかのように神剣は輝いた。

しかし、それも一瞬のこと。
次の瞬間には光は収まっていた。

「相変わらずだんまりか…」

契約のとき以外で会話すらしたことないのにな…
神獣はアイツと一緒にだしな…

エターナルなのに情けねえことこの上ねえな…」

相変わらず答えてくれない神剣にため息をつきながらも裕樹は先ほどまでこの場にいた少女のことを想う。

「斑鳩…沙月…か。」

何を考えているんだかな…」

考えても答えは出ない。

しばらくして彼は思考を放棄した。

考えても詮無きこと…

たとえ生まれつき天才でも人の心までは分かりはしないのだから…

「彼も色々抱えてたのね…」

それでも彼が頼ってくれたのは嬉しかったな…」

少女は廊下を歩きながらも考える。

「でも、私もちょっと大胆なことしたわね…」

先ほど自分がしたことを思い出し、彼女の顔は真っ赤に染まった。

「でも、これから忙しくなりそうね。」

…でも、やっぱり私は彼のことが気になってるのね」

少女は先ほどよりも少し早足で自分の部屋に戻っていった。

その足取りはどこか楽しそうな嬉しそうな感じだった…

第二十三話（後書き）

絡むヒロインは一応沙月で決定なんです
が望とくっ付けるヒロインは誰にしようかな？
今のところ候補は希美かナルカナなんです
よね

第二十四話

閉じられた空間に佇む一人。

数十ものカプセルに埋め尽くされた部屋。

そのカプセルから延びた床を埋め尽くすほどのコード全てが一つの機械に繋がっている。

その中央にあるカプセルの前に一人の男が立っていた。

その中央のカプセルだけが部屋に光を与えていた。

「まだ思い出してくれんなあ…」

カプセルに手を触れ、愛しそうに撫でる。

「そこまで忘れたかったんやろうなあ…」

あの世界は本当にダメすぎたわ。

一度は救ったけど、今度は君やもんなあ」

男は諦めたかの様に頂垂れて、近くにある機械に寄って行った。

男がその機械を弄ると暗闇に満ちていた部屋が光に溢れた。

光が収まると回りにあるカプセルがいくつか開いていた。

その中から現れた人々は女性で全て同じ顔だった…

「自力で無理なら手伝ってやらんなあ…」

さあ、行こうかいな『たまゆら魂響』」

その名を発すると一瞬だけ男の体が淡く光った。

「ワイが俺が僕が私がアタシがわしが…」

奪われた…

ただ自由が得たかった…

ただ生きたかった…

それをそれをそれをそれをそれをそれを…」

男の声色が様々に変わり、それがいくつも混ざり合う。

少年少女の声にもなれば、年老いた老人の声にもなり、最後はそれらが全て混ざって一つになった。

男の体の淡い光は次第に黒く変わり蠢いている。

「彼に救われた借りを返すために…」

それじゃ、行ってくるで…マリオネット操り人形」

男は一度だけ振り返り、カプセル内の少女に向けて微笑んだ。

呼ばれたことに反応したのか中央にあったカプセルの中にゴポツと気泡が出た。

男のその目には狂気が宿っていた。

次の日、彼らは青年団をつれて森の中に入っていた。

その途中何度かミニオンに襲われながらも無事に精霊達の元に着くことが出来た。

精霊達がいる場所のミステリーサークルが見えた瞬間、裕樹を目掛けて一人が跳びかかってきた。

裕樹はその足を掴み、前へと放り投げる。

「毎度のごとくいきなりだな、ルプトナ」

「うっさいな！」

「僕はお前がむかつくだよ！」

「何のために話し合いをしようとしているのか分かっているのか！？」

「あうっ、分かってるよー」

裕樹に頭を殴られて頭を抑えながら涙目になっているルプトナ。

一連の出来事に驚いたのか、他のメンバーは啞然としている。

その瞬間、ミステリーサークルの中央から光が溢れた。

その光が収まると、そこには一体の精霊が立っていた。

身体に対してやけに大きい頭と、その顔の真ん中に位置する大きな一つ目の、緑の肌の小柄な精霊。

「ルプトナ、一体何をしておるんじゃ？」

「うっ、だって」

叱る精霊にごねるルプトナ…

その光景は正しく親子だった。

「精霊の娘か…」

「言いて妙だな、ククク」

裕樹が目の前の光景に苦笑していると神剣士たちを押し通りながら

ロドウィゴが現れた精霊の前に歩いていった。

「よう来られた、人間よ」

「貴方が精霊の長ですか？」

「いかにも。」

「ワシが精霊を統べる者、長老ンギじゃ」

「では単刀直入に問う。」

「かつて我々の開拓団 - 私の兄を殺したのは、貴方達か!？」

本来恨みがあるはずの精霊に対して『貴方』と呼んでいるのはここに来るまでに襲ってきたのは精霊ではなくミニオンだったからだろう。

それに加えて、沙月やタリアに精霊達に殺されることがまずありえないと言われていたからだ。

それでも聞くのは納得が出来てないからだろう。

「なぜ我々が、お前達人間を殺す必要がある？」

我々はここで静かに暮らしていきたいだけじゃ。

わざわざ人間達を殺して、ワシらになんの利益がある?。」

そう言われてロドウィゴは黙ってしまった。

ロドウィゴが黙ってしまうとほんの少しだけだがンギは世刻のことを一瞥した。

「だったら...！」

「誰が私の兄を殺したと言っただね!？」

「ミニオン」

裕樹の言葉にロドウィゴとンギは彼を見て、神剣士たちは頷いた。頭が理解はしていても心が受け入れない。

ロドウィゴの中の行き場の無い想いが彼を叫ばした。
それでも裕樹は淡々と事実を突きつける。

「何のために危険を冒してまでただの人間をここにつれてきたと思う？」

「なんだね？」

「精霊と人間の間の誤解を解くため。」

精霊は基本的に争いを好まない。

故に誤解しているのは人間のほうだ」

「そうね、ルプトナがしていたのはミニオンに人が襲われない様이었다わね。」

「コレだけでも精霊に悪意がないのが分かるわ」

「後、一つだけ気になることがある」

「気になること？」

「ミニオンの本当の目的だ」

「本当の目的とはなんだね？」

ロドウィゴが聞き返す。

裕樹はミニオンの行動で気になっていることがあった。

「一定以上から森に入ると攻撃してくるのは何故か？」

「コレだけでも人を殺すのが目的ではないことが分かる」

「確かに殺すためなら町に入ってきてもおかしくないわね」

「恐らくミニオンの目的は何かを見つけさせないため」

「何かって何だよ？」

「それに関しては精霊に聞くのが早いんじゃないか？」

精霊がいる割にはここにはあまりにもマナが少ない」

その言葉に全員がンギの方を見る。

ンギは目を閉じてしばらくしてから目を開いた。

「ミニオンの生産工場じゃ…」
「「「生産工場!?!?!」」」

ンギの話では光をもたらす者に言葉巧みに騙されて、一番大きい精霊回廊を奪われたとのこと。
その回廊からマナを吸い上げて、ミニオンを作る工場が出来たという。

それを破壊することは決まったのだが、そこで別の問題が浮上した。

「ロドウィゴ・青年団たちにも来てもらおう」
「「「裕樹!?!?!」」」

裕樹のその言葉に全員が彼の方を向いた。

「おいおい、何言ってるんだ。
足手まといになるに決まってるんだろ!」
「そうよ、それに危険すぎるわ」

ソルとタリアが反対の意見を上げながら詰め寄る。
青年団のメンバーも少し顔が青ざめている。
ミニオンに襲われることを考えているのだろう。

「二人とも待つて。
先に裕樹から理由を聞きましょう」
「分かったわ」
「そうだな」

沙月の言葉に二人は落ち着いた。

「人を連れて行くのには理由がある。

先ず、精霊が如何に争いを好まないといってもマナがないと死ぬ。そんな状態で何故回廊を取り戻そうとしないのか？

そこが気になった。

答えは一つ、精霊には手出しが出来ない何かがあるということだ」

裕樹は精霊が死活問題であるマナを奪われても何もしてないことが気になった。

それをンギに問う。

如何に争いを好まないといっても死ぬことを許容できるほど聖人君子のような集団ではない。

ならば精霊が手を出せない、または近寄れない物があると考えた。

「その通りじゃ。

ワシ達だつて取り返そうとは考えた。

しかしじゃ、ある障壁に阻まれて近寄れないのじゃよ」

「障壁？」

ンギが言うにはマナの嵐が工場の周りを包み込んでいるらしい。その嵐に入るとマナで出来ている体は一瞬で分解されるという。その現象はマナで出来ている神剣士や精霊に反応するため青年団を嵐を起こしている装置に向かわせるということに決まった。

「私たちも出来ることをしなければ。

勝手に精霊を敵視していたのだ。

彼女に救われた分の借りを返さなければいけない」

「「「おおー」」」

ロドウィゴはルプトナを一瞥し、彼の言葉に青年団のメンバーは声を上げた。

ルプトナは照れたように頭の後ろを掻いた。
それぞれの目的の為に行動しようとする一団。
その中で一人、別の場所を見ている者がいた。
裕樹は町がある大きな木を見詰めていた。
その木の頂を見詰めていた。
見詰めている先には一人の男が立っていた。
裕樹と同じ顔をした神威と呼ばれた男。
すでに仮面をしてはいないが、まるで仮面の様に無表情だった。
彼らは本来聞こえるほどの距離ではないのに会話をしていた。

「結局、どっちを残すんや？」

「もう少し、見てみようと思う」

「時間はないで？」

「分かっている。」

彼女の元に着いた時に結論を出す」

「そのためにも分かっているやんな？」

「ああ、アレはお前に任せるよ」

「わかったで」

彼らはそれだけで会話を止めて、裕樹は先に歩き出した皆に追いつくために少し駆け足で向かった。
神威はその背中を見詰めて呟いた。

「さすがにワイはそろそろ限界やわ。」

だから最後に一つだけ我俣やらせてもらうで…

今までワイが幸せと感じていた日々を再び取り戻すために…

おいで、マリー」

彼の最後の言葉に反応するかのように虚空から何人もの同じ顔の少女が現れた。

「アイツに思い出してもらいたいやる？」

その言葉に返事はなく、ただ現れた少女達は人形のように立っているだけだった。

それに対して何も思わなかったのか、神威は特に表情を変えなかった。

「ワイの合図があるまでは隠れといてな？」

その言葉に少女達は再び虚空へと消え去った。

「さて、行こうかいな…魂響」

そう呼ぶと神威の背中に剣を象った紋章が現われた。

その紋章はまるで片羽のようになり、神威は工場の方に飛び去った。

第二十五話

工場に着くまでに何度かミニオンに襲撃されたが無事にマナ嵐の目の前にまで来ることが出来た。

ここからは青年団が中に入り、発生装置を破壊することになっている。

青年団はその装置に向かったがそれを見送った神剣士たちの背後に新たなミニオンたちが現われた。

「次から次へと鬱陶しいな！」

「文句を言う前に戦いなさいよ！」

それぞれが神剣を構え、ミニオンに身構える。

「遅い」

全員がミニオンに備える前に裕樹が一人で飛び出した。

「ちよつと！？」

「待てよ！？」

固まって現われたミニオンに対して、走りながら連射する。

それぞれが横や上に飛んでかわした。

一人だけ別方向に逃げたミニオンに合わせて同じ方向に跳び、眼前で弾をぶつ放した。

打たれたミニオンはそのまま金色の霧となり、霧散した。

そこで別方向に避けたミニオンが裕樹に目を向けたが他の神剣士たちによって攻撃される。

全員がそこに襲い掛かっただけで現われた半分が霧となり霧散した。

そのまま、残ったミニオンもヤツイータの魔法やソルやルプトナの速さに惑わされて、碌に反撃することも出来ずに消えた。全てのミニオンが見え去ったと同時にマナ嵐も消え去った。

「ようやく現われたか」

その言葉のしたほうに全員が振り向くと一人の男が立っていた。その格好は無骨な黒い兜をかぶり、鎧を着ている。世刻や永峰が感じた印象は鎧武者という感じだった。

「貴方がここを管理しているのね。」

ベルバルザード……」

「その通りだ。」

初めて見る顔もあることだ、名乗っておこうか。

我は雷火のエヴォリアが従僕、重圧のベルバルザードだ」

「へ、わざわざそっちから来てくれるなんてありがたいぜ」

「なに、そちらの御仁に興味があったのでな」

ベルバルザードは手を翳すと、ヴォン、と手のひらから黒い霊光が広がり、一振りの長刀を具現した。

それを真上で振り回して、裕樹の方を向いて振り下ろし構えた。

「俺を？」

「なんでだ？」

「貴様が一番研鑽を積んでいるからだ。」

武人として、強者と戦いたくなるのが性というものだろう」

その言葉に裕樹もベルバルザードを睨み返す。

裕樹の右手に白い光が集まり、銃を具現した。

両者はそのまま口を開かず、睨み合う。

両者が睨み合っている中、横から一人の少女が飛び出した。

「お前が…」

お前が、長老たちを――！」

ルプトナは全力でベルバルガードに襲い掛かった。

問答無用の全力攻撃。

一瞬でベルバルガードに肉薄したルプトナは、最大の攻撃を放つ。

直後、ベルバルガードの腹部に三度の衝撃が襲う。

一息で三発の蹴りを放つルプトナの技だ。

さらに続けざまに攻撃しようとしたがルプトナは無理やり後ろに跳んだ。

ルプトナは嫌な悪寒でもしたのか顔を少し青ざめている。

「ふっ……」

その姿を見てベルバルガードは小さく笑った。

ベルバルガードはまるでダメージなど受けていないかの様にその場に微動だにしなかった。

「碌なオリハルコンネームを持っていないくせに『精霊の娘』などと粹がるな、小娘」

「な、なによ!？」

「速さもそれなり、勘も鋭い。

だが、それだけだ。

貴様はまだ……」

そこでベルバルガードはもう一度長刀を振り回し、ルプトナの方に構え直す。

「前世を背負っていない」

「前世…」

その言葉に反応した世刻が胸の辺りの服を強く握った。

「雑魚は引っ込んでいろ」

ベルバルザードはさらに長刀を振るうとマナの衝撃波を生み出した。それはルプトナの方に向かい、地面を抉りながら彼女に近寄っていく。

「こんなもの！」

ルプトナは対抗するように蹴りで同じように衝撃波を出したがベルバルザードの出した物に当たると一瞬で吹き飛んだ。

「きゃああー！」

ルプトナは当たる寸前に後ろに飛んだが余波だけでダメージを与えるには十分の威力だった。

余波を受けたルプトナは木々や石の欠片などと一緒に後ろに飛ばれた。

さらにその衝撃波の後もう一枚の衝撃波が向かってきていた。

先ほど受けたダメージで足をやられたのかルプトナはその場から動けなかった。

「危ない！」

動けないことに気づいた沙月はルプトナを助けようとしたが、近寄ったときには衝撃波はもう寸前まで迫っていた。

このままでは両者ともそれに吹き飛ばされてしまっただろう。けれど、その衝撃波は無情にもルプトナと沙月を目掛けて迫ってくる。

ルプトナは迫り来る衝撃波を見詰めることしか出来なかった。沙月は来るべき衝撃に備えるべく、ルプトナをしっかりと抱きしめた。

そして、攻撃したベルバルガードを射抜くように睨んだ。けれど、両者のその光景は遮られてしまった。

ただ、今の目の前には黒いコートを風で靡かせている背中だった。

「お前は俺に用があるんだろ」

「お前…なんで？」

「裕樹…」

ルプトナと沙月は呆然と裕樹の背中を見ていた。裕樹は左手を前に出して、マナの障壁を出した。迫り来る衝撃波はその障壁に当たると消滅した。

その後も障壁は存在していたが、裕樹が手を下ろすと消え去った。

「降り掛かる火の粉は払っておかなければな」

「手前で挑発しといて何ほざいてやがる」

ベルバルガードは口元を笑みに変えて言った。

その言葉に対してさらに強く睨む。

「ふ、ふはは、ふははははははは」

ベルバルガードは目の前にいる強者を見据えて笑い出した。

ベルバルガードが自分で言ったように彼はいつも強者との戦いを欲していた。

ただ、強いものと戦い、そのために研鑽を積み重ねて来た。それだけが自分の楽しみであり、生きていると実感できるかのよう…

それゆえにベルバルザードは実感した。

目の前にいる者が…

その強き意志を携えた目が語っていると…

今まで見てきた、相手してきた誰よりも強いということ。

「どこぞの破壊神の転生体とやらよりも楽しめそうだ」

「なんだと!？」

世刻に目を向けたベルバルザードは馬鹿にしたように言い、世刻が反応する。

その反応に対して、ベルバルザードはどうでもいいかのように無視して、裕樹に視線を戻す。

「我と一勝負してもらおう」

「どの道、その選択しかできないのに何を言っている…」

「それは一体どういうことですか？」

「ふっ。」

気づいていたか。

どういうことか…か。

それは…」

裕樹の言葉に疑問を持ったカティマに答える様に、ベルバルザードは右手を勢い良く掲げた。

「…うっ…うっ…」

その言葉を言った瞬間に裕樹以外の神剣士の周りに先ほどとは比べ

物にならないほどのミニオンが一斉に現われた。

裕樹とそのすぐ背後にいたルプトナと沙月以外は完璧にミニオンに囲まれてしまった。

全員が一斉に神剣を構えた。

「さて、これで我が頼みは聞いてくれるか？」

「頼み…？」

コレは頼みじゃなくて脅迫って言っただよ」

裕樹が強くベルバルザードを睨むも、相手はそれを満足そうに小さく笑っただけだった。

「ここでは如何せん狭いからな。

もっと広い場所で殺り合おうぞ」

「ふんっ」

そう言っで。ベルバルザードは後ろに跳んでいった。

その後に裕樹も続いていった。

第二十五話（後書き）

ベルバがすっごい書き易くて書いてて楽しいです。
格好いい人は書いて楽しいです。

第二十六話

「斑鳩、こいつを頼む」

裕樹はルプトナに近づき、しゃがんで頭に手を乗せた。

その途端、その手が光った。

光は一瞬で収まり、裕樹は立ち上がった。

「この場は任せるぞ」

そのまま、裕樹はベルバルザードが去っていった方に跳んでいった。

「ちよつと!?!」

「おい!?!」

「裕樹さん!?!」

裕樹がベルバルザードの後を追って行ったことで全員がミニオンに警戒しながらも驚いた。

その間にもミニオンはじりじりと迫って来ている。

「沙月!

彼を追って!」

「ベルバ相手に一人は危険よ。」

ここにいたらその子も危ないから連れて行って」

「連れて行ったほうが危なくないですか?」

「あんなに楽しそうなベルバが自分から興が削がれることはしないわよ」

ヤツィータの言葉に反論する世刻だが、その言葉に黙った。

「ここは任せて、向かって下さい」

そう言つて、カティマはミニオンに肉薄し、一気に切り掛かった。それが合図となり、全員が動き出した。

それぞれが動き出し、このままでは足手まといにしかないルプトナを抱えて沙月は走り出した。

「ちょ、ちよつと!？」

「下ろしてよ!」

「足を怪我してるのに何言ってるのよ」

運ばれるのに抵抗があるのか、暴れるルプトナ。しかし、足が痛むのかすぐに大人しくなった。

「それにしても…」

「どうしたの?」

裕樹を追いかけて木々の間を走り抜ける。

その間に沙月はある考えで顔を陰しくしていた。

少し苛立っている沙月に気づいたルプトナが不思議そうな顔をして尋ねた。

「別に何でもないわよ」

「でも、なんだか寂しそうな顔してるよ?」

「っ!？」

ルプトナのその言葉に沙月は顔を強張らせた。

「そうね…」

裕樹は良く一人で行動することが多いのよ。

特にこの世界に来てから…

正確には記憶が戻ってから…」

元から裕樹は大抵、人の輪ではなく、その輪を外から眺めていることの方が多かった。

自分の部屋に籠っているか、屋上で遠くを眺めていることのほうが多かった。

旅団のメンバーだけでなく、世刻や永峰、一般生徒たちと楽しそうに会話していることをほとんど誰も見たことがなかった。

それに誰かが会話を振ってもすぐに終わることが多かった。

それは答えないや無視しているのではなく、ただ質問に答えるだけでそこから会話を繋げるということが出来ない。

裕樹が自ら話す事と言えば、何かの説明などしかない。

他人に興味がないのか、その振りをしているのか…

それは人と関わりを持つのが怖いのか、拒絶されることが怖いのか…
沙月はそのどれでもあるし、どれでもないと思った。

彼の過去を聞いたことで解った。

彼はただ、人との関わり方が解らないのだろうと解った。

心の成長に必要なのは経験。

経験だけならば、あの世界で嫌なことを経験しただろう。

だが、人との関わりはほとんどなかったと思える。

彼は持ち前の頭の良さで経験の少なさをカバーしていて、他人が何をして欲しくて何がしたいのかは解るが、それは自分と関わっていない時のみだ。

自分にどうして欲しいのかなど損得関係だけならば行動できるのに…
何気ない只の日常会話に対してどうすれば良いのか彼は知らない。

それは勿論、時間をかければ解るのだろうが、人と関わらない様に
するせいでその必要な時間は多くなるし、人も離れていくだろう。

裕樹はただ、人との関わり方が解らないだけ。

頭の良さもあつて、大抵一人で出来てしまうようになった。

それが人と関わるこの内容が極端になってしまった。

生まれてからは拒絶されるか利用しようと考えて近寄ってくる者しかおらず。

召還された後も化け物と拒絶されるか道具としか見ていない者。

それでも、戦争時には仲間もいたがそれはあの手術でどうすればいいのかも解らなくなった。

手術のせいで自分の心が信じられずに独りでいることが多くなり。

記憶を元に行動しようと考えても断片としかはつきりせず、時間軸もおかしくなっていた。

記憶の矛盾のせいで関われず、仲間も去っていった。

その後も裕樹は戦い続け、人を殺し続けた。

只、その間だけが自分と関わっていた人との関係を気にする余裕がなかったから…

その間だけがその苦悩と向かい合う時間もゆとりもなかったから…

それと約束を果たすために。

自分の手術の間に消えていた仲間だった人もいた…

他に自分と関わっていた人がいなくなるらないようにと…

それが彼の唯一の贖罪だったかも知れない。

ひたすらに断罪を振るい、悪魔や化け物と呼ばれながらも歩き続けた。

歩み続け、終わりに辿り着いた頃にはもう、裕樹の周りには誰も残ってはいなかった。

残ったのは同じ自分。

それは自分のしたことの罪の象徴でしかなかった。

これでは心が壊れて神剣に体の所有権を奪われてもおかしくはなかった。

けれど、彼は奪われてはいなかった。

独りになって目の前には自分の罪の象徴…

それを考えて、何がどう彼を支えていたのか沙月は気になった。

けれど、いくら考えても沙月には解らなかった。

せめて裕樹が笑って人と会話できるようにしてあげたい、そう思った。

他人の楽しそうなことを笑って見てるなら一緒に、中で、笑っていい欲しいと…

そこまで思っ一つ気になることが沙月の頭に浮かんだ。
それは…

彼は出会った最初からこうだったか？

彼は最初出会ったときよりも人間らしさが明らかに減っていた。
少なくとも彼から話し掛けてきたこともあった。

けれど今はそれすらない。

戦争の記憶で人間らしさが減ったと思うべきだろう。

彼の根幹にあるモノは肉親と戦争の記憶なのだから…

第二十六話（後書き）

設定更新しました

第二十七話（前書き）

感想は作者の活力というのが身に沁みます

第二十七話

裕樹は先に跳んで行ったベルバルザードの後を追っていた。気配を辿り、ある場所に止まったことを確認して背後に立ち止まった。

そこは工場となっている遺跡の目の前だった。ベルバルザードは遺跡の頂にある結晶を眺めていた。その結晶自体がこの工場の核となっている。

「ここならば十分な広さで、邪魔も入らぬだろう」

ベルバルザードはゆっくりと振り向きながら、厳かに言う。先程と同じ様に手のひらに神剣を具現した。

「……………」

裕樹はベルバルザードを怪訝そうに見ていた。

「どうした？」

さっさと構えるがいい。

そのつもりでお主も追いかけて来たのだろう」

神剣を構えても、裕樹は構えるどころか神剣すら出さないことに不可解になり問う。

「いや、なに…
お前の様な武士がえらい回りくどい方法を取るな…
と、思ってた」

「此方にも此方の事情というものがあるだけだ」

その言葉に裕樹は納得し、半身になって腰を低くして構える。けれど、神剣は出さなかった。

「良いのか？」

得物を出さなくて」

「闘いたいのだろう？」

なら問題ない」

「ふっ、好かるう」

その言葉でベルバルザードの口元に笑みが浮かんだ。

ベルバルザードとしても闘うなら接近戦の方が楽しい。

そして、それが強者ならば言うこと無しだ。

だが、この世界に來た時から見ていて、一番の強者の得物は銃であることが解っていた。

ならば、自分が楽しむ為には是非に全力で闘える様にしたいと考えていた。

けれど、銃は本来遠距離武器だ。

如何に接近戦をしてくれるか考えてはいた。

その為にここまで回りくどいことをして、一人にして、ここまで来させたのだ。

その上さらに、自分の望む最高の形で闘ってくれるという…

さらに、自ら敵の得意距離に、しかも素手で入る者がいるか？

そのことがベルバルザードを歡喜させた。

だが、目の前の男は神剣を構えていない。

けれど、その目から放たれる殺気は今まで感じたことがないほどだ。それだけで、神剣のことなど些事だとベルバルザードは考えた。

神剣で身体能力が上がるだけでないのは裕樹のほうも解っている。けれど、あえて素手で構えているのだ。

ならば自分も全力で相手にするだけだ。

両者が睨み合っている中で三人の闖入者が現れた。最初に出てきたのは二人・沙月とルプトナだった。

「はあはあ…はあつ。」

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ！」

ここまで全力で走ってきたのが分かるほど息を切らしていた。息を整えると二人を…否、裕樹を睨みつけた。

「置いて行かないでよね！」

「は？」

裕樹は睨まれてそう言われる理由が分からず、呆氣に取られた。

追いかけてくるだろうと考えてはいたが置いて行くなと言われるとは思っても無かった。

「そうだそうだ！」

沙月の言葉にルプトナも裕樹を睨む。

ルプトナにまでその様に言われて裕樹はさらに困惑した。

「助けてくれたんだからお礼くらい言わせなさいよ」

「その通りだよ」

沙月の言葉に腕を組んで頷くルプトナ。

そんな二人の言葉に応えるかのように上から言葉が聞こえた。

「そこでそれはワイでも分からんわ！？」

すると二人が飛び出した木の上からガサガサと音を立てながら何か

が落ちてきた。

それは壊れたはずの仮面を着けて落ちてきた。

仮面を着けている以外は何処にでも居るような青年だった。

格好も雰囲気も只の人だった。突如現れた人物に沙月もルプトナ、ベルバルザードも警戒した。

その中で裕樹は呆れた目で現れた人物に言った。

「何やってんだ、神威」

沙月は裕樹が神威と呼んだ瞬間に警戒を少しだけ緩めた。

神威は落ちた時に付いた枝や葉を払い落としながら立ち上がった。

「いやあゝ、何か気になることやってんなゝて、覗いてたんやけど

…」

「けど?」

その場にいる全員が神威を怪訝に見る。

神威は一拍溜めて言い放った。

「あまりの展開に突っ込まずにいられなかったんや!」

その言葉に全員が脱力した。

「じゃあ、なんだ?

お前はツツコミの為に落ちてきたって言うのか」

「勿論や!」

「「「……………」」」

神威の胸を張りながら自信満々で言い放った。

その言葉に裕樹はため息をつき、他の三人は啞然とした。

「闘いの邪魔をする気がないのなら、そこで大人しくしてもらおうか」

「ええよ」

ベルバルザードの言葉に軽い感じで頷いて、近場の丁度いい大きさの石に座った。

その様は只スポーツ観戦に来たかのようにどこまでも軽い。

「ほら、その嬢ちゃん達もこっち来い^きや。

そこにいたら巻き込まれるで。

怪我もしてんやから安静にせないかんで」

その軽い感じからは最初に会ったときに感じた威圧感や言葉遣いが違うことに不審に思いながら沙月はルプトナに肩を貸しながら近づいた。

「ちょっと力借りんで」

「ああ」

神威の言葉に裕樹は頷いた。

神威は自分の座っている石に手を当てると淡く光った。

光が収まると手を握り締め、開くと神威が座っている石と全く同じ石が出てきた。

「ほら、これに座りや」

「え、ええ」

「すごい！

ねえねえ、どうやったの!？」

沙月は神威のしたことに驚きながらも神威の置いた石に座った。
ルプトナは警戒する欠片もなく、神威のしたことに興味を示した。

「今のか？」

今のはアイツの神剣の力をちよつと借りたんや。

石の魂の情報を読んで、マナで同じのを作ったんや」

「魂？」

ルプトナの言葉にさらに解説を続ける。

「そ、魂や。

魂ってのは何にでも宿るんや。

生き物は勿論、人が作った物は当たり前。

石や草に宿るんや」

「へえ」

神威の説明にルプトナは目が輝いていた。

まるで子供が楽しいことを見つけたかのように…

「さつさと始めようか」

「無論」

裕樹は先を薦めるかのように言う。

その言葉で再び二人は気構えた。

両者の放つ殺気で辺りの空気は張り詰めたものとなる。

神威たち三人も先程のような軽い調子ではなく、息を飲んだ。

「アイツの能力がどんなのか、よく見てるとええで」

否、一人だけ先程と全く変わっていない。

「能力？」

「アイツは神剣のおかげで強いんじゃないんや」

「え？」

「まあ、見てたら分かるで」

沙月の疑問にちよっただけ答えた神威は裕樹を注視する。

「チツ」

裕樹は神威の言葉が聞こえていたのか、舌打ちしながらきつく睨んだ。

その視線に気づいた神威はニヤニヤとしていた。

「相変わらずおしゃべりだな」

裕樹はベルバルザードに視線を戻しながら辛辣に言う。

「あんたが無口なだけやっちゅうに」

「うっさい」

先程から軽口を叩いているが殺気は弱くなっていない。むしろある意味強くなっている。

ベルバルザードもそれに負けずにさらに気を高める。

互いに気を高めて、相手と睨み合う。

少しでも気を抜くと気圧され負ける。

両者ともそれが分かっていた。故に両者は動けなかった。

一分か二分程度睨み合った後、片方が動いた。

先に動いたのはベルバルザードだった。

第二十八話（前書き）

今回は場面を変えて伏線だけ…
ということでかなり少ないです

第二十八話

「パスワードを入力して下さい」

辺りに機械的な声が響く。

「これだけはとても分かりやすいですね」

少女は何度もこの場に通い続けていた。

このパスワードに辿り着くまでに幾つものパスワードを入力していた。

ここに来る度にパスワードをテンキーで入力した。

しかし、これまで最後のパスワード以外は一度たりとも同じパスワードはなかった。

「それだけこのワードが大事なんでしょうね」

開いた扉を通りながらこころと少女は笑う。

少女は主のいない部屋に踏み入った。

部屋に入ると少女は部屋のあるカプセルの前に立った。

少女は主のいない時を狙って幾度もこの部屋に来ていた。
毎回来てすることは一つ。

「さて、続きを始めましょう」

そう言って少女は語りかけた。

カプセルの中の少女に延々と……

……

…

それから一時間くらいすると、少女は語るのを止めて、部屋を歩き始めた。

「今回はこのくらいにしておきましょう」

床に張り巡らされている配線を踏まないようにぐるりと一周する。その途中にもう一つ扉があるのに気づいた。

「あら？」

この扉は何でしょう？」

少女は不思議に思い、開けようとする、再び無機質な機械音声が聞こえた。

「大事なモノを入力して下さい」

それは今までと違う、何かを少女は感じた。

「大事な…モノ…ですか」

少女は考えていた。

重要なのはこの問題を作った人が誰なのかということ。

そして、入り口にあるパスワードを設定した人物と別人ということ。

「これは…難しいです。」

作ったのは間違いなく彼でしょうが…

大事なモノとなると分かりせんね」

少女は作ったのが彼だと気づき、幾つかの候補は出たがどれかが分からなかった。

この問題は人の価値観で答えが変わる。

命、家族、立場や金などといった答えが容易く出るだろう。

仮に少女が作ったならばほぼ間違いなく『人間』と設定するだろう。

その真意がどういうモノかは別として。

彼に関してもそれをキーワードにしている可能性はある。

けれど、少女はその選択肢をバツサリと捨てた。

理由は彼らしくないからと…

ならば、彼の大事なモノは何だろうか？

仲間だろうか？

自分？

それともここに入るための最後のパスワードだったカプセルの中の少女の名前？

どれも有り得そうだが、どれも有り得ない。

彼は確かに彼女に固執しているが、パスワードにする筈はない。いくら考えても少女は分からなかった。

「まあ、仕方ないですね。

諦めましょう」

少女は肩を落とし、溜め息をつきながら扉に背を向けた。

しかし、それも一瞬で気落ちしている様子はない。

何故か、少女の顔はどこか嬉しそうに見えた。

少女はそのままころろと笑いながら部屋から出て行った。

「また、会いに来ますね」

それだけ言って、少女は部屋を出た瞬間に消えた。

少女が消えた後、部屋に少しだけ声が響いた。

只一言…

「お…とう…さん…？」

と…

少女が通れなかった扉の先には十数ものカプセルがあった。
それらは全て円形に並んでいた。

どれも中には液体が入っているだけで何も入ってはいない…
二つだけのカプセルを除いて…

その二つには人が入っていた。

片方はそれなりに歳を取った男性。

もう片方にはまだ少し少女とも見える女性。

傍から見ると親子に見えないこともない二人だった。

けれど、二人は実際はそんな関係ではない。

互いに殺しあうことを定められていた二人だった。

何世代に亘って闘い続けた二人…

二人を知るものが見たらこう呼ぶだろう…

『カティマ』と『ダラバ』と…

第二十九話

射程…

それは軽く個々の技能の壁を容易く破る。

故に、古代から今に至るまで戦争には銃という兵器が産まれるまで、槍が主要だった。

片方は薙刀、片方は素手。

両者のリーチの差は明白。

なのに、あえて素手で構える相手にベルバルザードは警戒した。あえて不利な状況で対峙している。

だからこそ、ベルバルザードは動けなかった。

相手の構えに隙は欠片もない。

下手に相手の懐に飛び込めばやられる。

ベルバルザードは読もうとした。

相手の考え、動作を…

けれど、一瞬でそれを止めた。

「ふ…

下手な考え休むに似たり。

相手が強者ならばすることは一つ。

全力で立ち向かうのみ！

永遠神剣『重圧』の遣い手、ベルバルザード…参る…！」

声を高らかに上げて名乗る。

名乗り終わると同時に裕樹目掛けて突きを放つ。

「礼儀には礼儀を、全力には全力を…

永遠神剣の銘を言わない失礼は許してくれ。

我が名は裕樹、全力でお相手する」

裕樹が応えると同時に眼前に刃の先端が迫る。突きは風払いなどに比べると避けにくい。それは軌跡が線ではなく点で来るからだ。流れが分かりにくく、動きが読みづらくなる。その反面、点であるが故に攻撃範囲が狭い。避けられれば自分が隙だらけになる。

だから、突きを放つのは勝負を決める時に他ならない。自分の最大の攻撃をするときはいくつか決まっている。

相手の隙を突いていたり、膠着状態での決着をつけるとき。

ドラバとカティマの時は後者だった。

今回の理由は簡単だ。

それしか通じる気がしないからだ。

ベルバルガードは殺気や構えなどで裕樹が自分を遥かに凌ぐ強者と感じた。

だから、最初から最強の一撃を放った。

バン！

裕樹の眼前に迫った刃は裕樹の右手の甲で横から殴り弾かれた。

裕樹はそのまま勢いで左足でベルバルガードのわき腹を狙う。

ガッ！

しかし、左足はベルバルガードに当たる前に薙刀の柄で止められた。直撃は防いだものの、そのまま威力に押されて数メートル飛ばされた。

「……………」

裕樹は弾くのが数瞬遅れたのか、右頬から血が一筋流れた。それを指で拭い、その指を怪訝そうに見つめた。

「まさか、血を見たこと無いとでも言うつもりはないだろうな。まだまだ行くぞ！」

ベルバルガードは走り、間を詰めて今度は横に薙ぎ払う。

それを裕樹はバックステップで避ける。

そのままベルバルガードは追撃をして、振り上げで攻撃する。

それを横に回るようにかわしながら、回し蹴りを放つ。

今度はまともに入り、先ほど以上に飛ばされる。

「グッ…」

「まだまだあ！」

ベルバルガードは受けた傷を無視してさらに連続で突きを放つ。

それを裕樹は全てを紙一重でかわす。

それも体を動かしてかわすのではなく、掌で刃を受け流している。

「何！？」

ベルバルガードはそれに驚き後ろに跳ぶ。

再び両者は睨み合う事になった。

この攻防だけでもベルバルガードの攻撃を完璧に裕樹が見切っていることが分かる。

余裕を持って大きくかわすのではなく、最小限の動きで紙一重でかわす。

ここで沙月に一つの疑問が浮かんた。

「なんで紙一重で避けてるの？」

初見で紙一重で避けるのは紙一重で避けることを自慢する馬鹿か、相手の攻撃方法を完璧に見抜いたかのどちらかだ。

前者であればさほど強者にならずと死んでいくだろう。

故に裕樹は後者となる。

けれど、真の強者は不測の事態に備えてある程度大きくかわす。スポーツのようにルールが定められているわけではない。

だから、暗器がどこからか出てくるかもしれない。

そうでなくても神剣の力を使ってくるかもしれない。

けれど、裕樹はその考えを気にせず紙一重で避けた。

「教えてくれないかしら？」

クローンさん？」

沙月は笑顔で神威に問うた。

「なんや、知つとんかいな」

そう言われて神威は仮面を外して素顔を晒した。

その顔は裕樹と瓜二つで、違いといえば髪の色と瞳の色くらいだ。

裕樹の白銀に対して漆黒の髪。

燃えるような緋色の目に対して冷たい藍色だった。

そして、裕樹と同じ顔は苦笑していた。

「わわっ！

おんなじ顔だ！」

ルプトナは顔が同じことに驚いて、裕樹と神威を交互に見比べていた。

「これを知ってるってことはある程度は知ってたってことでええみた
いやな」

外した仮面を持って、手持ち無沙汰のように腕を下げて軽くぶらぶ
らさせて、裕樹を悲しい目で見つめた。

「アイツが親に捨てられたってのと病気のことは聞いたん？」

「ええ、一応ね…」

神威が向けた視線に釣られるように沙月も裕樹に視線を向けた。

「不思議に思わなかったか？」

「なんで天才ってだけで捨てられたんか」

「それは…」

それは確かに沙月も感じていた。

天才…ただ頭が良いならば、捨てられるどころかむしろ可愛がられ
るのが普通だろう。

けれど、裕樹は捨てられた。

「アイツはテロメアで得た能力は天才であることでじゃないんや」

「え？」

「天才はただの副産物。」

「アイツが真に優れてんのは脳なんや」

「脳？」

脳…

それは人の中にあって心臓と同じくらい…

いや、代えが利かないという意味では心臓よりも重要な器官だ。

脳にはさまざまな情報が伝えられるが、脳に伝わる情報のほとんどが目から得た情報だ。

物の動きや色、光など色々な物が目から脳に伝わっている。

目からの情報はほぼ遮断されているのにもかかわらず、それだけの情報を伝えている。

ほとんどの情報を遮断しなければ、脳が耐え切れずにイカレしてしまうからだ。

けれど、裕樹の脳はそれに少しだけ耐えることが出来る。

脳というのは本当に不思議なものである。

耳が聞こえない人は目や手など他の触覚器官が敏感であつたり…

腕がない人は足が速いなどということを聞いたことがあるのではないだろうか？

それは脳がない器官に対して他の器官で補うためだと考えられている。

さしずめ、裕樹の場合は代えの利かない命の代わりに脳のリミットが開放されたということだ。

通常の人ならば脳が動いているのは大体30%と言われている。

けれど、味覚や嗅覚などがイカレた人間はたまに異常なほど脳が活性化していることも有る。

「つと、話がそれたわ。」

その得た脳の能力は思考高速」

「思考高速？」

「そ。」

通常は一瞬一瞬で考えられることには限界がある。

けれどアイツはその長さを変えられるんや。

考えられる時間の一秒を五秒、十秒に…とな」

「でも、いくら高速化したところで…」

「体が動かなければ意味がないわな。」

でも、アイツは動く体を持っている。

体のほうはテロメアとなんら関わりはないんやけどな」

そう言つて、神威は「なはは」と笑った。

「じゃあ、その体は一体どうやって？」

「ん〜、まあ、その先は本人に聞いたつてや。

そこはアイツの家に關してるやさかいな」

その後、神威は「アイツは勝手に詮索されるのが嫌いやからな」と言つた。

「あ、魔法に関してはプライドに訴えたからやな」

「プライド？」

先ほどの話には首をかしげて入つてこようとしなかつたルプトナが反応した。

「そ、武人であることに誇りを持っているベルちゃんが使つわけないやん。

そら、神劍を使つてたら分からんけど、アイツは…」

「わざわざベルバの望む形で闘つてゐる。

だから、武人としての技能と誇りで闘つてゐる」

「そういうこと」

沙月の補足に満足そうに頷く神威。

「そういうもんかあ。

うん、それなら少しは分かるよ」

「と言うか、ベルちゃんて何…」

「ん？」

だから、ベルちゃん」

沙月が神威をジト目で見ると、笑顔で神威はベルバルザードを指差した。

「ベルバルザードだからベルちゃん」

「……」

沙月は無骨なベルバルザードを無邪気な顔で楽しそうに『ベルちゃん』と呼ぶ神威に呆れた。

先ほどから目の前では真剣勝負が繰り広げられているのに軽いノリのままの神威。

勝負に気を取られているから聞こえていないが本人が聞いたら顔を歪ませそうである。

これまで何度か現れたが神威は明らかにこれまでと違って、それがあのかのときの戦いのせいであるとは考えたが沙月には真実は分からない。

この言動がフェイクなのかどうか、裕樹と別行動する理由も…

神威が説明してる間も目の前では闘いが繰り広げられている。ベルバルザードが何度も攻撃するが全てかわされる。

裕樹に攻撃を見切られて当てられず、徐々に自分が傷ついていく。けれど、ベルバルザードは神剣の能力を使う気にはならなかった。自分が全力な様に裕樹も全力で相手してくれている。

だから、せめて一太刀でも浴びせなければ気がすまない。

それがベルバルザードの矜持であり、武人として誇りだった。

一太刀どころか最初以外ではかすり傷さえ付かない。

その圧倒的実力差を前にしてもベルバルザードは諦めない。

いや、諦めるどころか口元に笑みが浮かんでいた。

それはベルバルザードがどこまでも武人であるという証拠だった。

久しく出会っていなかった強者。

しかも自分は相手の足元にも及ばないと言うこと。

その事実がベルバルガードを狂喜させた。

今まで出会ったことのない遙かな高みにいる強者が目の前にいる。

裕樹の目が語っていた。

今のお前では敵わない、さらに研鑽を積んで出直せと。

それはベルバルガードにとって屈辱ではあったが、裕樹の真意をはつきりと読み取れた。

読み取った瞬間、ベルバルガードは背後に大きく跳んだ。

「フ…

フハハ、フハハハハ！！

貴様の目に応じて、さらに力を得て出直す。

貴様ほどの強者に巡り合う事が出来たことを感謝する！」

確かにそれは武人であることに対して屈辱ではあった。

しかし、ベルバルガードはここで死ぬことは出来ない。

共に行動する彼女のためにも。

さらにここでもう一つ死ねない理由が出来た。

裕樹に借りを返すと言う理由が…

「今度はここまで無様な真似は見せぬぞ！」

そう言い終わるとベルバルガードは消え去った。

「良かったの？」

次もあなたを…

いえ、あなただけを狙ってくるわよ？」

「別に問題ない」

ベルバルザードが消えて、三人の方にゆっくりと歩いてくる裕樹は沙月の言葉に答える。

「っ!？」

不意に裕樹は立ち止まり、空を見上げた。

「どうしたの？」

「…いや、何でもない」
「痛っ！」

裕樹が近づいてきたことで立ち上がったルプトナが足の痛みで再び座り込んだ。

「大丈夫？」

みんなの所に戻らないと

「そうだな。」

「ここすることはもう何もないからな」

「工場はどうするんだ？」

「もう機能は停止している。」

「動力が無くなっている」

ベルバルザードがいたときには遺跡の頂上にあっただはずの結晶が今は無くなっていた。

「あら？」

「いつの間に…」

「さあな、ベルバルザードが持って行ったんだろう」

「そう考えるのが妥当ね。」

「あれ？」

神威はどこ行つたの？」

神威がいつの間にかいなくなっていることに気づいた沙月は辺りを見渡したが影も形もなかった。

「ま、気にしても無駄だ。

それよりあれをどうするかだな」

「そうね。

また動力があつたら動かれると面倒だわ」

「うん、僕もそう思う。

だから壊しておきたいよ。

それに、長老たちが精霊回廊を奪われたままなんだから」

「分かった。

少し細工してこよう」

そう言つて裕樹は遺跡の中に跳んでいった。

それから数分するとゴゴゴという地鳴りが起こりはじめた。

「わわわ！？」

何、何！？」

ルプトナと沙月が突然のことに慌てているとすぐに裕樹が走って飛び出て来た。

「一体何したの！？」

「止まった機械にマナを逆向きに流した」

「そうしたらどうなるの？」

ルプトナは意味が理解できずに結論を問うた。
その答えは実にシンプルだった。

「爆発する」

二人の顔から血の気が一気に引いた。

「急ぐぞ。」

爆発の規模はそれほどかくはないさ。

ちゃんと調節したからな」

「わわわ」

裕樹は足を痛めているルプトナを背負い、みんながいる場所に向かって走り出した。

「ちょ、ちょっと待ってよ」

裕樹に続いて沙月も駆け出した。

第二十九話（後書き）

ベルバさんが違和感たっぷりで去ったんだけど、そこは明らかに実力差がある相手に犬死するほど馬鹿じゃないと言っことで

第三十話

「それで？」

「手も足も出なくてのこのこ帰って来たというわけ」

「……」

精霊の世界から去ったベルバルガードはエヴォリアに報告していた。辛辣に言うエヴォリアに何も言わずに立っていた。

エヴォリアは苛立っていた。

二度も計画を邪魔されて、しかも今回は駒であるミニオンの工場を潰されてしまった。

今までのように簡単に捨て駒として使えなくなってしまった。

「これで二度目。」

「もう後はないのよ」

「無論、承知している」

淡々と言葉を発するベルバルガードを睨みながら、ギリツと齒軋りをするエヴォリア。

明らかにベルバルガードに不快を表した。

しかし、本人は特に気にした風がない。

それは自分のせいであるし、何が彼女を苛出させているかを知っているからだ。

「助けてやろうか？」

二人しかいなかったこの空間に二人以外の声が響いた。

「誰！？」

エヴォリアとベルバルザードは神剣を構えて辺りを見渡す。
けれど、声の主は見えない。

姿が見えないまま、さらに声が響く。

「お前の望みを言え。

内容次第では手を貸してやる」

どこかで聞いたことのある声が響いた。

二人は確かに聞き覚えのある声だった。が誰の声か分からなかった。

「私たちの願いは一つ。

私たちの邪魔をする奴らを倒せる力よ！」

声の主は分からず。

けれど、後がないのも確か。

故にエヴォリアは言う。

「……………」

しかし、先程から聞こえていた声は大きく失意の籠もった溜め息を
発した。

「言っただろう。

お前の望みだと」

「っ……………」

さっきまでは厳かに発するだけだった声に強い殺気籠もっていた。

「別にお前らが世界を壊そうが否だろうがどうでもいい。

だが、お前からは腐った臭いがする。
人を人と思わぬ屑の臭いがな」

声は忌々しいものを吐き捨てるかのように言い放った。
声色にさらに強い殺気が籠められて二人は足が竦み上がった。

「っ…

さっきのがどうして私の願いではないと？」

恐怖に耐えながらエヴオリアは弱弱しい声を絞り出した。

「お前の目だよ。

お前の目は壊す者ではなく、守る者の目だ。
行動が矛盾するのは珍しくはないがな。

少し違和感を感じてな」

そこに興味が湧いたと声は告げた。

すると、ベルバルザードの体から『ふわっ』と光の玉が飛び出てきた。

その光は二人の周りをぐるぐると回ると二人の目の前で膨らみ始めた。

「っ！？」

光が膨らみ始めると同時に後ろに飛び去り、ベルバルザードはエヴオリアを庇う様に前に立った。

光はやがて人の形になり、光が収まると一人の男が立っていた。

「お主は！？」

ベルバルザードは目の前に現れた人物に驚き、声を上げた。

「さあ、腐った奴はどいつだ？」

そこに現れた人物は二人を見据えてにやりと笑った。

先程までいた人物はすでに消え去り、この空間の人数は二人に戻った。

「どう思う？、ベルバ」

エヴォリアは先程の話を聞いて彼の真意を考えていた。

「彼奴の話したことが信用に値するかと問われれば、無いでしょうが……」

「騙す理由が分からない……か」

二人の間には沈黙が訪れた。

それほどまでに彼の話を信じられないような夢物語であるからだ。その計画が彼の思い描くように行くなれば、彼女の戦う理由が一気に無くなってしまう。

それどころか、今まで苦汁を飲まされ続けてきた奴らに一泡吹かせてやれるのだ。

「でも、結局のところは私たちの意志であり、力というのね」

「無論、そちらのほうが良いでしょうな」

「そうね、自分のことは自分でしないとイケないわね」

彼の語ったことは簡単に言っなら、このままでいたいか？というのとだった。

彼は言った。

自分はあくまでも手伝い、動くのは彼女ら自身だと。

「乗るわよ、あの計画」

「御意」

その返事を最後にベルバルガードは空間から姿を消した。それを見届けたエヴォリアは先程いた彼のことを考えた。

「グレートレベリオン…」

『反逆』…ね」

エヴォリアは彼の語った計画名を呟く、その先にあるであろう理想を求めて…

酒場であるパステイル亭では人が多く賑わっていた。

どのテーブルにも料理が所狭しと並べられている。

あるものはジョッキに入ったエールを飲み、あるものは料理を口一杯に頬張っている。

そこにいる全ての者が笑顔で騒いでいる。

精霊と人間の間にあつた誤解は解け、争いは終わった。

その事実が人々の顔を笑顔に変えた。

「酒が足りないわよ。」

もつと持つてきなさい。」

完璧に酔っているヤツィータが、空のジョッキを頭上で振りながら言う。

「おう、姉ちゃん！

良い呑みっぷりじゃねえか！」

彼女の声に反応して回りから次々と声が上がる。

「拙いわね」

「え？」

何がです？」

それを離れて見ていた神剣士達から焦りの声が上がる。

何が拙いのか分からない四人は首を傾げる。

「ヤツィータは飲み過ぎると……」

「んもっ、熱いわね。」

脱ぐわよっ！」

「は？」

ヤツイータはいきなりテーブルに立ち上がると服を脱ごうと手をかけた。

「ちょっと、ヤツイータさん!？」

「待って下さい!」

世刻と永峰がヤツイータを止めようと足にしがみついた。

周りの男共は煽り、沙月とタリアは諦めたように溜め息をついた。

ソルラスカとルプトナは料理を必死に頼張っていて、気づいていない。

カティマは気づいてはいるがオロオロしている。

「あれ?」

そこで沙月はこういう時に呆れた様に溜め息つきながらも止める声が聞こえないことに気づいた。

「裕樹はどこにいるの?」

「そう言えば、見当たらないわね」

沙月とタリアは裕樹を探して辺りを見渡した。

しかし、建物内にはどこにもいなかった。

最初の時には間違いなくいたはずだ。

何時の間になくなったのだろうか。

沙月は裕樹を見なかった聞き回った。

するとソルラスカが出て行くのを見たという。

「ああ、裕樹なら風に当たりたといって外に行ったぞ」

「外に?」

「ありがとう」

沙月は裕樹を追い掛ける様に外に飛び出した。
出ると同時に背後からヤツイータの「吐きそう」と言う声が聞こえたが無視した。

「外と言つてもどこにいろのかしら？」

建物から出て辺りを見渡しても、ことと同じ様にどの建物からも喧騒が聞こえる。

裕樹はよく一人でいることを思い出して静かな場所を探した。
しかし、街中と学園内を探したが何処にもいなかった。

裕樹の部屋にもよくいる屋上にもいなかった。

沙月は見つからないことに次第に焦り始め、走り回っていた。

けれど、何処にもいないことを疑問に思い、最後の場所に気づいた。
それは、下界だった。

「まさかねえ」

自分で思い立った場所を否定しながらも万一のことを考えて降りた。
降りてみるとそこは暗闇に満ちていた。

時折聞こえる獣の声や風で揺れて聞こえる草木の摩擦音が更に不気味さを表している。

「一人で入ると怖さ倍増ね」

街のある木が他よりも数倍大きいからか、辺りには月明かりがほとんど入ってこない。

沙月が辺りを見渡しても見えるのは大木ばかり。

「やっぱりここにはいないわよね」

沙月としても何時までもここにいたくはない。

「ぐうつ……はぁっ」

踵を帰そうとしたり何処からか人の呻き声が聞こえた。

「裕樹？

いるの？」

呼びかけても返事がなく、聞き間違いかと思い、帰ろうとしたら再び声が聞こえた。

「さ、沙月か？」

今度ははっきりと裕樹の声が聞こえた。

沙月は声が聞こえた方に駆け出した。

走り出した先には木にもたれながら、辛うじて立っている裕樹の姿だった。

「っ……！？」

沙月は絶句した。

裕樹の姿は服の大部分にはもう酸化して黒に近い血で染まっていた。目から血が垂れて、口元からも吐血したのが分かるほど、べったりと血が付いていた。

「よう、沙月。

一体どうっ……した」

沙月を見た裕樹は自力で立とうとしたが体を支えきれずに木にもたれた。

裕樹は喋る間にも苦痛に顔を歪ませた。

「どうしたって…」

あなたがどうしたのよ!？」

沙月は裕樹に駆け寄り、体を楽にさせようと座らせた。

「別に……」

どうもしてねえよ」

周りの地形からは戦闘がないことが判断できた。

「だったらその大量の血はなんなのよ!」

「騒がないでくれ。」

頭に響く」

木にもたれ、頭を押さえながら言う。

「ごめんなさい。」

でも、何でこんなに血まみれなの?」

沙月は持っていたハンカチで顔の血を拭いながら謝った。

「これは全部、俺の血だ」

「あなたの?」

「ああ」

苦痛に顔を歪ませ、時折血を含んだ咳をする。

「ごふっ…
はあはあ…」

その度に沙月はハンカチで拭い、瞬く間にハンカチは血で染まりきった。

「これは代償だ。
化け物として産まれた……な」

裕樹はそれを言い終えると目を閉じ眠りについた。

「誰にも見せないためにこんなところで一人でいるなんて……」
沙月は裕樹は何で一人でここに來たか分かっていた。
皆に心配かけないようにしたということ。

それと、裕樹は純粹に仲間に頼る方法を知らないからだ。
沙月は裕樹の顔を眺めながら、彼の乱れた髪を手で梳いて整えた。
その眠り顔は時折、恐怖と苦痛に歪んでいた。

「……んっうっ……」

その顔を悲しそうに眺めながら一言呟いた。

「いつも私たちがあなたに甘えているからここまで傷ついてるのね
……」
どうしてあなたは私たちにここまでしてくれるの？」

その呟きに答える声はなかった。

沙月は裕樹の苦痛に歪む顔を見つめていた。

「あなたも私に甘えていいんだからね」

その優しい呟きに応える様に裕樹は横にいる沙月の肩にもたれてきた。

それはうなされて身じろいて動いたのか、聞こえて応えたのか…

「…ふふっ」

それに沙月は驚いたが、優しく微笑んだ。

事實はどうあれ裕樹が応えてくれたように思えて沙月は嬉しかった。沙月は裕樹が寝やすいように頭を膝に移動させた。

膝枕にした後、沙月が裕樹の髪を撫でていると彼の顔から苦痛が消えた。

裕樹の顔は穏やかな表情に変わった。

沙月は裕樹の顔が穏やかなになったことを嬉しそうに優しい笑顔で髪を撫で続けた。

せめて、今だけは過去の罪に苛まされない様にと願って……

「今、ここで出るのは野暮やんなあ」

一部始終を見ていた者がいた。

「どないしょー。」

ま、成るようになるやろ。

それにしても予想外やなあ。

あの子とマリー、どっちが勝ち取るかな？」

その人物は溜め息ついて呟いた。
そして笑顔で消え去った。
最後に一言だけ残して…

「布石は既に放たれた」

第三十一話（前書き）

やっぱり主人公のことに関しての奴がくどい気がします
前回のシチュエーションなんですがあんな感じでいいんでしょうか
？（膝枕の部分）

第三十一話

夢を見ていた。

とても懐かしく、とても悲しい記憶を。

幼少の頃に置いてきた筈の記憶が甦る。

「どうして？」

どうして行っちゃうの！？」

子供が泣き喚き、暴れるが大人に掴まれては動けない。

子供の視線の先には一人の女性が背を向けて歩いていた。

「良い子にするからあ！」

だから、置いて行かないでえ！」

子供の叫びは虚しく女性に届くことはなかった。

いや、届いていたとしても女性は一度も振り向くことはなかった。
所詮は夢にすぎない。

夢は仮初め、事實は違う。

子供は自分がどういった状況にいるのか分かっていた。

だから子供は女性に向かつて一度も叫ばなかった。

ただ、当たり前といった顔で女性の背を見ていた。

自分がしたことはそれだけのことだと言わんばかりに……

女性が視界から消えるまでその背中を見詰めていた……

「俺はあんな風に泣き付きたかったのか？」

過去の自分を見ていて、彼は思う。

「考えても無駄か。

過去の事実で、仮にああなっていたとしても今は変わらなかっただろう」

彼はその考えを言うが、その声には何の感情も宿っていない。場面は更に流れる。

その後、孤児院に預けられた彼はそこでも異才を放っていた。施設の従業員には預けられた経緯は知られていた。

無邪気にはしゃぐ子供なら奇異な目で見られることはなかった。

大人の空気が子供までも移り、彼は独りでいることが多くなった。成長してからは能力を自粛したが、子供の頃の時にはそんな考えも浮かばなかった。

故に彼が成長する頃には誰もが彼を怖がって、近づくものはいなかった。

中学の頃に彼は一度倒れた。

病院に運ばれて、検査されたがただの過労と判断された。

けれど、彼はその頭で自分の病気が分かった。

それから彼は自分の能力を極力使わないようにした。

使えば使うほど、脳の寿命が著しく縮まるからだ。

もともと、使わなくても二十程度で死ぬことは理解していた。

そこで彼は生きるということを諦めた……

それから数年、裕樹は意味も無くただ情性で生活してきた。

皆が行くと言うから大学に通い、生活するのに金が要るからバイトする。

そんな当たり前の生活だったが、彼は一度も笑ったことが無かった。趣味も交友も無く、ただ情性で過ごしていた。

朝になったら大学に行き、終わったらバイトして夜になったら寝る。
それだけの日々…
そんな時だった。

断罪が裕樹の目の前に現れたのは…

「異質な者よ、我に答えよ」

その言葉が彼の人生を変えた。

「いいだろう、契約だ」

彼がそう答えたのは何もかもがどうしても良かったからだ。
それからの日々も全て苦痛になることを知らずに……

それをずっと見ていた者がいた。

「なんでここまで疎まれるの？」

「こんな人生悲しすぎる」

それは彼が見ているときに側にいたからか、それとも…
それを見ていた少女は自然と涙が流れた。

不意に裕樹は暖かい空気を感じた。

「なんだ？」

裕樹はそれを理解できなかった。
ただ、悪い感じはしなかった。
彼の意識は急速に墜ちていった。
それが優しさと気がつかずに……

木々の隙間から陽の光が降り注ぎ、朝露がそれを反射させていた。
キラキラと輝いている草木は森を神秘に演出していた。
そこにいるのは二人だけ。

一晩中裕樹は沙月に膝枕をされていた。
すでに金色の霧となったのか血の跡はなかった。
ゆっくりと裕樹は目を開いた。

「……朝か」

目が覚めた裕樹は頭だけ動かして辺りを見渡した。

「森か……」

沙月にばれて……
そのまま気を失ったのか」

朝の冷たい空気ですごに気が覚めた。

「で、こいつは何してんだ？」

裕樹は目の前にある沙月の顔を不思議そうな顔で見る。

沙月はすぐ側にある木にもたれていた。

沙月は膝枕をしているから変な格好でもたれていた。

「それにしても…」

懐かしい夢を見たな」

夢と言ったが彼は厳密にはその出来事を体験してはいない。

けれど、繋がってはいるが故に彼の記憶と言っても間違いはない。

「俺は約束の為に俺でないといけない。

俺は…っ」

裕樹はその先を口の中だけで言う。

それは手術のせいで第三者の視点で記憶を見れてしまうからだろうか…

裕樹は過去の記憶を二者の視点で見ることができた。

自分から見る第一者と周りから見る第三者の視点。

記憶も混ざり断片的にしか分からない。

（自分を演じてはいるのだろうか？）

その疑問を彼はいつも自問自答してきた。

しかし、一度も納得のいく答えは出たことがない。

「……………」

考えるのを止めて、裕樹はボーっと沙月の顔を眺めた。

「ん？」

裕樹はあることに気づいた。
けれど、それをはっきりと否定した。

「気のせいかな」

それは有り得ないからだ。

（何で一瞬、沙月がマリーに似てるって思ったんだ？）

裕樹はなんでそう感じたのか疑問に思った。

顔も性格も全然似ていない。

唯一似ているのは髪型だけだ。

なのに似ていると思ってしまった。

裕樹は起き上がり、何故なのか確かめるために裕樹は沙月に手を伸ばした。

そして確かめるように頬を撫で、そして髪を梳く様に撫で始めた。
沙月が目覚めますまで……

それから数刻後、陽は昇り昼といえる時間になった。
裕樹はその間ずっと沙月を眺めていた。
その間も髪を撫で続けた。

「……んう……うう……」

「起きたか？」

裕樹は沙月に呼び掛けた。
それに応える様に沙月の目が開いた。

「ここは…？」

頭が醒めていない沙月は辺りをキョロキョロと見回した。

裕樹に気づいた沙月はじーっと裕樹の顔を見た。

沙月の目を見るとまだ寝ぼけているのが判る。

「なんで？」

「なんであなたはっ……」

その言葉をいうと目に涙を溜めながら、両手で裕樹の手を握り締めた。

懇願する様に下を向くと同時に目から涙が零れた。

「大丈夫だ……な？」

裕樹は子供を宥める様にもう片方の手で頭を撫でた。

裕樹は明らかに作った笑顔をしている。

それは機械の様に無機質なモノだった。

意味も分からず、ただ笑顔をしているだけ。

優しさなどの感情が全く感じられない笑顔だった。

その事実が沙月は悲しかった。

裕樹は過去の記憶を見られて哀しまれているとは欠片も思っていない。

（マリーも良く泣いてたな……）

まだまだ断片的にしか思い出してないが裕樹はマリーを思い出し始

めている。

（マリーも突然泣き出すんだよね…）

裕樹は沙月が泣いてる理由は夢見が悪い程度にしか考えていない。裕樹は自分の境遇が不幸とは一度も思ったことがない。

逆に言えば幸せと思ったこともない。

沙月は夢でそう感じた。

だからこそ沙月は思う。

（いつか、心から笑って欲しい）

知れば知るほど悲しくなる。

別に境遇を哀れんでいる訳じゃない。

いつも独りでいることが悲しかった。

「落ち着いたか？」

「……ええ」

（あれは夢？

でも、あまりにもリアリティがあつた。

けれど、裕樹は全然動揺していない。

私だけが見た？

でも、何で？）

指で目尻に残っている雫を振り払う。

考えても次々と疑問が浮かんで来るのみ。

とりあえず沙月は考えるのを止めた。

「そろそろ戻るぞ」

「そうね。」

皆心配してるでしょうね」

沙月は勝手に脱け出して、そのまま戻ってないことを思い出した。

「いや、それはないな」

「え？」

裕樹はそんな沙月の考えをあっさりと否定した。

「あはは、こういうことね…」

沙月は目の前の惨状に苦笑した。

店に戻ると酷い有り様が二人の目に入ってきた。

酒場の中では全ての人が酔いつぶれ、硬い床に倒れていた。

床には酒瓶が転がり、倒れているテーブルや椅子がいくつもある。

「酷い有様だな」

「全くね…」

この惨状を前に二人は大きく溜め息を付いた。

一言で言うならば死屍累々。

ところどころからイビキや寝言が聞こえる。

「とりあえず、コイツらを起こすぞ」

裕樹はヤツィータを中心に固まっている世刻と永峰の元に歩み寄った。

ヤツィータは酒瓶を握り締めながら腕を二人の首に回している。

多少息苦しいのか二人は顔をしかめて唸っている。

裕樹はしゃがんで二人の首から腕を外した。

その後、二人の肩を揺らして起こす。

「おい、起きろ」

「むゝ…」

「…望ちゃんが…」

「…望ちゃんが…」

二人を起こそうとして唸るだけで一向に目を覚ます気配がない。

「はあ、永峰…」

裕樹は起きない永峰の耳元に口を寄せて二、三言囁いた。

「だめだよ!？」

「望ちゃんは渡さない!!」

その瞬間、永峰は勢い良く立ち上がった。

永峰は辺りを見渡すと横で寝ている世刻に気づくと両肩を掴んで思いつき揺らした。

「望ちゃん、どうしてゝ!!!？」

「うわわあああああ!？」

いきなり力いっぱい頭を揺らされて、世刻は目を覚ました。
永峰は世刻の状態をお構いなしに揺さぶり続ける。

「裕樹：

一体何言ったの？」

沙月がジト目で裕樹を見ながら問うた。

「ああ。

永峰に世刻がヤツイータと一緒に寝てるぞってな…」

「あなたねえ…」

永峰が世刻に好意を抱いているのは明白。

故に、彼女を刺激するには一番だが、内容が悪い。

嘘を言っている訳ではないから余計に質^{たち}が悪い。

しかも、全く悪気がない。

裕樹はどうすれば効率良く二人を起こせる選択肢を取っただけ。

沙月はそれに呆れていた。

他人事には気づくのに、自分に関することはほぼ気づかない。

他人に対する事柄はなんでも出来るのに、自分が中心になると途端に動きが変になる。

会話は成り立つが裕樹はそこに意味を求めてしまふ。

日常の会話などほぼ意味が無いのに…だ。

「ああ…もっ、うるさーい!!」

ずっと世刻を揺らして騒いでいた永峰の声に反応してヤツイータが吠えた。

第三十二話

その後、二人は全員を起こした。光をもたらず者を排除したから、この世界に留まる理由は無くなった。

それで、旅団の本拠地の世界に移行という話になった。しかし、ヤツイータが知っている座標がまた次元振動によってずれていた。

それをンギとロドウィゴに話したところ…

「その世界になら移動出来る」

そう言つて、ルプトナに座標を渡した。

何故ルプトナなのかは、彼女もついて来ることになったからだ。理由としては本人曰く…

「ジルオルとお前を監視するためだ！」

ジルオルのことは精霊から聞いているからなのだが…

裕樹はただむかつくからと言う。

他の神剣士は意味が分からず首を傾げる。

あからさまに敵意を向けられている裕樹はどうでも良いような涼しい顔をしている。

沙月やタリアが一応止めてみたものの、精霊も了承していて同行を認めた。

それで、座標を永峰に渡すことになるのだが…

「本当にいいの？」

「ええ、思いつ切りどうぞ」

ルプトナの問いに、何故か沙月が満面の笑みで答える。
その言葉に頷いて、ルプトナは永峰を押し倒した。
そして、永峰の唇をルプトナの唇が塞いだ。

「んうゝ!？」

永峰は不意打ちに驚いて目を見開いた。

「……………」

「あゝ……………」

「はあ……………」

世刻は目の前の光景に絶句した。
ソルラス力は気の毒そうな顔で頭を掻いた。
タリアは呆れたように溜め息をついた。

「?」

誰も彼もが驚いたり気の毒そうにしているが、裕樹だけは不思議そうな顔をしている。

「どうかしたの?」

「いや、なんでもない」

「それにしても…」

「長いな……………」

「そうね……………」

「ふあ…………んう…………ちゆく……………」

数十秒経っても終わらないキスに、周りのメンバーに気まずい空気が漂い始めた。

されている永峰は目から生気が失われていた。

一分近いキスが終わると永峰は部屋の片隅で沈んでいた。

「ファーストどころかセカンドまで…」

などといった呟きがたまに聞こえてくる。

傍から見てみるとそれはまるで呪詛を唱えている様だ。

周りのメンバーは気の毒すぎて誰も声をかけられなかった。

その中でルプトナだけが活き活きとしていた。

永峰が落ち込んでいる間にこの世界から足りない物資を掻き集めることになった。

世刻やソルラスカ、カティマは男子生徒を連れて木々を切り倒し学園に運んでいく。

沙月やタリア、ルプトナはルプトナの学園での細かい説明やルールを教えて、物資の判別やこの世界の住民に対しての対応をしていた。その中で一人、裕樹だけは世刻達から抜けだして部屋に籠っていた。裕樹は部屋のと真ん中に座って目を閉じていた。裕樹は神剣の力で覗いてあるものを覗いていた。

「見る限り、アレはナルカナの分身か…」

本来の目的はジルオルを見つけること…

しかし、世界を渡る時に記憶を失う…か」

そう言うつと裕樹はゆつくりと目を開いた。

「高位神剣の化身の複製による欠如か、『渡り』がないのに無理矢理世界を渡ったせいかな…」

裕樹は立ち上がると手を前に出して空気を握る。

その瞬間、手が淡く光り、体から光の玉が現れ、ふわふわと浮かび消え去った。

「彷徨い悩みその先に何を見るかな…」

裕樹は虚構を見つめてそう呟いた。

「それで、決めたかな？」

「ええ、貴方の計画に乗らせてもわうわ」

黒に支配された閉じた空間に一組の男女の声が響く。

「それは少しおかしい。

俺の計画じゃない。

お前が行動するかどうかだ。

俺はどっちでもいいんだからな」

「あくまでも選択を叩き付けるだけね」

「その通りだ。」

当事者が解決しなければ、意味もなく納得しないだろう」

淡々と事実を述べる男の言葉に咬み付くように女が言う。

「それは違いないけれども、そんな風に見透かした装いが気に入らないわ」

「俺のことはどうでもいいだろう。」

結局はお前がどうしたいかだ。

現状に身を任せるのもよし、抗うのもよしだ」

彼女が睨むが男は至って涼しい顔をしている。

彼女の声には多少の感情が籠っているが男の声には何も感じられない。

「それはいいとして…」

一つ聞いても良いかしら？」

「好きにしろ」

「それじゃ、何故私たちが抗える選択を…」

いえ、抗いたくなるように言うのかしら？」

「……………」

「あら？」

都合の悪いことは黙だんまりりかしら？」

「別にそういうわけじゃないんだが…」

なんだろうな、俺は見ていたんだ。

人が諦めずに生きることが…」

彼の目は遠いところを見ているようで何処も見えていないようだった。そこに籠っている感情を彼女が読み取る前に彼は目を閉じた。

「神気取りは屠とるとして、亡者はどうする？」

「現状では彼女らも私たちに干渉は出来ないでしょうから放置ね」
「解った。」

では、次の世界で…」

そう言つて男は光となつて消え去つた。

「どこまで信用したらいいのかしらね…」
けれど、彼の言葉に嘘はなかった」

男の声が少しも揺らがないことが嘘を言っていないことを表していた。

「あと少し…」

あと少しで…」

彼女は腕を組み、力一杯唇を噛み締めた。

「お前もまた過去の虚構に縛られる者か…」
何故自由に生きないのだ…」

精霊の世界を飛び立って早数日。

現在ものべーは『魔法の世界』に向かっている。

そして、遂にその世界へと辿り着いた。

此処に来るまでの間に、一応立ち直った永峰がヤツイータにどのような世界か聞いたところ、一言『魔法の世界』という言葉が返つて来た。

魔法と言つてもただ単にファンタジーの世界と言つわけではない。

誰かが言った。

「進歩しすぎた科学は魔法と言える」

雲海をものべーが突き抜けるとそこに威風堂々と一つの塔が浮いていた。

中央にある塔の周りに幾つもの島のようなモノが浮いていた。

「うおお……」

「すっげえ……」

「正しく威風堂々と言ったものでしょうか……」

学校の至る所から感嘆の声が上がる。

「ようこそ、魔法の世界の中心の都市、ザルツヴァイ。
科学の結晶、支えの塔へ」

沙月の声が生徒会室に響いた。

その後、ものべーは支えの塔の周りを二三回旋回した後、支えの塔のドッグへ近づいていった。

「それじゃ、早苗先生。」

生徒たちに上陸の準備をさせておいて下さい」

「大丈夫なの？」

「ええ、問題ないですよ」

その言葉を聞いて生徒会室を飛び出して放送に向かっていた。
すぐさまにその内容の放送が流れて、校舎の至る所から喜びの声が
上がった。

ものべーがドックに近づくと窓からドックに四人の人がいることに
気づいた。

「……………」

長身の男にメイドはいいとして…
あのネコミミの奴らはなんだ？」

窓から見た裕樹は顫かみを押さえて不思議な顔をした。

「長身のつてサレス様！？」

裕樹の言葉に反応したタリアが部屋から飛び出して行った。

「…目を輝かせて走って行ったな」

「あはは…」

「よほど嬉しかったんですね。」

そのサレスという人に会えることが」

普段には見られないタリアの姿に半数が驚いていた。

沙月とヤツイータは苦笑して、ソルラスカは気に入らないようにし
かめ面をしていた。

「ほらっ、俺達もさっさと行くぞ！」

二人の苦笑にした顔が自分に向いていることに気づいたソルラスカ
は誤魔化すように声を上げた。

「誰も俺の疑問には答えてくれないのか…」

裕樹の呟きに対して誰かが答えることはなかった。

ものべーから降りてドッグに立つと、全員に高所特有の冷たい空気が襲った。

全員が服のボタンなどを全部閉めて少しでも暖かくしようとしていたりしていた。

世刻はレーメが入るために制服のボタンを開けさせられていた。

そのようなことをしていると、焦れたタリアが先に行くと言って走って行った。

その後をソルラスカも慌てて追った。

ソルラスカの後に他の神剣士メンバーが歩いて行った。

歩いている間も世刻はレーメとなにやら揉めていた。

揉めている間に四人が判断できるくらいの距離になったときにネコミミの少女が声を上げて勢い良く世刻目掛けて走ってきた。

「待っておったぞ、のぞむ!!」

世刻一直線に向かって走っている少女があと数メートルのところに来た時だった。

一番後ろにいたはずの裕樹が走っている少女の左腕を取り、足で片足を掬い、押し倒した。

「な、なんじゃあ!？」

その動きに気づいたサレスとヤツイータが神剣を構えた。

裕樹は少女を押し倒した後、掴んでいる左腕を背に回して膝で抑えつけ、片方の神剣で後頭部を抑えつけた。

構えた二人に対してはヤツイータは無視して本である神剣を取り出したサレスの神剣をもう片方の神剣で弾き飛ばした。

「……………」

その瞬間、何が起こったのか分からない者たちの間で変な空気が漂った。

「ちょ、ちよつと!？」

裕樹、なにしてるのよ!？」

「すまん、いきなり走ってくる奴がいたから反射的に動いてしまった」

「……………」

沙月の言葉に素直に謝罪する裕樹に周りは何も言えなくなってしまう。

「そろそろ離して貰えんかの？」

裕樹に抑えつけていた少女が言った。

「……………」

しかし、裕樹は神剣をさらに強く後頭部を押さえつけた。

「別に危害を加えるつもりはないのじゃ」

「分かった…」

沈黙して見つめている裕樹の考えに気づいた少女はそう言って放し
てもらった。

少女は立ち上がりながら服についた埃などを叩き落した。

いきなり出鼻を挫かれた少女は溜め息をついた。

少女が飛び掛ってきた理由に気づいた永峰は少し笑顔になっている。
ルプトナとカティマは目だけのある人物に向け、沙月は苦笑してい
た。

世刻は何がどうなっているのか分からず困惑していた。

裕樹は先程から視線がきつくなっている、もう一人のネコミミの男
とサレスを見ていた。

その後ろにいたヤツイータが一言呑気な声で言った

「青春ねえ」

「さて、そろそろ自己紹介をさせてもらおうか。

名前ぐらいは確認しておきたいだろう？

まずはそこいる彼はニーヤアトトカ・ヴェラー。

この街、ザルツヴァイの代表だ」

サレスがネコミミの男に目を向けて説明する。

それにニーヤアは見下すように鼻で笑う。

「はっ、まさか人間だったのとはな」

隠すそうともしない人間を見下した言い方に世刻達は色めき出す。
それを気にした風もなくサレスは紹介を続ける。

「それから、そのの彼が押し倒した彼女が…」

「ナーヤ」トトカ・ナナフィじゃ。

このザルツヴァイで一応大統領をしておる」

藤色の髪を風に靡かせ、深い紫色の目には強い意志が宿っている。

ナーヤは無い胸を張って言った。

大統領という言葉に世刻や永峰が反応した。

「大統領とは言ってもただの形だけじゃ。

あくまでもこの街の代表は兄上じゃ。

そのところ、間違えはせぬようにな」

そう言つてナーヤは笑い飛ばした。

「ナーヤの側に居るのが、彼女の世話役でもあるフィロメーラだ」

「初めまして。

ナーヤ様の付き人をさせていただいております、フィロメーラと申します。

以後、お見知りおきを」

サレスの言葉の後にそつとスカートの端を摘まんで軽く持ち上げながら優雅に礼をする。

その洗練された行為に後ろの男子生徒から感嘆の声が漏れる。

「そして、最後に私が旅団のリーダーであるサレス・クオークスだ」

メガネを指で押し上げながら鋭い目で世刻と裕樹を見る。

世刻はその目に怯みながらも見返しているが、裕樹は紹介を聞いていたのかさえ分らないくらいずっと支えの塔を見ていた。

その奥にあるモノを見ているかのようにだった。

ナーヤがフィロメーラに生徒の案内を促し、街に連れていった。

ニーヤアも生徒たちが去っていった後すぐに神剣士たちを一瞥し、去っていた。

「……すまないな、のぞむ。」

兄上の態度には不快な思いをさせてしまった」

「いや、いいんだけど。」

なんであんな風なんだ？」

「あーあれなあ……」

いわゆる、差別主義なんだ」

世刻の疑問にソルラスカが困った顔で答える。

ニーヤアの態度は普段からああいった態度の様だ。

「そうだな、いささかそういう部分はあるが、この国の世情を考えれば、仕方の無いことだ」

「兄上はそういう主義主張が強すぎてな。」

……さて、このままここで話し込んでいては、風邪を引いてしまう。

わらわに着いてまいれ」

サレスの言葉に頷いたナーヤに促され、『塔』の中へと向かった。

「彼女は何時来るか…」

早くしないと時間がないぞ…」

裕樹はしばらく空を眺めていた。

その視線の先にはただ青い空と白い雲があるだけだった。

第三十三話

「ここはわらわが主に政に使う執務室じゃ。
存分にくつろぐといい」

そう言うナーヤに通されたのは、大きな窓の前にデスクが置かれ、
壁際に蔵書の詰まった本棚がいくつも並んだ部屋だった。

「はあ……蔵書がたくさんあるお部屋なのですね」

「うう、頭痛が……」

カティマが感嘆の声を上げ、ソルラスカが不調を訴える。

「大丈夫ですか？」

「単に本アレルギーなだけだから、心配なんてしなくていいわ」

心配する永峰に、タリアが溜息をつきながら呆れたように答えた。

「ほ、本アレルギーですか？」

「ええ。」

いかにも難しそうな本を見ると、すぐに頭痛と微熱が出るのよ」
「稀有な病気を持っているな……」

裕樹は本当に驚いた風に目を開いてソルラスカを見た。

「放つとけ」

ソルラスカは反論するが声に全く力が籠っていない。
本当に調子が悪いようだ。

皆に椅子を出して、ナーヤは窓際の執務机に座り、にこやかに言う。

「改めて、ようこそザルツヴァイへ！」

魔法の世界の中心にして唯一の都市じゃ。

わらわたちトトカー族が統治してある」

先程のニーヤアの差別主義はそこが要因している。

「我が国は、そこにいるサレスの協力を得ていてな。

もう随分と長い間、色々と助けてもらってある。

ちなみに、わらわの教育者でもあるぞ？」

「……そういえば、サレスって私よりナーヤの方を可愛がっていたわよね？」

「教え甲斐のある方を可愛がるのは、教育者として当然だろう？」

「あら、私は教え甲斐の無い生徒だったのかしら？」

「そうだな。

つまらないと言っては直ぐに逃げる。

見つけたと思ったら教科書を隠す。

とても手のかかる生徒だったよ」

「ちょ、ちよつとお！」

サレスの呆れた声で暴露されて、沙月は慌ててサレスを止める。

けれど、すでに時遅しで世刻や永峰に苦笑されている。

「とにかく、ここは旅団の本拠地でもある。

それ故にサレスとは長い付き合いなのじゃ」

「それじゃあ、沙月先輩を私たちの世界に送ったのは……」

「私の指示だ。

君がある神の転生体である可能性が高かったのですね」

「転生体って……」

前世の神のことか？」

永峰の質問にサレスが頷くとすぐさま世刻が反応した。

「その通りだ」

その一言だけしか答えないことに世刻はあからさまに不快な顔をした。

「それにしても多くの過去に因縁を持つ神が揃ったものじゃの。わらわを含めての」

「そうだな。」

特に彼女がここにいることがな……」

ナーヤの言葉に反応して頷きながらサレスは永峰を見た。
世刻や永峰がそれに反応するが、はぐらかされた。

「何にせよ、ここに滞在する間は存分に羽を伸ばすとよい」
「え？」

「ちよつと待ってくれ、俺達がここに来たのは……」
「解っておる。」

元の世界に戻るための座標が知るため、と言うのであろう？」
「だが、君達がここに来るまでにまた何度が時空震が起きてね。
君達の世界の座標が元の位置より随分とずれたらしく、それを割り出すのに苦労している。」

「もう少し待ってもらいたい」
「そんなに頻繁に起きるものなんですか？」

サレスはその言葉に反応して永峰が質問する。

「いや、普段であれば仮に起こったとしてもそこまで座標は変わらない。

なのに、ここ最近はあまり起こらない次元振動が頻繁に起こり、位置まで大分変わっている。

こんなことは私も初めてだ」

その言葉に誰も何もいうことが出来なくなった。

どのみち、大人しく待つしか無いのだ。

皆はとりあえず街に繰り出すことになり、次々と部屋から退出していく。

そして、部屋には三人だけが残った。

裕樹、サレス、ナーヤである。

「お主はいかんのか？」

「俺に用がある癖に何を言っている」

ナーヤの言葉に裕樹は素っ気なく返した。

「ほう、気づいていたか」

「あれだけ露骨に俺を見ていたくせに」

メガネを軽く指で押し上げながら言うサレスを軽く睨む。

「簡潔に頼むぞ」

「それでは正直に問う。

君は何者だ？」

「ただの神剣士だが？」

「それでは質問を変えよう。

君の目的は何だ？」

「籠の中の鳥を解放し^{はなし}に来たのさ」

「では、その鳥とは？」

「そいつは教えられないな」

淡々と質問し、それに答える。

それだけなのに空気は一気に冷たくなっていく。

「質問はそれだけか？」

「では後一つ聞かせてもらう。

君は私たちの敵か？」

サレスのその質問に裕樹は溜め息をついた。

「はあ…」

今までの行動を見ていたら分かるだろう？」

「正確には君というよりもあの神威のことだ」

その名前が出たことで裕樹の目がさらに鋭くなった。

「沙月からは何も聞いていないのか？」

「特には何も…」

「ちっ、話していないのか。」

なら俺からは何も言いたくない」

それから暫く沈黙が訪れた。

先に口を開いたのはサレスだった。

「ならばそれで構わない」

「今度は逆に質問させてもらう」

「構わんよ」

「ここまで筋書き通りで嬉しいか？」

「っ……」

それはどういう意味かな？」

「ここまで何もかもが偶然が重なりすぎてる。最初に行った世界には光をもたらず者がいて、二つ目にはそれらの戦力の要があり、それでここに連れてくる…」

すこし都合が良すぎやしないか？」

「それはたまたま移動した先がそうなたただけではないか？」

「一番都合がいいのは永峰の神獣だ。」

大型の次元移動が出来る生物が神獣とは普通は有り得ないだろ？」

「そこまで分かっているって何故私に言う？」

「お前の本質が知りたいだけさ」

そう言っただけで裕樹はサレスの目を見る。

サレスからすればかなりの圧力をかけられて、自分の中身を見られている気分だった。

「そう身構えるな…」

危害を加える気なら出会った時に殺している」

裕樹はサレスに軽く殺気を当てた。

「俺の目的が知りたいなら俺の行動を良く考えることだな」

そう言っただけで裕樹は立ち上がって部屋を出て行った。

「何故沙月から聞いている事をいわんのじゃ？」

「ある程度聞いていることは彼も気づいているさ。」

それに彼の目的は一つじゃ無いようだ」

裕樹が出て行った扉を見ながらナーヤの問いに溜め息混じりサレス

が答える。

「又聞きでは本質が大きく変わるときがある。

それに、沙月も肝心なところを話してくれないのでね」

サレスはやれやれといった感じで肩を竦ませた。

「遅い反抗期かの？」

そんなサレスの態度に茶化して言う。

「どうやらそうではないようだ」

「どうということじゃ？」

「最近の沙月の報告書では彼に関しての報告が望の書き方に似てきている」

「なんじゃと!？」

ナーヤ自身も過去に何度か沙月の報告書を見たことがある。そこには明らかに望への好意を感じ取れた。

「更に興味深いことがある。

望の方も少し変わってきている」

「望の方もじゃと？」

「ああ、沙月は気づいて無いようだが、ほとんど弟として見ている」
「なんと!」

ナーヤはその言葉に嬉しそうに笑う。

「しかし、一体なんでそんなことになったんじやろうか？」

ナーヤは沙月の変化に首を傾げる。

「沙月は元から望を弟として見ている節があった。それが他の異性が現れたことでそれが明確になったのだろう」
「なるほどのう。」

しかし、それはソルじゃ駄目なのかの？」
「それは近すぎるからだ。」

よほどのことが無い限り家族は異性足り得ない」

サレスの言葉に納得したようにナーヤは頷いた。

「ライバルが減って嬉しそうだな」

先ほどからずっと笑顔のナーヤにサレスは皮肉を込めて言う。

「そんなにわらわは嬉しそうなのかの？」

「ああ、そう見える」

「確かに嬉しいのは事実じゃよ。」

しかし、それは想いを叶えられる人が増えたからじゃよ。

望は複数からの想いを叶えられる人じゃないようだからの」

「確かに、彼は想いを告げられれば悩むだろう。」

もし、それが複数ならば、最終的に誰か一人を選ぶだろう」

それは即ち誰か一人しか想いを叶えないということ。

それが幸福に繋がるかどうかは当事者にしか分からない。

否、当事者でさえ分からないだろう。

「わらわは何時も思うのじゃよ。」

皆が幸せになるのはどうすれば良いのか……とな」

「難しい問題だな」

「最も、この様な考えを持つこと事態が傲慢じゃがの」

「それでも、考えずにはいれないわけか」

「あやつは想いを受け止めてくれると思うのじゃ。」

彼女達の想いをの…」

「彼女達？」

「達……じゃよ。」

彼女達自身も気づいておらぬじゃろうかの」

「彼は複数の想いに応えてくれると？」

「それはどうかの。」

少なくとも幸せになれるかもしれないのが一人増えたということ
じゃよ」

ナーヤは願いながら天井を見詰める。

否、その先に幸福な想像を見ている。

それが実現して欲しさに……………

「恋愛で幸せに……………か。

それを信じれるのは幸せやろうな。

しかし、複数……………？」

執務室の窓の外に浮いている男がいた。

部屋からは影に隠れていて見えはしない。

「うふふふ。

どの子もとても美味しそう…

けどやっぱり一番美味しそうなのは……………」

男は突然雰囲気が変わった。

唇を舌で舐める。

その様は男とは思えない位妖艶だった。

そして、愛しそうに腹部を撫でた。

声も女のモノに変わり、それは妖艶な美女を掻き立てる。

「うう……くう……」

男は呻きながらよろけると普段の様子に戻っていた。

「早く……」

早く……

今のままじゃ敵わない。

ワイじゃ抑えきれん。

やっぱり力不足か。

時間……が無い……」

男の声は一定にならず、様々な姿が掻き立てる。
言葉にも繋がりが無くなってきている。

男は力無く崩れると、そのまま落ち始めた。

地面にぶつかる寸前に光となって消え去った。

第三十三話（後書き）

あれ？

なんかヒロインが複数になってる…

まあ、いいか

出来るとこまで走りきってやります

ヒロインが増えようが敵が増えようがやってやります（自棄）

第三十四話（前書き）

また重苦しくなってしまった…
シリアスしか書けない…

第三十四話

魔法の世界で待機することになった学園はそれぞれがしたいことをしていた。

町に繰り出す生徒たちがいれば、学園でのんびりしている生徒たちもいる。

世刻や永峰も町に繰り出していった。

ソルラスカやタリアはサレスやナーヤと一緒に旅団関係のことを片付けていたりした。

その中で裕樹は一人、図書室に籠っていた。

裕樹が座っている前の机には五六人でも囲うことが出来ないほどの大きさにも関わらず、人の背丈にも届きそうなほど本が積み上がっていた。

窓から陽の光と心地良い風が入ってくる。

その風を浴びながら裕樹はまた一枚また一枚と本を捲り、読んでいく。

「ここにいたの。」

「こんなところで何してるのよ?」

溜め息をつきながらそう言って沙月が入ってきた。

「何って…本を読んでいるだけだが?」

「そういうことを言ってるんじゃないわよ」

その返事に呆れながら沙月は積み上げられている本を眺めた。

「辞書に、教科書、それに参考書?」

勉強でもしていたの?」

「別にそういうわけじゃないがな。

俺は基本的に忘れないからな。

いつか役に立つかもしれないから知識を詰め込んでいるだけだ」

「ふん」

沙月は一冊ペラペラと興味がなさそうに捲っている。

「って、え？」

「どうした？」

裕樹は言いながらも本を読み続けている。

「これ、全部覚えてるの!？」

「ああ」

積み上げられている本は軽く三桁はいつている。

それも辞書や図鑑などといった分厚い本がほとんどだ。

それを全て覚えていると言う事に沙月は驚いた。

「それで幾つかよく分からない物があつたんだが教えてくれないか？」

「まあ、私で分かるものなら…」

これらを全て覚えていると言われ、それで分からないことを教えてくれと言われても沙月にはそれを答えられる自信はほとんどなかった。

けれど、沙月はそう答えてしまった。

「気 斬って…何だ？」

「はい？」

「いや、この国語辞典に載っているんだが…
クリンの技って書いてあるんだが…
クリンって誰だ？」

そう言って裕樹は沙月に一冊の辞書を渡した。

それは小学生用の国語辞典だった。

裕樹が開いたページには確かに気斬と書かれていた。

「……………」

予想外の質問に沙月は啞然とした。

裕樹がこんな質問をしてくることにも驚いたし、それが辞書に載っていることも驚いた。

「これってあれでしょ？」

フリーザーにやられてって…」

フリーザー？」

あれか？」

氷で出来た鳥で、小さいボールに入れられる奴か」

「いや、そっちじゃなくて、ベータとか力カットとかが出る奴よ」

「ベータ？」

芝が新たに発売した冷蔵庫の名前か？」

それともスーパーマーケットの名前か？」

「そののどっちでもないわよ…」

言っていることが伝わらないことに沙月は脱力した。

沙月はとりあえず、他の本に目を向けて見た。

そこにシリーズで気になるタイトルがあった。

「Through the Looking-Glass, and What Alice Found There…」

鏡の国のアリス？」

「それは児童文学だな」

「子供の本ってこと？」

絵本とか」

「ああ、絵本は児童文学の一種だな。

それはAlice's Adventures in Wonderland…」

不思議な国のアリスの続編だ」

「へえ、続編なんてあったんだ」

そこから一冊取ろうとして、その周りにも知っているタイトルが幾つもあった。

「白雪姫、シンデレラ、赤ずきん…」

童話がたくさんあるわね」

「童話というものはとても興味深い。

どの世界にもあり、多種多様のものがある。

同じ世界でも国や考え方が違うだけで数えきれないほど生み出される」

沙月は他にも知っているものがないか、探してみると見たことない文字の物があつた。

「これは…？」

かなり薄い本で開いてみると、かなり少ない文字と絵、どうやら絵本のような本。

「それはロドウィゴからもらった奴だ。

精霊の世界の絵本だ」

「精霊の世界のって…

読めるの!？」

「多少時間はかかるが今日には読める」

その言葉に沙月は愕然とした。

絵本といえども他の世界の本を一日で読めるようになると言う。

「どうやって読むのよ？」

誰かに教えてもらうの？」

「頻繁に使われる文字はある程度これに書いてもらった。

それとその本の文字を照らし合わせて、後は絵で読み取る」

そう言つて裕樹は一枚の紙を出した。

沙月はそれを受け取り、見てみると確かに本に書かれている文字が書いてあった。

しかし、その文字の横に書いてある文字も見ることがなかった。
多少、元の世界の言語のアルファベットの形に似ているが、どれも見たことがなかった。

「この横の文字は？」

「俺が生まれた世界の文字だ」

「あなた、元の世界の生まれじゃなかったの!？」

「俺は一度もそんなことを言つた覚えはないのだが？」

沙月は元の世界出身じゃないことに驚いたが、裕樹は確かにどの世界で生まれたか何も言っていない。

「第一、俺はこの時間樹の生まれですら無い」

「神夜殿、言われていた物がご用意できました」
「やっと見つけたぞ！」

その言葉は発すると同時に現れた二人の少女によってかき消された。
現れた二人はカティマとルプトナ。

片方は両手に大量の紙を抱え、もう片方は勢い良く扉を開け放った。

「もう書けたのか。」

もう少しかかると思っていたんだが……」

「それほど多くは無いですし……」

それに正確に覚えている所もほとんどありませんでしたから」

そう言つてカティマは抱えていた大量の紙を机に置いた。

「これはなんなの？」

沙月はその紙の一番上のを一枚取った。

そこには先程の様に見知らぬ文字が書かれていた。

「カティマの世界の童話だ」

「なんでそれが紙の束なわけ？」

「あの世界に出るときに本やらなにやらは持ち運ぶ余裕が無かったからな。」

それで無理を言つて、カティマに覚えている範囲で良いから紙に書いてもらった」

「それなんです、私の世界の文字で構わないのでしょうか？」

「問題ない。」

読めるお前がいるし、俺はすぐに覚えられるからな」

そう言つて、本から顔を背けずにページをめくり続ける。

「僕を無視するなー！」

ずっと目を向けらずにいたルプトナが吼えた。

「俺は今忙しい。」

監視ならばジルオルをすれば良からう」

「僕はお前の方が気に食わないんだよ！」

「気に食わないのなら、無視しろ。」

視界に入れても存在してない様に扱え。

そうしていると相手も自分も互いに気にしなくなるからな。

もし、相手から何かしてくるならば、なおさら普通に相手にしろ。
そうすればそいつに対しても何も思わなくなる。

気に食わない相手に自ら相手にするからそうなるのだ」

相手にするから虐めというものが生まれるのだ…

そう言って裕樹は今まで読んでいた本を閉じて次の本へと手を伸ばす。

「「……………」」

「僕はお前のそういう態度が気に食わないんだー！」

その言葉にルプトナはさらに吼え、沙月とカティマはその考えに絶句していた。

その言葉はどこまでも冷たかった。

「それってちょっと冷たくない？」

沙月はその考えにムカついたのか少し怒気が籠っていた。

「そうか？」

「そうよ、それって他人に興味がないって言ってるも同じじゃない。それにそれはその人を否定しているってことでしょ？」

「ならば問うが…」

君は道ですれ違った相手を知りたいと思うのか？

何時、何処で生まれて、どんな奴か知りたいのか？」

「それは…」

「互いに不利益のない、交友のない奴ならば全く興味が湧かないだろう。」

もし、気分を阻害されるならば、視界に入れるな、興味を示すな、構うな。

他人を否定も肯定もしてはいない」

そう言つて裕樹は本を置いて立ち上がり、部屋から出て行こうと扉に向かって歩き出した。

「待てよ！

お前にだって大切な人がいるだろ！？」

その言葉に反応して一瞬足を止めたが、すぐに歩き出して部屋から出て行った。

「大切……………か…」

俺はそういうことが全く分からない…」

最後にそう微かに呟いて行った。

「分からない…ですか」

裕樹の残した最後の言葉をカティマが言う。

「彼は今まで人と交流したことがないのでしょね」

「私が聞いた限りでは交流どころか碌に会話もしてないんじゃない？」

「ねえ、なんであんなにアイツは冷たい目をしてるの？」

出て行くときにすれ違い様に見えた裕樹の目をルプトナは見えた。
紅い目が何も感情を宿さずに揺れていたのを彼女は見逃さなかった。

「彼はね…」

今まで友達と言える人が居なかったのよ。

一緒に行動していた人が居てもね、笑ったり、悲しんだり、起こったりする人がいなかったのよ」

そう言つて沙月はルプトナの頭を優しく撫でた。

「ねえ、だったら親は？」

アイツにも親がいるんじゃないの？」

「っ……」

親…沙月は彼がその親に捨てられたことを知っている。
それもかなり幼いころに…

それを勝手にしゃべって良いものか彼女は悩んだ。
そして、少し逡巡して、しゃべることにした。

「彼にはね、親といえるものが居なかったのよ」

「そんな…」

私の様に戦争か何か亡くなったのですか？」

「違うわ。」

彼は…捨てられたのよ。

その親にね……………」

「そんな…どうして!？」

沙月のその言葉に二人は驚愕した。

「なんでそうなったのかは、私にも分からない。

彼は聞いたら簡単に話してくれると思うわ。

だけど、それは簡単に聞いちゃダメなの。

彼の大事な、悲しい出来事だから…」

その沙月の言葉に二人は頷きも何も出来なかった。

ただ、三人は彼の出て行っただけ、開いたままの扉を眺めていた。

「ああ……………」

やっと彼がどういうものか理解できました……………」

少女はかつて入れなかった部屋の踏み込んでいた。

前は二つの人影が入っていただけのカプセルはいつの間にか、五つに増えていた。

少女の足元にはいくつもの本が落ちていた。

少女の手にもまた、一つの本が握られている。

それら全てを読み終えた少女は恍惚の笑みをしていた。

「彼が私が求めていた理想…」

何処までも人間で何処までも美しく輝いている…

ありえない苦悩、苦痛、それでも前に進む気高き意志……
ああ……

どれだけ人に蔑まれ様とも自分の信念を持って歩む……
聞いて見たいです。

その心を、悩み、痛み、投げかけられる人からの僻み、嫉妬、蔑
みを……

早く私に会いに来てくださいね。

うふふふ、こんな気持ちは初めてですよ。

ちゃんと責任とって下さいね、裕樹さん……」

少女は自らの言葉に陶醉するかの様に呟いた。

少女は何時までもこころと笑い続けた。

裕樹は部屋から出て行った後、当ても無く街を彷徨っていた。

意味もなく歩いていると裕樹は街の広場に辿り着いた。

裕樹は広場の中心にある噴水の淵に座り、空を仰いだ。

暫く仰いでいると裕樹の視界を影が覆った。

「裕樹さん、こんな所で何してるんですか？」

それは世刻と永峰だった。

「お前達か……」

ただ空を見ていただけだ」

そう言っただけ裕樹は再び視線を空に戻した。

その行為だけで二人は彼に何かあったことを察した。

けれど、彼がそれに触れること拒絶している気がして二人は何も言えなかった。

世刻は頼って貰えないことに悔しくて奥歯を噛み締めた。

世刻が強く手を握り締めていることに気づいた永峰は裕樹の手を取った。

「ほらっ、せつかくの自由行動なんですから、街を回りましょう!」

永峰はそのまま裕樹の手を引っ張った。

「お、おいつ」

突然のことに驚いた裕樹は引っ張られるままに立ち上がった。

永峰の考えに気づいた世刻は裕樹の反対側の手を掴んだ。

「そうですよ。」

このまま、じっとしているなんて勿体無いですよ」

そのまま裕樹は二人に引っ張られるままに街を連れ回された。

雑貨屋、市場といった所に行っては見知らぬ物に驚き、似たような物でも違いを楽しんだ。

「ここはなんでしょう?」

永峰は一つの店に興味を示した。

その店は置いてある物に統一感が無く、一見ガラクタの様に見えた。

「リサイクルショップじゃないか?」

「みたいですな」

世刻と永峰は店先に置いてある物を手にとって見たりしている。

「いらっしゃいませ」

奥から店員であろう少女が現れる。

チリンと髪飾りの鈴がお辞儀と共に鳴る。

世刻と永峰がそれに気づき、気になった物の説明を求めた。

店員はそれを懇切丁寧に教えている。

裕樹はその店員にすら気付かず、一つの物を凝視している。

裕樹が見ている物はただの玉の様な物だ。

それに気づいた店員はうつすらと口元を緩めた。

「おお、こんなところに居ったか」

そう言つて、ナーヤが後ろから走ってきた。

三人がナーヤの方に振り向いた。

「ナーヤ、どうしたんだ？」

「望と裕樹に話があるんじゃない」

「俺達に？」

世刻の言葉にナーヤが頷いた。

二人だけということに永峰が渋ったが、ナーヤの目が大事な事だと言っているのに気づいて大人しくなった。

「あ、説明ありがとうござい……」

丁寧に説明してくれた店員に礼を言おうと世刻が振り向いたがそこには誰もいなかった。

「あれ？」

店員を探そうと辺りを見渡したが自分たち以外には誰もいない。

「世刻、置いて行くぞ」

「あ、はい。」

今行きます」

永峰は学園に戻っていき、三人は昨日訪れたナーヤの執務室に向かった。

第三十四話（後書き）

気。斬なんですがマジで載ってるんですよ。
アレを見たときは本当に驚愕でしたよ

第三十五話（前書き）

最近纏まった時間が取れないので少し更新が遅くなると思われます

第三十五話

ナーヤに呼ばれた二人はそれぞれ別の部屋を案内された。裕樹の前にはサレスが、世刻の前にはナーヤと向い合って座っている。

「話は昨日で終わったと思っているんだが…？」

「君は私の手に負えないということが昨日で分かったのね。よって、今日は君に頼みがあるのだよ」

「頼みか…」

裕樹はその言葉を聞いて眼を閉じて少し逡巡する。

「頼む相手が違うんじゃないか？」

「望のことが…」

彼にはここで別れて貰うつもりだ。

希美を含めた全生徒達と共に元の世界に帰ってもらう」

「ほう？」

あのお人好しが現状を知って大人しく言うことを聞くか？」

「さあな……」

言葉通りに帰らないことを解っているサレスの考えを読み、その狙いに裕樹はニヤリと笑った。

「頼みとはお前は賢しいな。」

敢えて俺に目的を言うことで、俺の行動に分かり易い選択肢を与えるか。

制御出来ないと知って尚、しっかりとした意志で先を見据えるか

…」

そう言つて裕樹は口元を緩めた。
その様はまるで獲物を狙う捕食者に見えた。

「それで？」

俺に頼みたいことは？」

「私たちに協力してもらいたい」

「それは旅団に入れと言っているのか、目的に協力して欲しいのか
どっちだ？」

なあ、理想幹神サルバル・パトル」

「っ！！？」

その名前が出た途端にサレスが目を見開いた。

「前世の名前が出たくらいでそう殺気立つな」

「どうして君がその名前を知っている！？」

「さあ、その頭で考えてみな」

茶化すように嘲り笑う裕樹にサレスは違和感を抱いた。

「君は感情の起伏が薄いとこの報告を受けていたのだが…

この変化は何故なんだ？」

サレスは昨日会話したときよりも明らかに裕樹の様子が変わっていることに気づいた。

サレスには目の前の裕樹がどこかブレて見えた。

「昨日あった出来事が原因で、集めていたものが本来あるべき場所に
に戻り始めたただけだ」

「集めていたものとは？」

それに本来の場所とは？」

「そうだな、時期が来るまで他言しないと約束するならいいだろう。俺もこのままでは不安定だからやばいときには対処してもらいたい」

「いいだろう、話してくれ」

裕樹の言葉にサレスはしっかりと頷いた。

「そんな馬鹿な!？」

サレスは裕樹から告げられた真実に目を見開いた。

「それがここの真実だ。

所詮アレは莫大なエネルギーの塊に過ぎない。

それが意志を持っているだけでも有り得ないのに、その欠片全てにも勝手に現れるわけがないだろう」

「それでは私たち全員がただの力の欠片でしかないというわけなのか……」

「半分正解だな」

「半分？」

「お前と沙月は別だ。

それに与えられた意志とは別に前世においても自己が生まれている。

すでに数人は取り除いているが皆自己を持っている。

それはすでにお前たちは力を御して欠片から人になっている証拠だ。

転生というシステムもそうなるように作られている」

「それでは彼の殺戮も予定調和と言うわけか…」

「一応そうなんだが、一つ誤算があった」

「前世の記憶を持っていることか…」

「その通りだ。」

それが予定外の枷になってしまっている。

有るが故にそれに縛られている。

まあ、それ以外の馬鹿もいるわけなんだが…」

ちなみにそれが理想幹神だと裕樹は言った。

身に余る力を求めてそれに溺れる屑だと。

「奴らはその大本に気づき、その力を得ようとしている。

だから、俺が強制的に消して廻そうと思ったんだが…」

「その役目は彼女らに譲ったと」

「そういうことだ。」

それともう一つ。

戻り始めるのが予定以上に早過ぎる。

その調整に行きたいからしばらく離脱させてもらっぞ」

「それは別に構わないのだが、どうやって抜けるつもりだ？」

「それはもう少し後で丁度良い事が起きるからその時だな。」

そのときに俺の代わりが来るから安心しな。

そいつは俺以上にお前たちに馴染むだろうよ」

そう言っつて裕樹は立ち上がった。

「どこに行く？」

「不甲斐ない奴らを扱きにな。」

まだまだ彼らは弱い。

片割れに勝つことすら怪しいからな」

「暁絶か…」

「彼も所謂一つのキーなのでね。
これ以上は俺には読めん。」

「エターナルが関わると未来は読めない」

「君もそのエターナルなのだろう？」

「だが、君の場合は予測がついているのは何故だ？」

「俺が考えて行動していることにはありとあらゆることを考慮した
予測にすぎない。」

「それにエターナルもここではただの神剣士に成り下がる」

「最後に一つ聞きたい」

「なんだ？」

「私たち全員が君に対して一つの疑問を持っている。」

「私たちは大分前から君を知っている気がする…とな」

「……………」

サレスがそう言うのと扉を開けようとしていた手が止まった。

「すでに出ている答えを教える程俺は優しくないぞ」

それだけ言っただけで裕樹は部屋を出て行った。

サレスは出ていった扉をしばらく眺めていた。

「答えはすでに出ているか…」

時間樹の真実…

彼女らもまた被害者…

全てを信じられるわけじゃないが、頭の片隅には置いておかなければな…」

サレスは誰かに相談できる内容ではなく、その重さにため息をついた。

「彼はまだ何かを隠している。

結局、彼は私の疑問に答えてはくれなかったか。

私は沙月の様に壮大さに吞まれはしないぞ」

それだけは確信することが出来た。

そしてそれがどうなるかも分からない事態にただ彼はため息をつくしかなかった。

だが、彼はそこまでひた隠しにする裕樹に興味を抱いた。

第三十六話（前書き）

私の病気が原因で長期間放置していたのをお詫びします。

実は前回お知らせした病気をさらにこじらせて入院しておりました。先日何とか退院しました。

未だに完治はしておりませんので月一程度の更新になるかと思ひます。

ご迷惑おかけしました。

出来るだけ早くこの小説の続きをお届け出来るように頑張ります。

第三十六話

静かな教室には多数の生徒が座り、必死に黒板に書かれた文字を板書している。

窓から入り込む秋風がカーテンを優しく揺らす。

教室に響く音はチョークの音にカリカリと鉛筆の音、それと青年の声のみだ。

正に何処にでも有る授業の風景だ。

書かれている文字は統一されておらず、内容も数学に物理、歴史に公民、果ては文字の書取である。

「なあ……………」

「なんで俺達は勉強してんだ？」

教室の後ろの方に座っている森が小声で隣の阿川に問う。

「なんか最初はナーヤが彼に頼んだらしいのよ」

「それがなんで俺達も一緒にしてんだよ……」

「ナーヤが世刻と一緒に授業を受けたいって言い出して……」

「それが早苗先生の耳に入ってたわけか」

彼女は森のその言葉にそうよと答えて溜め息をついた。

事の始まりは昨日まで時間を遡る……………」

「は？」

裕樹はナーヤに言われたことがすぐに理解できなかった。

「だから望と一緒に授業とやらを受けてみたいのじゃ」

サレスとの話が終わり、部屋を出た瞬間に裕樹は扉の前にいたナーヤにそう言われた。

「お前は何を言っているのか理解しているのか？」

「無論じゃ」

裕樹のその言葉にナーヤは胸を張って答えた。

「世刻にはもう戦うなと言っておきながら、それを言うか…」

「だからこそじゃよ。」

もう戦わないでいて欲しいからこそ、学園の頃の日常を思い出して貰うのじゃ」

そう言っただけナーヤは寂しそうに瞳を伏せた。

「モノは言いようだな。」

「真実、一緒に来て欲しい癖にいざ言ってしまうと心配になったか」「んなあつ!?!?」

ナーヤは慌て否定するが、その必死さが逆に裕樹の言葉が真実だと肯定している。

「まあいい。」

「それも全部が嘘でも無いわけだしな」

裕樹はそう言つて、歩き出した。

「何処へ行くんじや？」

「授業を受けたいのだろう？」

「ならば、唯一の教師に許可をとらないといけないだろ」

裕樹の言葉にナーヤは笑顔になり、後に着いて行つた。

裕樹が早苗先生に言つと、異世界人のナーヤに文字が分かるかどうかと教える内容が問題になった。

そこに何処から聞いたのか、サレスが現れて教師役を裕樹に押し付けた。

ナーヤに教えるついでに神剣士達にもそれぞれに必要な事を教える様に言つた。

それならばと早苗先生も成績の芳しくない者を教える様に頼んだ。

それを裕樹が了承したために生徒が選抜されたのだが、二人がここに含まれてしまった。

「なんで異世界に来てまで勉強しなきゃいけないんだ…」

森は溜め息をつきながら呟いた。

「勉強が学生の本分だからだ」

何時の間にか森の背後に来ていた裕樹は手に持っていたプリントで頭を軽く叩いた。

「無駄口叩いた罰だ。」

コレも追加だ」

そう言つて、裕樹はプリントを森の前に置いた。

「ちよつ!？」

いくら何でも多過ぎつしよ!」

「お前の成績が悪い所を抜粋した特別プリントだ。
甘んじてやるんだな」

置かれたプリントの数は優に数十ページに及ぶ。

「ま、待った!

俺は数学は悪くないですよ!」

「誰が教科の成績で判断するか。
全教科の単元で判断しているに決まっているだろう」

森の抵抗を一蹴した裕樹は教卓に戻った。

「なんで学生じゃない僕までやらなきゃいけないんだよ」

一緒に巻き込まれたルプटनाもだらけて言った。
ルプटनाがしているのは精霊の世界の文字の読み書きだ。

「ある意味お前が一番必要だからだ。

お前がいた世界はまだ争いが終わったばかりだろ。

これからは協力し合わなければいけない。

ちゃんと約束事を決めておかなければいけない。

もし、またいがみ合いになったらお前が仲裁しないとイケない。
その時にお前が約束を記した文字が読めないと出来ないだろ?」

裕樹はゴネるルプトナに優しく諭した。
ちゃんと目を合わせて真摯に言った。

「……うん、分かったよ」

「ほら、続きをやりな」

裕樹は少し凹んだルプトナの頭を優しく撫でた。

いつもは裕樹に対して敵意を表している彼女だが、撫でられるのを嬉しそうにしていた。

「なあ……」

望二号の誕生か？」

「いや、あれはどちらかと言えば親子じゃない？」

「あゝ、そう見えるな」

「神夜殿」

その会話に気づいた裕樹は彼らの方に歩き出そうとしたら別の場所から呼ばれたので振り向いた。

「殿は止めてくれ、カティマ。」

「お前も世刻達も俺に対して気を使いすぎだ」

「じゃあ、先生とでも呼びましょうか？」

裕樹の言葉にすぐさま答える永峰。

永峰は少し頬を緩めながら茶化す様に言った。

その永峰を裕樹は冷たい目で見ると、空いてる机に置かれたプリン
トを百枚はあるかと思われる束を掴んで、永峰の机に叩きつけた。

「追加だ」

永峰の顔が絶望に染まる様を裕樹は見ながら冷たく言い放った。

「うわぁ……」

「ご愁傷様」

周りにいる一般生徒は気の毒そうに見ていた。

「てか、あのプリント一人どれだけ有るんだ？」

「知るかよ、お前聞いて見ろよ」

「やだよ、絶対プリント渡されるだろ」

「ああ……」

私もあんな風に冷たく言われたい……」

「「「え？」「」「」

「何？」

「いや、何も……」

一人だけ別のことを言った少女から周りの生徒は目を逸らした。

「で、カティマは何だ？」

「少し聞きたいことが有るのです」

「分かった。」

今しているのは……」

歴史の方が」

裕樹は歴史の教科書と資料集を掴んで、カティマの向かい側に座った。

「取り敢えずお前は施政者として人を導かなければならない。」

王政から民主制に変えたからといって、問題が無い訳じゃない。

寧ろ、王が自ら変えたことで問題が山積みだ」

「分かっています。

ですが、二度とあの様な戦争を起こしたくは無いです……」

そう言つてカティマは悲しそうに瞳を伏せた。

裕樹は一瞬だけ目に複雑な想いが宿つた。

（それに関しては本当に済まない……）

「兎に角、今の儘では民は政治に興味はない。

クロムウェイにある程度は伝えたが、ほんの少し先延ばしになっただけだ。

だから少しでも知識を吸収しろ」

「分かりました」

カティマが頷くと裕樹は歴史の移り変わりとその原因を事細かに語り出した。

「ねえ、そう言つて普通は帝王学を教えるんじゃないの？」

裕樹がカティマに説明していると、横から沙月が聞いてきた。

「いや、カティマはもう既に習っているからな。

と言うか、これ以上ないくらいに丁度良い参考になる物があるからな。

別世界とは言え、歴史は問題の解決策が数多く載っている。

これを使わない手はない」

「なるほどね」

裕樹の言っていることを理解したのか沙月は感心した。

「なあ、どう言うことだ？」

「あんた理解できなかったの？」

ソルラスカがタリアに聞くがタリアは呆れて溜め息をついた。

「良くそんなので天下を取るとか言えたわね……」

「お前らも無駄口叩きすぎだ。」

タリアはいいとして……

ソル、まともな報告書くらい書けるようになってから口を開け」
「ぐっ……」

またもや裕樹は背後を取って寝る。

「貴方も良くここまで準備出来たわね。」

二十程度の人数でも、それだけの問題を作るの大変だったでしょ」

教卓の周りには山となったプリントが幾つも積まれていた。

タリアはそれに半分感心、半分呆れて言った。

「まあ、それなりに大変だったんじゃないか？」

三人は徹夜してまで作ってたから……」

その三人はどう考えても早苗先生、サレス、ヤツイータである。
最も一番多くプリントを作ったのは裕樹だが……

「コレばかりはサレスに同情を感じるな……」

ソルラスカは憔悴したサレスを想像して苦笑した。

「あら、これは……？」

一つだけ、教科書や参考書に挟まれる様にして変わった物があつた。興味の湧いた沙月はそれを開いた。

見たこと無い文字だったか、何故か読むことが出来た。

それは、ある冒険譚の様だった……

それと同じくしてナーヤが世刻に対してなにやら話を始めた。

「そして、逸話に関してもなかなか侮れないモノが多い。

史実を教訓として伝えているものもあるからだ」

「それが私が渡した絵本なども含まれるのですか？」

「勿論じゃ。

むしろ絵本だからこそ侮れないものじゃぞ。

子供に読み聞かせるものじゃから、簡潔に内容伝えねばならん。

それ故になかなか面白いものじゃぞ」

「へえ、なら本当に興味深いことではあるな」

カティマの言葉に裕樹の代わりにナーヤが答える。

それに世刻は興味を示した。

「この世界には色々な本が有り触れておる。

まれに他の世界の物も流れてくるのじゃ。

しかしじゃ……

わらわが知っているもので誰にも分からないものが有るのじゃよ。

何処の世界の話なのか、誰が書いたのか、そして終わりすら分か

らないのじゃよ……」

「終わりが分からないって……

書かれていないのか？」

「書かれていないのではない。

何故か、その先が分からないのじゃよ……

読めないわけではない、だけど誰も内容を覚えておれないのじゃ

よ」

「誰の記憶にも残らない終わりか…

何か物悲しいな…」

「そうですね…」

「どんな話なんですか？」

「それは…」

永峰の言葉にナーヤはその物語を話し始めた…

タイトルは『孤独な英雄』

二つの国がありました。

二つの国は互いに争っておりまして。

何十年も続いている争いに王様たちは困っていました。

このままでは両国は共倒れになってしまうからです。

そこで片方の王様は神様に祈りました。

「私たちの国を救ってください」

と……

それを聞き届けた神様は一人の青年を遣わせました。

その青年は国に祀られていた宝物の武器を手にとって、戦い始めました。

けれど、その青年はある重い病を患わせていました。

王様は彼が戦ってくれる代わりに病気を治すことを約束しました。

そして彼は約束のために戦い続けて、争いが終わる前に彼の病気は治すことに成功しました。

「って、ところから誰も思い出せないのじゃ……」

「それで……」

その世界はどうなったんだ？」

この話に教室の全員が耳を傾けていた。
あまりにも中途半端な途切れに森がナーヤに問いかけた。

「だから、誰も知らないって言われたじゃない……」
「だけだよ……」

森の言葉に阿川がため息をつきながら答える。

「ふう……」

病気が治った後の彼はまるで人が変わったかのようなだった」

突如口を開いた裕樹に一斉に視線が集まった。

「勝つためには街丸ごと滅ぼし、子どもや女にも手を掛けるようになった。」

彼の暴走は止まらず、敵国の人間全部を殺したところで後ろから味方に貫かれた。

その時に彼は神様に会った。
そして神様は彼に言った……」

「願いを叶えましょう」

そこで裕樹は語るのを止めた。
教室には沈黙が訪れた。

それから数分後にカティマが一つ訊ねた。

「それで……」

彼は何を願ったのですか？」

「さあな……」

彼の言った願いが本当に叶ったのか、それとも叶わなかったのか。もしくは願ってすらないのかもしれない。

実は彼には願いがなかったのかもしれない……

何にせよ、それを知る方法はないな」

裕樹はそう言い終わると、立ち上がって教室をでていった。最後に一言だけ言い残して……

「今日はこれで終わりにする。
各自好きにしろ」

第三十七話

「はあはあ……はあっ」

男は走っていた。

ある少女から逃れるために。

「くそっ！」

何だってんだ!？」

しかし、走った先は行き止まりだった。

男が振り向くと少女の持った刃が眼前に迫っていた。

「つく!？」

男はなんとか両の手に持っていた剣で弾く。

さらに少女は畳み掛けるように連続で突いてくる。

男はなんとか弾いているが、時間の問題だろう。

これまで圧倒してきた力が彼女には効かない。

むしろ彼女と打ち合う度に力が抜けていくようだった。

「何故だ!？」

男が声を上げるがそれを無視して少女は刃を振るう。

「何故俺を狙っつつ!？」

声を上げた隙を逃さずに少女は男の胸を貫いた。

少女は崩れ行く男をその虚ろな目で眺めていた。

「何故……だ……
ファ……イム……」

男は地面に倒れながらも少女の目を見ていた。
倒れてからもその目を見続けていると不意に、彼女の後ろに人影が見えた。

「だれ……だ……？」

彼女の背後の人物が誰なのか分かる前に男は絶命した。

裕樹は屋上に立っていた。

「なんで教えてしまったんだろうな……」

先ほどの物語の最後を言ってしまったことを裕樹は悩んでいた。

魂に影響があることが続いたからだろうか…？
それとも戻り始めてしまったからだろうか…？

「どちらにしても、問題はないか。
早いか遅いかの違いでしかない」

そう呟いて彼は空を見上げた。
いつの間に出てきていたのか空は雲で覆われていた。
ポツポツと雨が降り始めた。
乾いていた地面を雨に濡れた地面が侵食するように乾いた地面を襲っていた。

「帰ってくるか……」

そう言つて裕樹は虚空を眺めた。
すると、眺めた先の空間が螺曲ねじまがつた。
空間が元に戻ると二つの光の玉が現れた。
白と黒の光はくると嬉しそうに裕樹の周りを回り始めた。

「エデン、彼女の機嫌はどうだ？」

「この時間樹に来てから戻るのは初めてだというのに劳いの言葉もなしですか……」

「ご主人様らしいですけどね」

エデンと呼ばれた白の光が答える。

「ナルカナ様はずっと不機嫌ですよ。
ご主人様がこの時間樹に戻ってきたからですね。
恨みはまだまだお忘れになってないご様子です。
出会った途端に魔法を飛ばされましたよ」

そう言つて、エデンは嬉しそうに笑う。

「その割には嬉しそうだな？」

「私が嬉しいのはご主人様が変わったからですよ」

「変わった……？」

「ええ、前は悩むなんてしたことなかったですけど……昔に戻ったようですよ。」

初めて出会ったあの時に……ね」

「……………」

「我もそっちの方が好ましい。」

あのままでは機械のようだと思っていたからな」

「アビス……」

「そっちの方が人間らしいぞ」

「……人間らしいか……」

今更、人には戻れないさ」

「ご主人様……」

「うふふふふふ。」

あらあら、誰よりも人らしいあなたがそんな事言つなんて」

不意に虚空に女の声が響いた。

「久しぶりだな、スールード」

「ええ、お久しぶりですね」

いつから現れたのか裕樹の目の前にスールードが浮かんでいた。

「何しに来た、雌狐……！」

アビスと呼ばれた黒い光の玉が姿を漆黒の竜へと変えて吠えた。アビスの姿は赤龍のバラストダと似ているが大きさが桁違いだ。全長50メートル近い、尻尾には鋭いトゲが数十と生えている。翼も大きい物が切れそうなほど薄く鋭利だ。鼻の上には鋭いツノが三本生えている。

アビスは今にもスールードに飛び掛ろうとしていた。

「大人しくしている、アビス」

裕樹に言われると敵意は向けているが、数歩下がった。

「神獣が失礼した」

「あらあら、そんなに畏まらなくても結構ですよ。何回も私を殺したのですからね」

そう言つてスールードはころころと笑う。

「で、何しに来た？」

「私はあなたにお礼を言いに来たんですよ」

「礼だと!？」

貴様が礼を言うような奴か!!」

スールードの言葉にアビスは更に吠える。

「大人しくしろといっただろう、アビス」

裕樹がアビスの顔の上に手を乗せて撫でるとアビスは震えて縮こまった。

「で、礼とは？」

「あなたに礼を言いたいですよ。
理由はそのうち分かりますよ。
それでは近いうちにまた会うことでしょう」

そう言つてスールードはころろと笑いながら消えた。

「近いうちか……」

「相変わらず何を考えているか分からぬ雌狐め！」

「少しは落ち着いたらどうですか？」

「ご主人様の迷惑ですよ」

「ぐっ、だが我はあの屈辱は忘れられぬぞ」

「近いうちに会つのですからその時に返せばよいでしょう」

「ちっ、仕方あるまい」

そう言つてアビスは再び黒い光の玉に戻つた。

「ところでアビス。」

「エト・カ・リファは起きたか？」

「どんなに声をかけても起きる気配が見えぬ」

「やはり俺が行かなければいけないか」

「勝手に使つてしまえば良いのではないか？」

「そうするとあいつが集めていたナルが散らばってしまう可能性がある。
ある。」

「今、力を使うのは得策ではない」

「エト・カ・リファ様もアレが使えればよかったのですがね……」

「これ以上分けたら俺が死ぬぞ？」

「ですから、それはしたくないのですよ」

「先にナルカナに会うか……」

「それとも彼女らに会うか……？」

「戦力はユーフォリアがいれば十分だしな」

そのまま、裕樹は考えを纏めるために呟き続けた。
裕樹はこうやって脳に入れた情報を口に出して改めて確認して耳で再度覚えるようにして整理するのだ。

「いつものことですが傍から見ると変人ですよね」

「そうだが、アレが主の癖だからな」

「それにしても、毎度毎度すごい集中力ですわ」

「声を掛けても気付かぬくせに殺気だと攻撃される前に相手を殺すのにな」

「相変わらず良く分からぬ御人ですわ」

「全くだ、おかげで我らは暇せぬのだがな」

そう言つて白と黒の光は笑う。

「何にせよ、まずは抜けるのが先だな。

お前たちは大人しくしておけよ」

「了解しました」

「ふんっ」

白と黒の光は裕樹の中へと消えていった。

裕樹は未だに降り続ける雨を見上げた。

「近いうち……か。

そうだな、また殺り合うだろうな。

未だに決着^{けり}はついていないのだから」

目を瞑り、雨に打たれる姿はまるで死刑執行を待つ囚人のようだ。

「さて、彼女を連れて弄りに行くか」

そう呟くと裕樹の姿は歪み、そのまま消え去った。

第三十八話

夕方から降り続いている雨に紛れて、支えの塔に侵入者がいた。コツコツと足音を辺りに響かせて一組の男女が歩いていった。男女の歩いた先には大きな扉が道を遮っていた。

「この先にはどうやって入るつもり？
管理者でなければ入れないわよ？」
「さて、どうかな？」

女の忠告を気にせずに、男は扉へと近づいていく。

『
』

『創造者であることを確認します。
0501060101041005』

『050209050202』

『創造者であることを確認しました』

扉はひとりでに開いた。

男はそのまま先へと歩いていった。

「貴方……
本当に何者なの？」

その女の呟きに男は足を止め、一言だけ言った。

「エヴォリア、少しは自分の頭を使えよ？」

男女の行き着いた先には光の文字が流れている空間だった。

そこはこの時間樹の情報が流れている場所だった。

時間樹の枝の一本の情報が流れている。

一本だけでも数えきれない世界の情報だ。

うかつに触ると情報に飲み込まれて死ぬどころか、その数えきれない世界すら崩壊する。

男がその流れの前にもで行くと、滝のように流れていたのが分かれ、人が通れるほどの空間が空いた。

「お前はここで待っている」

それだけ言つて男はそこへ足を踏み込んだ。

その空間に入ると同時に周りの景色が変わった。

そこは先程見ていたモノに比べ物にならないほどの情報に溢れていた。

しかも、そこは一切の光が無く、闇に包まれていた。

「これとこれ…さらにこれだ」

男はその中で手に欲しい物が吸い込まれていく。

その姿は淡く光り、実に神秘的で幻想的な光景だった。

「それで、お前の報酬だったな。」

先払いにしておこう」

エヴォリアからは男の姿は見えていなかったが、声は届いていた。それは単に声が聞こえるというわけではなく、部屋全体に声が響いていた。

「私が貰い逃げするとは思わないの？」

「別にお前でもなくてもいいし、俺に損はない。代わりに用意するだけさ」

エヴォリアの言葉に男は薄く笑う。

実に楽しそうに口元を歪ませた。

「運良くお前の世界はこの枝の先にある。

亡霊の干渉は出来ないようにしておこう」

『

』

呟くと男の前にコードが蠢くように椅子の形を成していた。

それに座ると、先ほどの場に流れていた情報が球形となって漂っていた。

男はそれが視えるかのように一点を見詰めながら、椅子から引つ張り出したキーボードを叩く。

時間と共に球形は段々と小さくなり、最後に男は一言呟いた。

それと共に珠は一気に膨れ上がりはじけ飛んだ。

それと同時に塔が……否、世界が揺れた。

世界が悲鳴を叫ぶように世界が軋む。

それに満足するように口元を歪めてると、その空間は硝子が破れて崩れ落ちるように消えた。

「ちょっと、凄い揺れてるけど大丈夫なんでしょうね？」
「安心しろ。」

世界の設定とそれに伴う管理者とマナの流れを変えた。
それによる世界の修正だ。
明日には収まるさ」

男の言葉にエヴォリアは安堵の息を付いた。

「ここからはお前の仕事だ。
時間稼ぎを頼むぞ」

「分かってるわよ。
勿論殺したらダメなんですよ？」

「ああ、ここまでやったことが無駄にされたくもない」

男は椅子から飛び降りて、扉へと歩いて行く。

「さてさて、これからどう分岐するかな？
理想幹神はどう動く？

行動しだいでは俺が消すか？
ナルカナに殺らせるのも面白そうだな。
とりあえず、俺があいつらを扱いておくか」

男は呟きながら扉へと歩いて行く。

「あなたの目的は一体なんなの？
どこまで知っているの？」

呆然とエヴォリアは呟く。
それは問いかけているのではなく、事実として受け切れないからだ。
男がなぜそこまで知っているのか。

なぜ時間樹を自在に使えるのか。

「ジルオルにも会いに行かないとな。
さてさて、どちらが残るかな？」

そう言つて、男は愉快に笑う。

「ああ、それから……」

アレから亡霊は静かにしているか？」

「貴方が私の前に現れてから何も言わなくなつたわよ？」
「ほう！」

だが、それは当然と言えば当然か。
魂だけだと俺が誰かよく解るようだ」

男はその言葉に少し驚いたように見えた。
だが、男はエヴォリアに脅迫していた亡霊共が歓喜していることに
気づいていた。

彼女に憑いていた亡霊……

それは神々の亡霊だ。

神代の時代にジルオルに殺されて魂だけの存在と成り果て、それで
も力を渴望してジルオルを狙う。

だが、如何せんジルオルの力は強大だ。

亡霊と成り果てた存在が太刀打ち出来る力ではない。

故にそれらは駒を求めた。

ジルオルと戦い、弱らせる事のできる駒を……

だが、誰も殺されたくはない。

故にそう簡単には見つからない、だから亡霊共は一つの手を選んだ。
駒を操るためにそれらは駒の大事なモノを手握ることで成し得た。
その駒がエヴォリアであり、光をもたらす者となった。

だが、亡霊は男の存在に気づいた。

その男が魂に刻まれた本能で何者か知った。

そこから亡霊はジルオルではなく、男に標的を変えた。

勿論、男はそれに気づいている。

だけど男は亡霊を消さずに泳がしている。

男は挑発しているのだ。

殺せるものなら殺してみせろと……

別に男は殺し殺されを咎める様な聖人君子ではない。

それなのに男が亡霊や理想幹神の邪魔をする理由は一つだけ存在している。

それは男が世刻望を嫌っている理由と同じだった。

「そつだ、亡霊と馬鹿に対する武器を渡しといてやるよ。

一度きりだからうまく使えよ?」

そう言つて男は部屋から出たところで最後にエヴォリアに何かを投げて消え去った。

彼女はそれを受け取ると渡されたものがなにか見てみた。
それはただの棒切れのようだった。

「なにこれ?

これで一体どうしろつてのよ……?」

彼女の呟きに答える声はなかった……

「本当に何者なのかしらね?

目的が分からないわね。

計画名も意味不明だし、なんで反逆なのかしら?」

エヴォリアは興味を抱いていた。

男は名も名乗らない。

目的も不明。

でも何処かで彼を知っている気がした。

それはエヴォリアだけでなくベルバルガードもそう感じていた。
最近出会う前から……

いや、むしろ生まれる前から知っている気がした……

「どちらにしても助かったのは確かね。

借りは返さないかね。

その後はどうしようかしら？

亡霊共も何処かに行ったようだし……

意味もなく、旅をするのもいいかもしれないわね」

エヴォリアは楽しそうに笑う。

いつもの眉を潜めた、しかめ面ではない。

見た目相応どころかそれ以上に幼く見える。

エヴォリアはまるで少女のように笑っていた。

文字通り、憑き物が落ちた笑顔だった。

「彼が誰か知るのもいいかもしれないわね。

ベルバも喜ぶかもしれないし」

ベルバルガードは強者と戦えることでエヴォリアに加わっている。

本心では他に何かを抱えているようだが、エヴォリアはその内容までは知らない。

それでも彼女はベルバルガードに手助けしてもらった恩を返したいのだ。

「何にせよ、先ずは約束を守らないかね。

死なない程度に足止めさせてもらうわね。

全力でやれるって本当に気分がいいわ」

エヴォリアは神剣を構えて、マナを収束させる。
魔法が発動する寸前まで準備した。

扉の前の前にまで来ている存在に気づいたからだ。

「さあ、入ってらっしゃい」

エヴォリアはそう言うと同時に扉が開いた。

世界が軋み、揺れ始めていた。

これまでに経験したことがない事態が世界を揺るがしていた。

それが一旦収まり、それと同じくして塔からミニオンが溢れでていた。

それも支えの塔をメインにそれを守護せしめんと行動していた。

それは旅団の一員が、支えの塔が光をもたらす者に占拠されたと知るには十分だった。

学園に集まっていた旅団は塔を取り戻すために次第にグランドへと集まってきていた。

最後に世刻が来たところで裕樹を除いた全員が集まった。

「裕樹はどうした？」

「それが何処にもいないんだ」

「なんじゃと!？」

世刻の言葉にさして驚きを見せずにサレスはさらに言葉が続けた。

「居ない者を気にしても仕方がない。

今は塔を取り戻すのが先だ」

「そうね、どうなってるのか知らないけど、これはやばそうな気がするわ」

「いくわよ、みんな」

沙月の言葉に一斉に駆け出していく。

けれど、サレスは世刻と永峰を呼び止める。

「お前たちは此処にいる」

「何故!？」

「この間ナーヤから言われているだろう。」

お前たちは戦いを止める」

「だけど。俺達がいないと…!」

「戦力が足りない?」

「その通りだろう!」

その言葉にサレスは大きな溜息をついた。

「お前たちの力など無くても我々だけで何とか出来るさ。

今までと何も変わらない。

さらにカティマとルプトナがいる。

戦力ならばこれだけで十分だ」

最後に、裕樹もいることだからな…と加えた。
その言葉に世刻は奥歯を噛み砕かんほどに噛み締めていた。
それを見て、サレスは何も言わずに塔を目指して走りだした。
永峰はそれをただ見ているしか出来なかった。

「俺は……」

俺は、足手まといなんかじゃない……

役立たずなんかじゃない！」

それはまるで自分に言い聞かせるような嘆きだった。
そこにある言葉が世刻の耳に入った。

「その通りです。」

貴方は自分を認めないような奴の言う事を聞く必要などありません。

「貴方には力があるのですから、それを見せばいいのですよ」

「そうだ、その通りだ……」

俺には力が有るんだ。

それを見せてやればいいんだ……」

「望ちゃん……？」

不意に態度が変わり、何かを呟き始めた。

世刻は永峰などもはや意識していない。

『都合よく、それを振るう相手がいるのですから』

「そうだ、ミニオンがいる……」

そいつらを殺せば、サレスも認めずにはいられないはずだ」

『そう、ならば行きなさい』

呟きながら、世刻は立ち上がり、両の手に神剣『黎明』を握る。

「おおおおおおおおおおおおお！」

関の声を雄々しくあげながら、世刻は駆け出した。

永峰の存在を気にもせずに、いることにすら気づかず、に走り去った。

永峰はその姿を呆然と見ることに出来なかった。

ふ、ふ、ふ、
う、ふ、ふ、
ふ、ふはははは。

あははははははははははは。

あははは、
はははは、
はははははは」

その姿を見て、嘲笑が辺りに響く。

哀れだと、滑稽だと、愚かだと……

けれど、永峰がそれが聞こえてはいなかった。

ただ勝手に世刻が暴走したとしか見えなかった。

永峰はその場にへたり込んだ。

すでに見えなくなつた世刻の後ろ姿を見るように、呆然としていた。目からは一筋の涙が零れていた。

永峰はただ一言、ダメ、望ちゃん……と呟いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3182m/>

聖なるかな～魂の救済～

2011年10月13日19時50分発行